

263.3-139



1200501353173

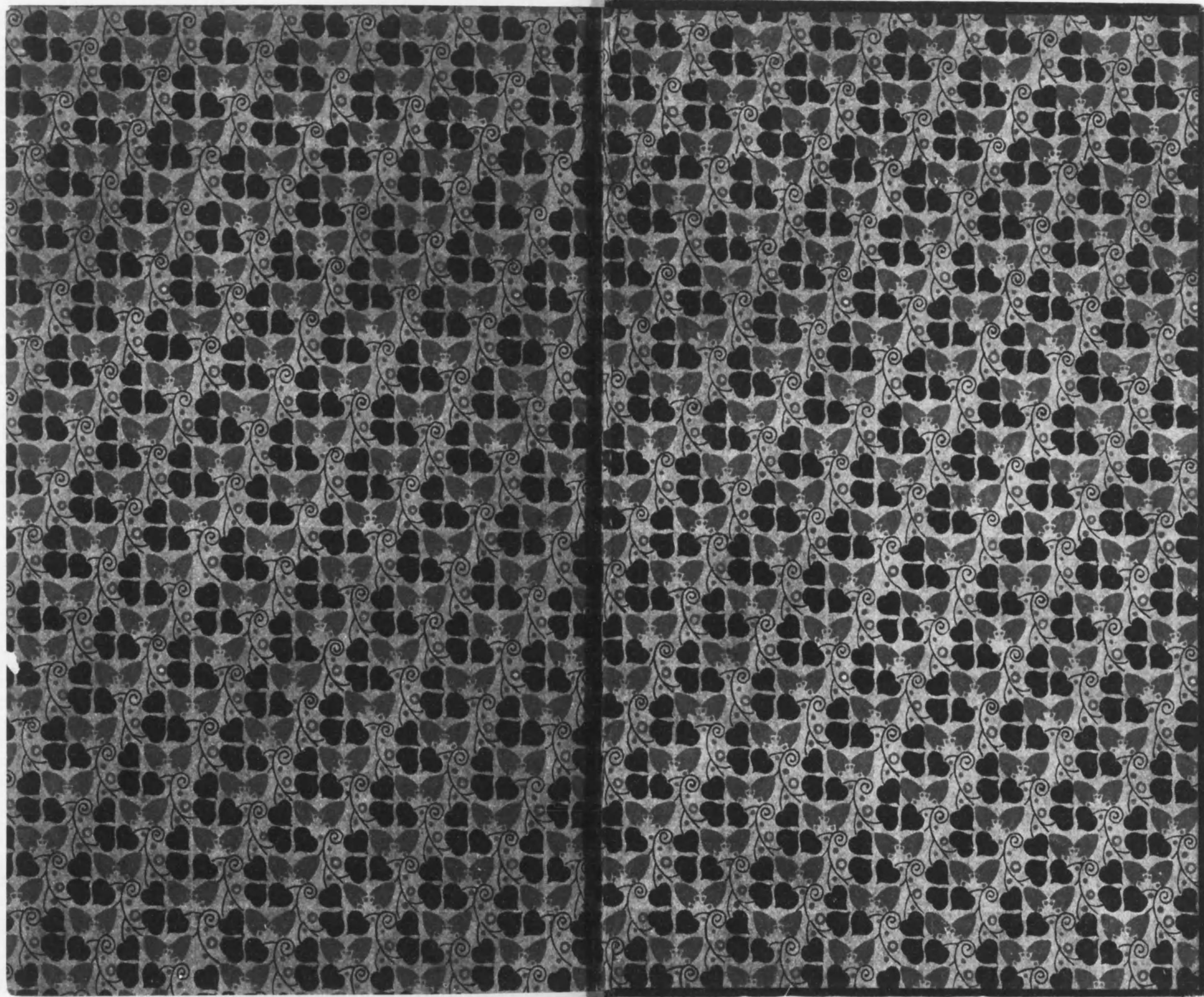
263.3

139



始





2633-139



地方的手工教材

全

大正
7.5.16
内交

東京高等師範
學校教授

岡山秀吉
伊藤信一郎著

金港堂書籍株式會社發行

序言

晩近の教育思潮は益々手工科の必要を認め、苟も教育の完全を期せんには必ず手工を以て重要教科の一に數へざるべからずとなし、これが教授も既に理論研究の域を脱して、今や漸く内容の整理に移り、實質の改善に入らんとせり。而して將來の手工教育上革新すべき所少からずと雖も、其の最も急を要する所のものは教材の整理これなり。從來の教材に地方的のものを加ふるの必要なることは、夙に識者に依つて盛に唱導せられたれども、未だこれに關する一書をも見ること能はざるは、思ふに其の研究調査に多大の困難が伴ふ故ならん。

余これが研究をなすこと年久しけれども、微力にして猶ほ盡さざる所多し。然れども切に勸めらるるがままに敢て其の一斑を公にし、以

て手工科教授の参考に供せんとす。若し多少斯道の改善に資する所
あらば望外の幸なり。

本書は公務多忙の餘暇を以て整理したるものなれば、幾多不備の點
あるを免れず、後日閑を得て更にこれが研究を遂げ、識者の助力と相俟
つて増訂の機あらんことを望む。

凡そ實技に關する事は、特に周到なる説明に明細なる挿圖を加へざ
れば、其の價值の一半を没却するものなり。本書は聊かこの點に留意
せりと雖も、尙ほ其の意味の徹底せざる所少からざらんことを恐る。
又教材は努めて實用的方面に取り、記述は一般的の手工として知らる
るものは多くこれを省略せり。

本書の編纂に當りては、多數各位の同情に負ふ所少からず、殊に恩師
東京高等師範學校岡山教授が、劇職の御身を以て能くこれが指導校閱

の勞を給はりしこと、著者の深く光榮とする所なり。謹んで茲に記し
て以て謝辭となす。

大正六年秋九月

岐陽の寓居にて

伊藤信一郎識す

地方的手工教材目次

第一章 蔓細工

意義	一
目的	一
材料	一
主要材料	一
蔓	一
防已	青葛藤・大葛藤・編編葛・蓮葉葛	一
木通	木通・三葉木通	三
藤	四
補助材料	五
竹	五
木	五
針金	六

目次

紙	六
漂白劑	六
漂白粉	六
硫黃Ⅱ亞硫酸瓦斯	八
染料	九
蔓の需要法	一一
蔓の採集法	一一
蔓の處理法	一二
選別	一二
除皮	一三
漂白	一四
水晒	一四
藥晒	一五
瓦斯晒	一七
蔓の節削	一九
剝蔓と其の製法	一九

色蔓と其の製法	一九
---------	----

工具	二〇
----	----

獨用具	二〇
-----	----

小刀	二〇
竹削臺	二〇
鉄	二〇
竹尺	二〇
篋	二〇
布	二〇
共用具	二〇

水槽	二〇
蔓裂	二一
編型	二三
晒箱	二三
教授上の注意	二三
教材	二四

目次	三
----	---

六淡路土瓶敷.....二五
 圓綠三淡路土瓶敷.....二六
 卷綠圓形土瓶敷.....二七
 蝦背土瓶弦.....二七
 蝦背綠圓形土瓶敷.....二九
 蝦背綠五角土瓶敷.....三〇
 格子組底角籠.....三一
 井桁組底楢圓形石鹼籠.....三二
 放射組底楢圓籠.....三五
 花籠.....三六
 放射組底圓形菓子器.....三七
 放射組底卷綠楢圓籠.....四〇
 手提小籠.....四二
 圓形貼底卷綠菓子盆.....四二
 板底卷綠角盆.....四三
 圓形絡組底菓子器.....四三
 楢圓形絡組手籠.....四六
 宗籠.....四八
 花挿籠.....四九

第二章 羊齒細工

蟬形花挿籠.....五一
 蓋附菓子器.....五六
 放射組底圓形手籠.....六一
 蓋附筒形提籠.....六五
 果物籠.....六八
 角形卷手籠.....七三
 麴形手提.....七五
 旅行用「バスケット」.....七九

意義.....八六
 目的.....八六
 材料.....八六
 主要材料.....八七
 羊齒.....八七
 大羊齒.....八七

小羊齒	八七
雄羊齒	八八
温氣羊齒	八八
兩面羊齒	八八
姫鹿	八九
犬鹿	八九
麩	八九
補助材料	九〇
染料	九〇
軟化劑	九〇
炭酸曹達	九〇
苛性曹達	九一
苛性加里	九二
醋酸	九二
厚紙	九三
板	九三
膠	九四
護膜膠	九四

醋酸膠	九四
「フオルマリン」膠	九四
糊	九四
磐石糊	九四
護膜糊	九四
針金	九五
釘	九五
羊齒の採集法	九五
羊齒の處理法	九七
選別	九七
乾晒	九七
軟化	九八
熱湯軟化法	九八
「アルカリ」軟化法	九九
醋酸軟化法	一〇〇
著色	一〇〇
羊齒板の製法	一〇二

工具

獨用具

竹尺	一〇三
小刀	一〇三
小鋸	一〇三
小鉋	一〇四
金鏈	一〇四
錐	一〇五
共用具	一〇五
竹削臺	一〇五
撓木	一〇五
蒸煮器	一〇五

教授上の注意

教材

土瓶敷	一〇八
繪葉書挾	一〇九

第三章 目次

杞柳細工

寫真挾	一〇九
額縁	一一〇
短冊掛	一一〇
狀差	一一一
卷煙草入	一一一
角盆	一一二
花筒	一一二
煙草盆	一一三
石鹼籠	一一三
棉圓形湯籠	一一五
花籠	一一六
棉圓形花籠	一一七
「バケツ」形手籠	一一九
茶碗籠	一二〇
果物籠	一二一
炭籠	一二三
杞柳細工	一二四

意義	一二四
目的	一二四
材料	一二四
主要材料	一二四
杞柳	一二四
細葉	一二五
中葉	一二五
大葉	一二五
補助材料	一二五
麻絲	一二五
竹	一二六
蔓	一二六
「ツツク」	一二六
皮	一二六
金具	一二七
杞柳の栽培法	一二七

目次

土質	一二七
整地	一二七
挿植	一二八
中耕	一二九
除草	一三〇
施肥	一三〇
摘芽	一三〇
蟲病害	一三一
杞柳の採集法	一三二
冬刈	一三二
夏刈	一三二
杞柳の處理法	一三三
假植	一三三
除皮	一三三
乾晒	一三四
選別	一三四
漂白	一三五

剝柳と其の製法

工具

獨用具

共用具

竹尺……………一三六

小刀……………一三六

竹削壺……………一三六

柳割……………一三六

柳引……………一三七

幅桶……………一三八

水槽……………一三九

霧吹……………一三九

編型……………一三九

手鎌……………一四〇

盤板……………一四〇

差板……………一四〇

踏板……………一四〇

教授上の注意

教材

弓……………一四〇

行李庖刀……………一四一

槌……………一四一

鋏……………一四二

針……………一四二

晒箱……………一四二

圓形菓子器……………一四三

楕圓形菓子器……………一四五

屑籠……………一四五

湯籠……………一四八

花挿籠……………一五〇

角籠……………一五二

蓋附角籠……………一五三

手提籠……………一五七

盛籠……………一五九

第四章 麥稈・經木細工

辨當入……………一六二

行李……………一六四

旅行用「バスケット」……………一六七

意義……………一七三

目的……………一七三

材料……………一七三

 主要材料……………一七三

 麥稈……………一七三

 經木……………一七四

 補助材料……………一七六

 漂白劑……………一七六

 染料……………一七七

 紙……………一七七

 糊……………一七七

竹……………一七七

笠菅……………一七七

麥稈の採集法……………一七八

麥稈及び經木の處理法……………一七八

 調製法……………一七九

 漂白法……………一七九

 麥稈の漂白法……………一八〇

 經木の漂白法……………一八一

 選別法……………一八二

 染色法……………一八三

工具……………一八五

 獨用具……………一八五

 篋……………一八五

 小刀……………一八五

 鋏……………一八五

 裁板・裁定規……………一八六

共用具

押切……………一八六

晒箱……………一八六

選程器……………一八六

等別器……………一八七

染鍋……………一八七

轆轤……………一八八

掛棒……………一八九

麥稈經木細工の種類……………一八九

眞田……………一八九

普通物……………一八九

變り物……………一九〇

菱物……………一九〇

平物……………一九〇

角物……………一九〇

細工物……………一九〇

助類……………一九〇

教授上の注意

教材

組物……………一九一

平編……………一九一

丸編……………一九一

貼附……………一九一

教授上の注意……………一九二

教材……………一九四

四本菱……………一九四

三平……………一九六

五平……………一九七

七平……………一九八

五角……………一九八

七角……………一九八

丸籠……………一九八

被蓋角籠……………一九九

蟲籠……………二〇〇

手提籠……………二〇一

絲卷……………二〇三

第五章 藁細工 二〇四

意義 二〇五

目的 二〇五

材料 二〇五

主要材料 二〇五

藁 二〇五

補助材料 二〇五

日本紙の反古紙 二〇五

布片 二〇五

藁選擇の要件 二〇六

藁の處理法 二〇六

藁の選り方 二〇六

藁の打ち方 二〇六

目次

實子の抜き方 二〇七

工具 二〇七

共用具 二〇七

藁打臺 二〇七

藁打槌 二〇七

掛棒 二〇八

緒通 二〇八

袂 二〇八

教授上の注意 二〇八

教材 二一一

蠶簿 二一一

把藁 二一一

實子箒 二一一

繩 二一二

釜敷 二一四

草履 二一五

草鞋 二一八

附録 材料の概價 三三
 工具の概價 三三

目次終

地方的手工教材

岡山秀吉校閱
 伊藤信一郎著

第一章 蔓細工

意義 蔓細工は諸種の蔓を用ひて土瓶敷籠等の實用品を作る細工なり。

目的 本細工に於ては、其の製作法を知らしめ、材料に關する觀念を授けると共に、意匠を練り、副業的思想を養ふを以て要旨とす。

材料 この細工の主要材料には蔓を用ひ、補助材料には竹・木・針・金・紙・漂白劑・染料等を要することあり。

蔓 蔓は、主として防已ツツラフチ・木通蔓アケビ・籐フヅを使用すれども、この外韌性に富み且細くして屈曲し易きものは、何にても採つて用ふることを得べし。

防已 防已には、青葛藤アヲツツラフチ・大葛藤オホカヅラフチ・蝠蝠葛カヅラフチ・蓮葉葛ハスノヘカヅラの四種あり。就中蔓細工には、青

防已

葛藤及び大葛藤を好しとす。是等の蔓は何れも其の性柔靱なれば、籠を編み物を捲き土瓶の手・土瓶敷・篩・負籠等を作るに用ふ。皮は其の纖維頗る強く麻に代用することを得べし。

青葛藤

青葛藤は、又つづらつづらふぢあをかづらつづらかづら等と稱し、防已科に屬する蔓生木質狀の多年生草本なり。原野に多く生育し、他物に纏繞して能く成長す。莖は綠色にして細長く、葉は卵形若くは心臟形にして互生し、大小形狀同一ならず、五六月頃葉腋に圓錐花叢を出し其の長さ一寸より三寸に達す、雌雄株を異にして淡青色の小さき花を綴る、實は青黑色にして其の形圓く大さ三分許なり、根及び莖は藥用に供せらる。本州・四國・九州・臺灣・朝鮮・支那・菲律賓等に多し。

大葛藤

大葛藤は、山地に自生する防已科の多年生草本なり。莖は蔓生にして長く延び、葉は長柄にして二・三寸の長さに達し、廣卵形・多角形・戟形等をなす、夏日葉腋に花莖を生じ、複總狀花序をなして淡綠色の小花を開く。本州・四國・九州等に生育す。

蝙蝠葛

蝙蝠葛は、防已科に屬する多年生の草本にして他物に纏繞して各地に自生す。

蓮葉葛

葉は長柄を有する楕形をなし、上面平滑にして下面には僅か毛を有す、通常三乃至七角形をなし、時として裂片をなすことあり、夏日淡黄色の圓錐花叢を生じ、蔓は稍、黒色を帯ぶ。本州・北海道・朝鮮・支那・西伯利亞等に能く生育せり。

蓮葉葛は、又犬葛イヌツツラ千金藤等と稱し、防已科に屬する多年生の纏繞草本にして山地に自生す。莖は灌木狀をなし、葉は卵形又は稍、三角形を呈し、楕形全邊なり、長柄を以て互生し、葉柄葉の裏面に附きて葉裏白色を帯ぶ、夏日葉腋に花梗を生じ、繖形花叢をなす、花は淡黄色にして形小し、花後核果を結ぶ。性温帶地方及び熱帶地方を好み、本州の南部・四國・九州・琉球・臺灣・支那・南洋・印度等に能く叢生す。

木通

木通は又通草とも書き、これに常緑木通・木通・三葉木通の三種あり。蔓細工に用ふるものは、木通及び三葉木通にして、三葉木通は其の蔓特に勝る。

木通

木通は、木通科に屬する蔓生の灌木なり、能く温帶地方の山野に叢生し、葉は掌狀複葉にして五つの小葉より成る、大なる葉は其の長さ四・五寸に達し、小葉は楕圓形をなして全邊なり。初夏の候淡紫色の單性花を開く、雌雄同株にして多數の小さき雄花と少數の大なる雌花とを開く。實は形狀瓜の如く長さ二寸餘に及

ぶ、秋期に至り熟すれば其の皮紫色に變じて縦に裂け、白き肉を露はす、其の味極めて甘く採つて食用に供す。種子は黒色をなし、これより油を製す、又蔓葉・實を薬用とすることあり。本州・九州・朝鮮支那等に生ず。

三葉木通は、山野に多く自生する木通科の蔓生植物なり。葉は三個の小葉より成り、卵形又は廣卵形を呈す、通常粗き鋸齒状をなせども、又全邊のものあり。四月頃總狀花叢の小梗を出し、淡紫色の小花を開く、單性花にして通常同一の花軸に數個の雄花と一個の雌花とを附く、雌花は其の花被著しく大なり。實は長楕圓形にして厚き果皮を有し、熟すれば縦に裂けて白色の果肉を露はす、採つて食用に供すべし。本州及び九州北海道等にあり。

防已は品質優良にして軟く節低けれども、木通蔓は其の性稍硬く節高くして多少加工に困難なり。皮を剥ぎて漂白したるものは何れも色白く、手提鞆「パスケット」籠類・盆菓子器・下駄表・玩具等の製作に用ひらる。青森・長野二縣の産最も名高く、静岡・滋賀・秋田・山形・巖手等の産も亦知らる。

藤 藤は、棕櫚科に屬する蔓生植物「Calamus」の幹なり。能く熱帶地方

に生育し、本邦に於ては臺灣及び琉球に産す、幹は圓筒状にして枝なし。其の形狀は恰も竹の如く、細長くして節を有し、細きは絲の如く太きも直径寸餘に過ぎず。叢生して地上を這ひ又樹間に懸り、蔓延上下して數百尺の長きに達するものあり。葉は羽状をなし、六尺に及ぶ。肉皮共に強韌にして種々の器具に用ひ、其の用途極めて廣し。本邦に輸入するものは、長さ六尺乃至二丈許にしてこれに原形のままの丸藤と二つ又は四つ割にしたるものとあり。又皮藤と肉藤との別あり、皮藤は肉部を去りたるものにして、其の表面黄白色を呈し一種の光澤を有す。椅子・寢臺等を編み、籠行李を作り、晒して下駄表となし、傘・工具の柄を捲く外諸種の用に供せらる。彼の重藤の弓と稱するものは、これを以て幹を捲きたるものなり。肉藤は皮部を剝離したるものにして主として椅子の心木及び籠の縦に用ひらる。本邦に於て使用するものは、多く英領海峽植民地より輸入せられ、これに暹羅・瓜哇・呂宋・木瓜等の別あり。

竹 竹は、淡竹又は苦竹を好しとす。こは製品の手及び縁となし、又力竹等に用ふ。

木

木は、概ね厚さ二分許の薄板を用ふ。こは主として底板及び後板に用ふ。用途に應じ適宜のものを選ぶべし。

針金

針金は、通常亞鉛引鐵針金又は眞鍮針金を用ふ。其の太さは、二十番乃至三十番線を適度とす。こは土瓶弦の鈎の如く、針金を用ふるを便利とする所に使用す。

紙

紙は、ボール紙及び裝飾用紙を用ふ。こは紙と蔓とを結合せる製品に使用せらる。

漂白劑

漂白劑は、諸種の纖維及び染料中に含まるる色素を無色とするに用ふる藥品なり。其の用途によりて種々あれども現今最も普通に用ひらるるものは、漂白粉、次亞鹽素酸曹達、次亞鹽素酸、マグネシウム、過酸化水素、亞硫酸瓦斯等なり。これに酸化作用によりて漂白せらるるものと、還元作用によりて漂白せらるるものとあり。前者は、漂白粉、次亞鹽素酸曹達、次亞鹽素酸、マグネシウム、過酸化水素等にして、後者は硫黃の燃焼より生ずる亞硫酸瓦斯なり。是等は多少其の用途を異にすれども、本細工に於ては専ら漂白粉及び硫黃を用ふ。

漂白粉

漂白粉は、又晒粉、クロールカルキ、クロール石灰、次亞鹽酸石灰等と稱し、單に「カルキ」と云ふことあり。こは消石灰に三十度以下の溫度にて鹽素を吸收せしめて生成したる混合物にして、約三〇乃至四〇%の鹽素を含む。粉狀又は粉碎し易き小塊をなし、曇白色を呈して常に少量づつの有毒なる劇臭を放つ。強きアルカリ性にして、能く冷水に溶解し、頗る不安定の物質なり。潮解性に富み、空氣中の濕氣及び炭酸瓦斯、日光等のために次第に分解せられて鹽素を失ふ。然ればこが貯藏には密封して暗く且冷かなる所に置くべし、殊に其の溶液は、一層速に分解して漂白力を減失するものなれば、成るべく新しきものを使用すべし。こが使用に當りては豫め其の漂白力を檢し、決して長く貯藏すべからず。其の溶き方は先づ少許の水とともに漂白粉を捏ね塊粒を能く碎きて泥液となし、更に適量の清水を加へて充分に攪拌し暫時放置すべし。斯くて不溶解物の全く沈澱したる後、靜に其の上澄液を取り、若くは濾過して使用に供するものとす。其の濃度は、通常二乃至三%を適度とす。この溶液中に被漂白物を浸漬すれば、次第に白くなり、一、二時間にして遂に純白色となる。斯くて漂白せられたるも

古來染色に用ひられし染料は、天然に色素を有する草木又は礦物、或る種の動物等より採取せしものなれども、今より六十餘年前即ち西曆一八五六年英人「パークキン」が偶然に「アニリン」より紫色の染料を製出せり、これ人造染料の始めなり。其の後多くの學者によりて研究せられ、天然藍に代るべき人造藍「マダー」に代るべき「アリザリン」等の外、天然に得られざりし色相の染料をも製出し、今や其の數約一萬に上れり。是等の人造染料は「コールタール」より分餾せらるるを以て又「コールタール」染料と稱し、これに「アニリン」染料と「アリザリン」染料との別あり。共に色澤鮮麗にして價額低廉なれば、其の用途極めて廣く、殆んどすべての染色にこれを用ひざるものなし。其の性質によりて鹽基性染料・酸性染料・直接染料・硫化染料・媒染染料・酸性媒染染料・還元染料・雜屬染料の數種に分ち、それぞれ其の用途用法を異にす。

染料の製造は、英吉利に於て始まりしも戦前に於ては獨逸の産最も多く、世界の染料全産額の約五分の四を占め、他の五分の一は英・佛・瑞・白・伊等に於て産出せられし有様なり。我が國に於ても近來東京・大阪・名古屋等に於てこれを製出す

蔓の需要

るに至りしが其の産額は極めて少し。從來我が國に輸入せし染料は年額七八百萬圓の多きに達し、其の殆んど全部は獨逸品なりしが、時局のため供給杜絶し、價額著しく暴騰するに至れり。

蔓を染むるに用ふる染料は、洋紅、オーラミン、紫粉、青竹粉、茶粉、ログードエキス等の數種なり。

蔓の需要法 蔓も、他の材料と同じく適當に調製せられたるものを購入して使用するを便利とすれども、籐を除くの外は未だ其の採集法すら知悉せられざる有様なれば、今直にこれを他より求むることの困難なる地方少からざるべし。然れどもこは各地殆んど到る所に生育すれば、容易に採集せらるる地方にありては、便宜上級兒童に命じて採集せしめ、若しこの方法に依り難き地方にありては、各町村の青年會・農會若くは篤志家によりて供給の途を開くか、又は青森縣・長野縣・岐阜縣・静岡縣等より取り寄せて使用せしむべし。但採集の時期に購入するを好しとす。

蔓の採集

蔓の採集法 防已・木通蔓等は各地の山野に自生すれども、其の地質及び位置

によりて質量に良否多少の別あり。殊に野生の儘にて未だ一度も手入又は採集したることなきものは、概ね蔓太くして硬く製作に困難なり。故に豫め秋冬の候に根許より總刈して、其の翌春に至り母株より細くして精良なる蔓を續出し、地上を這ふて愈々繁茂延長するに至りて鎌にて刈り取るものとす。決して濫拔すべからず。通常其の年に三四尺乃至七八尺の長さに成長すれども、稀には二三丈に達するものあり。細工には、其の年に伸びたる一年生を好しとす。總べて蔓は、盛夏の候に採取したるものは質強靱にして屈曲自在なるのみならず、皮を剥ぎ易く色白くして取扱に便なり。故に優良なる蔓を得んには七月より九月までの間に於て採取すべし。早く取りたるもの及び若き蔓は、未だ充分に成熟せざれば其の質弱く髓心潰れて形を損することあり、然ればこれが採集には新芽の時期を避け、若蔓の部分を切捨つべし。これに反して秋落葉後に取りたるもの及び老熟したるものは、性強靱なれども硬し、故に堅牢を要するものを作るには十月以後に採集するを好しとす。

蔓の處理法 採集したる蔓は、先づ長短細太軟硬優劣によりて選別し、次に皮

蔓の處理法

選別

除皮

を除くものとす。皮を取るには若き蔓は二三日間水中に浸し、表皮の腐爛するを待つて布片にて拂拭水洗する時は容易に除皮することを得べし。斯くして尙除皮不十分なる時は、更に二三日間水中に浸漬したる後、皮を去るものとす。温泉地に於ては、一晝夜間許蔓を泉湯中に入れ置き、自然煮沸をなしたる後三週間許流水に浸して除皮するを常とせり。稍太くして皮の強き蔓は、一・二日乃至十日間許水中に浸漬し、醱酵法によつて除皮するを好しとす。この方法は蔓の少量なる時は直に地面に堆積し、多量なる時は地面に深さ三四尺許の穴を掘りて草又は菰を布き、其の上に蔓を堆積して菰を被ひ、更に土を載せて地面より一・二尺の高さとなし、蔓の醱酵して温くなり表皮の剝脱し易きに至らば、拂拭水洗して除皮するものとす。この際過度に醱酵せしむる時は、蔓の品質を損するの虞れあれば、時々醱酵の程度を檢し、表皮の稍腐爛するを適度として除皮すべし。防已及び木通の老蔓乾蔓等は、大釜の中に入れて三・四時間乃至一晝夜間許蒸煮し、暫時水中に浸したる後皮を除くべし。殊に乾蔓を除皮せんとする時は、豫めこれを一・二日間水中に浸したる後蒸煮すべし。又表皮厚くして強靱なる太き

蔓は、蒸煮後更に醱酵法によりて除皮するを可とす。防已は其の皮強きを以て、麻の如く剥ぎ取ることを得べし。

以上の如くして除皮したる蔓は、更に細太長短軟硬等によりて再び選別し、節削をなしたる後多くは其の儘製作に用ふれども、良質の製品にありては更にこれを漂白するものとす。

蔓の漂白には未だ完全なる方法なけれども、通常行はるるものに水晒薬晒瓦斯晒の三種あり。水晒は、第二選別をなしたる蔓を一夜間許淡水又は白水泥水等の中に浸漬したる後、晒場に運びて日光に晒し、其の上面の乾くや更にこれを反覆して他面を乾燥漂白するものとす。斯くて両面の全く乾くや如露にて潤し又は水中に浸したる後、各部を日光に乾晒すること一日に五六回乃至十回位に及ぶ時は、細き蔓は略中白となるべし。然れども太くして稍硬き蔓は、其の脱色緩漫なれば、數日間これを反覆せざるべからず、勿論細き蔓と雖も其の質硬く且天候不良なる時は、數日に渉るを免れざるなり。

晒場は、日光の直射と通風の好き所とを選びて、これに竹製の晒棚を作るか、又

漂白
水晒

は地面に簀を敷きて其の上に蔓を乾晒すべし。便宜河原砂濱芝原運動場屋上等に不潔物の附着せざる設備をなしてこれに充つるも可なり。又皮を剥ぎたる蔓を雨水に潤ほす時は、淡黒色又は淡紅色の斑點を生じ遂に漂白の可能性を失ふに至るものなれば、努めて雨水の接觸を避くべし。水晒中其の効果の最も著しきものは白水晒及び泥水晒なり、白水は米の炊汁又は糠を水に溶きたるものにして、泥水は粘土を水に溶解したるものなり。乾晒中雨天となりたる時は、蔓を屋内に入れ、水中に浸して天氣の恢復を待つべし、若し過つて蔓を堆積する時は、往々醱酵して著しく其の品質を害するものなれば、絶對にこれを避くべし。而して漂白數日に渉る時は、初め二・三夜は成るべく水中に浸漬し、其の後は夜露を利用して夜晒をなすべし、勿論曇天の際は其の効果なし。水晒に依り難き時は、薬晒又は瓦斯晒を行ふものとす。

薬晒は、薬品を以て漂白する方法なり。これに使用する薬品には種々あれども、最も簡易にして比較的效果の顯著なるは漂白粉なり。こは蔓の軟硬細太老若等によりて其の濃度一定し難きも、通常二・五%許に溶解したる液を用ふ、即ち

薬晒

漂白粉一磅を水一斗に溶きたるものを適度とす。晒水を調製せんには、先づ漂白粉を緻密なる白布にて作れる袋に收め、其の口を固く括りて適量の水中に入れ、徐に揉みて濾過するか、又は前述の如く少量の清水とともに漂白粉を捏ね、能く塊粒を碎きて泥状となし、更に適量の水を加へて適度に稀釋し、充分能く攪拌して不溶解物の全く沈澱したる後、其の上澄液を取りて使用に供すべし。但微細なる粉末と雖も悉くこれを除かざるべからず、これ其の粉末が浮游して蔓に附着する時は、忽ち烈しく其の部分を侵蝕すれば、細くして軟弱なる蔓は乾燥後これがために著しく脆弱となり、遂に使用に堪へざることあり。特に純白を要する時は、其の液中に微量の炭酸曹達を加ふるか、又は更に等量の次亞鹽素酸曹達を添加すれば、其の成績は一層佳良なり。

右の如くして調製したる晒水は、これを浴槽に入れ浸漬に備ふるものとす。浴槽は又晒風呂とも稱し、通常桶又は水箱を用ふ。斯くて豫め清水に潤ほしたる蔓を晒水中に浸漬すること三十分間乃至五六時間に及び、適當に漂白せられたるを待つてこれを引き上げ、清水に浸すこと二時間許にして能く水滌せらる

後陰干となすべし。斯くする時は、良質の蔓は概ね純白色に漂白せらるべし。若し一回にて其の結果思はしからざる時は、更に同一の方法を再三反復すべし。但度数を重ねるに従ひ、蔓は次第に脆弱となり、其の品質を損ずるを免れず。浴槽中に浸漬する時間の長短は主として材質の軟硬、組織の粗密に依りて調節すべきものなり、盛夏の前後に採集したる細蔓は三十分内外、秋に採集したるものは二、三時間を適度とす。但材質の硬き蔓は、濃厚なる晒水中に一晝夜以上も浸漬することあり。この薬晒をなしたる後、更に瓦斯晒を行ふことあり。

瓦斯晒は、亞硫酸瓦斯を以て煙蒸漂白する方法なり。前に述べたる水晒及び薬晒は、雨天の際には行ひ難き缺點あれども、この瓦斯晒は晴雨晝夜を問はず爲し得るの長所あるのみならず、其の結果も極めて良好なれば、蔓麥稈、杞柳等の漂白に盛に用ひらる。すべて蔓は、漂白粉を以て晒す時は稍軟くなれども、亞硫酸瓦斯を以てする時は多少硬化するの傾あれば、物品によつては製作後この漂白法に依るを便利とすることあり。勿論豫めこの方法によつて漂白したる蔓を以て製作するものと、製作後この方法によつて漂白するものと、漂白粉を以て晒

したる蔓を以て製作したる後更にこの方法に依るものとの別あり。
 瓦斯晒の方法は、先づ晒箱の中に清水にて潤はしたる蔓を収め蓋を被ひたる後、小皿に硫黄又は硫黄華を盛りて點火し、これを硫黄燃焼器中に入れて蓋をなす時は、亞硫酸瓦斯は煙導管によりて晒箱の中に導かるべし。斯くて五分乃至十分間許經過したる後、蓋の上面にある四個の氣孔中二個を閉ちて更に燻蒸すること三時間乃至六、七時間に及ぶ時は、蔓は遂に純白色に漂白せらるべし。若し其の漂白不十分なる時は、内部の蔓を如露にて潤はし再び前法を反復すべし。特に多量の蔓を漂白せんとする時は、大なる晒箱を以てするか又は晒小屋を造りて行ふを好しとす。其の方法は、別に異なることなし。

瓦斯晒に於て最も注意すべきは、瓦斯を供給すると共に水蒸氣を供給することこれなり。豫め被漂白物を潤ほすは全くこの水蒸氣を發生せしめんとする手段に外ならずして、若しこれが供給を缺く時は到底充分に漂白すること能はざるべし。故に長時間に亙つて燻蒸漂白せんとする時は、屢これを潤ほすことを忘るべからず。又漂白せんとするものに脂肪、手垢等の附著する時は、漂白作

蔓の節削

用を妨害するものなれば豫め五匁の炭酸曹達を水一升許に溶かしたる一%内外の溶液を以て洗ひ、更に清水を以て充分に洗滌したる後燻蒸すべし。

剝藤の漂白法に就ては、全く工業の祕密に屬し容易に探知すること能はざれども、鹽酸を加へたる漂白粉を以て晒したる後、ハイドル、サルファイト、亞硫酸、醋酸、醋酸等にて處理するもの如し。

蔓の節削 蔓の節削は、蔓の節を削りて二様の太さとなす操作にして、通常材料を木取りたる後に行ふべき工程なり。これを行ふには豫め蔓を水に潤はしたる後、蔓の節部を竹削臺の上に載せ小刀を以て竹を削るが如し根許より梢に向つて削るものとす。こは又屢直に乾蔓に施すことあり。

剝蔓と其の製法 剝蔓は、圓き蔓を剥ぎて表を圓く裏を平にしたるものにして、蔓を節約し加工を自由にするには極めて大切なる操作なり。これを作るには蔓を二時間許水中に浸して軟くしたる後、節を削り蔓裂を以て多くは二つ割とすれども、太くして精良なる蔓は三つ割、四つ割とすることあり。

色蔓と其の製法 色蔓は、玩具及び著色したる製品を作るに用ふ。こは所要

色蔓と其の製法

剝蔓と其の製法

の染料を水又は湯に溶き、其の單液若くは合液を以て、漂白したる蔓を適宜の色に染むるものなり。この際熱を加へつつ染むる時は、一層速に濃厚なる色彩を得べし。

工具

獨用具

工具 蔓細工に用ふる工具は、獨用具として小刀、竹削臺、鉄、竹尺、篋、布等を要し、

小刀

小刀 小刀は、身幅五、六分許の切出小刀を好しとす。こは節削をなし、又は蔓の先端を削り、若くは切斷するに用ふ。

竹削臺

竹削臺 竹削臺は、小刀と相俟つて蔓の刀削切斷に使用す。

鉄

鉄 鉄は、専ら蔓及び紙を切るに用ふ。紙細工用唐鉄又は長さ四、五寸許の唐鉄を好しとす。

竹尺

竹尺 竹尺は、長さを測るに用ふ。一尺指五厘目附を好しとす。

篋

篋 篋は、製品の編み方を整へ、又は蔓を通ほす孔を穿つに用ふ。長さ四寸直徑一分餘にして一端の尖れる竹針にて可なり。

布

布 布は、潤ほして蔓に水分を與へ、又は机、工具、手等を拭ふに用ふ。古き、タオ

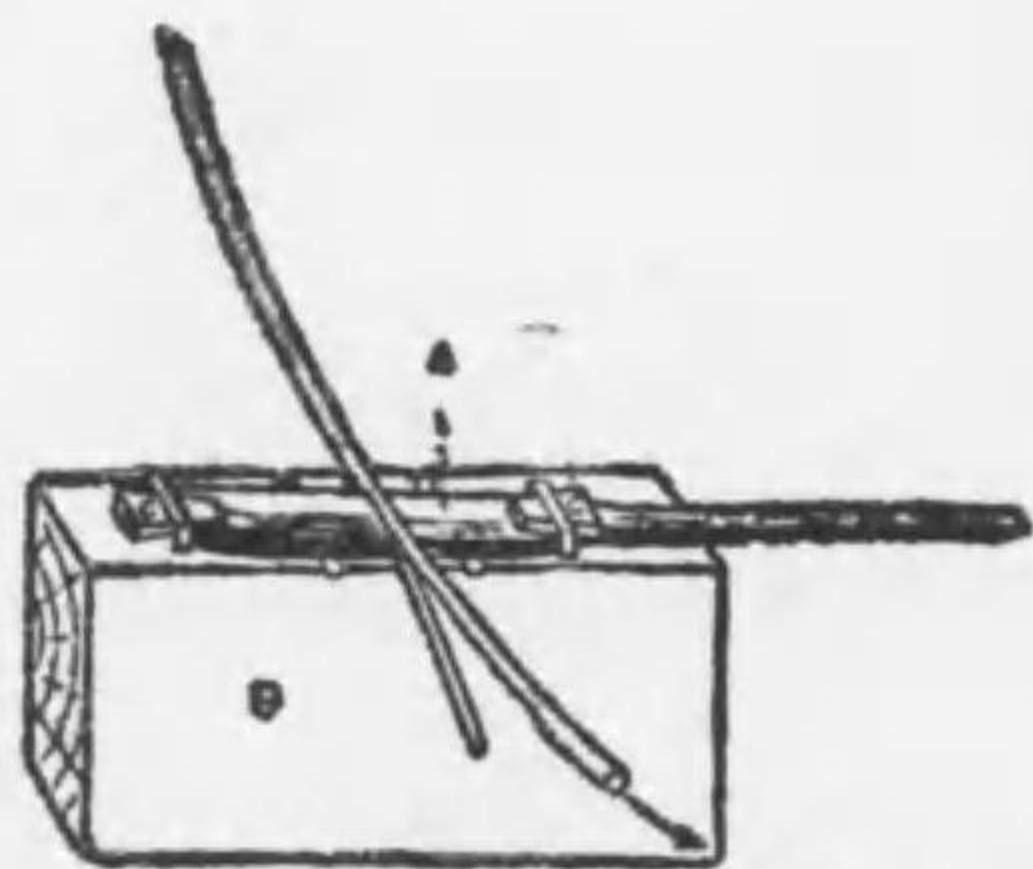
共用具

水槽

水槽 水槽は、主として蔓を水に浸すに用ふ。「バケツ」を用ふるを便利とすれども、浴槽と兼用せんには特に大なる水桶又は水箱を備ふべし。

蔓裂

蔓裂 蔓裂は、剥蔓を作るに用ふ。其の形状及び構造には種々あれども、圖に



示すが如きもの最も簡便なり。Aは刃物にして、剃刀の廢物を用ふるを好しとす。Bは長さ四、五寸幅一寸高さ一寸五分許の臺木にして、櫛の如き堅木に鋸を打ち又は針金、鋸金等を捲きて刃物を支へ、其の中央には臺木に直接、若くは其の部分に鐵、真鍮等の鋸金を張りて、大小二、三個の半圓形の溝を設け、蔓の通路となせり。Cは楔にして刃物を固定するの用をなす。

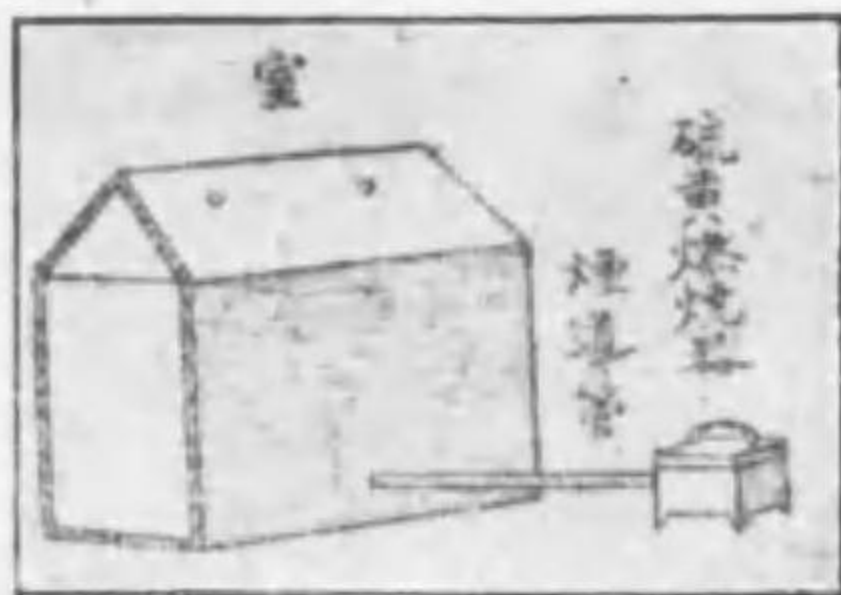
これを使用するには、先づ刃物を装置したる臺木を取附萬力に挟みて固定するか、又は便宜の方法を以て動かざるやうにしたる後、能く潤ほしたる蔓の一端を刃物に載せ、其の上に布を被ひて左手の拇指にて輕

く刃先を抑へつつ手前に引く時は、蔓の一端は圖に示すが如く容易に剥がれて二つとなる。然ればこれを右手にて持ち、手前に引きて次第に剥離すべし。普通には二つ割となせども、太くして精良なる蔓は三つ割四つ割となすことを得べし。刃物は、成るべく鋭利に研ぐを要す。

編型 編型は、籠、バスケット等を作るに當り心とするに用ふ。木又は亞鉛鐵板にて所要の形狀に作りたるもの若干を用意すべし。

晒箱 晒箱は、蔓、麥稈、杞柳等を亞硫酸瓦斯にて燻蒸漂白するに用ふ。其の構造は用途によりて一定せざれども、通常使用するものは圖に示すが如く室、硫黄燃燒器、煙導管の三部より成る。

室は、概ね杉又は縦の四分板にて作り、蓋と實とより成る。實は長さ二尺七寸幅一尺六寸高さ二尺許を適度とし、底より二寸許の所に竹の棧を架し以て漂白すべき物を積むに備ふ。蓋は實に適合するやう寄棟に作りて露の落下を防ぎ、其の上面には前後に四個



の氣孔を設く。

硫黄燃燒器は、葉鐵又は亞鉛鐵板を以て高さ五寸幅六寸許の箱形に作り、これに被蓋を附くるかまたは引戸を設け硫黄皿の出入に便す。底には、氣孔を穿てり。

煙導管は、亞硫酸瓦斯を硫黄燃燒器より室に導く管にして、硫黄燃燒器の側面上部より室の棧下に通ず。亞鉛鐵板、葉鐵、竹等にて作り、長さ一尺内外直徑一寸許を適度とす。

教授上の注意

教授上の注意

- 一、蔓細工は、尋常小學第四學年以上の教材として課するに適す。
- 二、蔓細工は、材料柔靱にして頗る加工に便利なるのみならず、製作品は極めて多種多様にして製作上の變化に富み、趣味多く教材の選擇に自由なる上、意匠を練り工夫構成の力を長ずる等其の價值頗る大なれば、これが教授には特に力を注ぐべし。

三、初步に於ては、軟くして稍、細き蔓を用ひて簡單なるものを作らしめ、漸次

籠類の編み方に及ぼし、遂には各種蔓類の採集法及び處理法の一般を授け、兼ねて生産的副業思想の養成に努むべし。

四、柔靱にして屈曲自在なる蔓は、何れも採つて使用することを得るものなれば、特にこれが研究利用に努むべし。

五、本細工は、其の製法稍困難なれば、豫め示教圖によりて其の製法を説話し、且實地に示範してこれが指導を怠るべからず。

六、總べて蔓は、水に浸して軟くしたる後使用すべし。

七、製作中蔓の乾きたる時は、其の都度水に潤ほして軟くすべし。

八、蔓を折損割裂し又は切斷せしめざるやう、特に注意せしむべし。

九、蔓を成るべく經濟的に使用せしむべし。

一〇、籠類の編み方を授くるに當りては、常に竹籃細工との關係を明にし、以て其の基礎練習を爲さしむべし。

一一、編蔓及び卷蔓の繼ぎ方を授くべし。

一二、籠類を編むには、能く蔓を締めて成るべく隙間なからしむべし。

教材

六淡路土瓶敷

教材

一三、總べて製品は、美的に製作せしめ、且意匠を加へしむべし。

一四、特に理科との連絡を保ち、紐結との關係を親密にすべし。

一、六淡路土瓶敷 六淡路土瓶敷を作るには、防已若くは木通蔓の特に精良なるものを選びて長さ九尺許に切り、節を削りて水に浸し充分軟くしたる後、一圖



に示すが如く先づ一つの淡路結を作りてこれを單位とし、順次右廻に淡路結を連續して二圖の如き形狀となすべし。但二つ目以下の作り方は、稍單獨の場合と異り左方の輪を作る際必ず其の前の單位の蔓を

潜らしめ且其の右方の輪の上に重ねるやうにすべし。終の結は最後の輪を作る時最初の單位の左輪の背後より蔓の左端を抑へて連續し、互に隣接せる蔓は一平面上にの狀をなして何れも同様の組織となすことに注意すべし。斯くて能く其の形を整理して對角線の長さを三寸五分許となしたる後、其の内側を前

と全く同様に抑潜して複線となし、不用の蔓を切捨つべし。若し蔓の短き時は、便宜目障のせざる所に於て繼ぎ足し、完成後槌にて能く其の形を打ち均らすべし。

これと同一の方法によりて、三淡路・四淡路・五淡路・七淡路等の土瓶敷を作ることを得べし。

圓縁三淡路土瓶敷

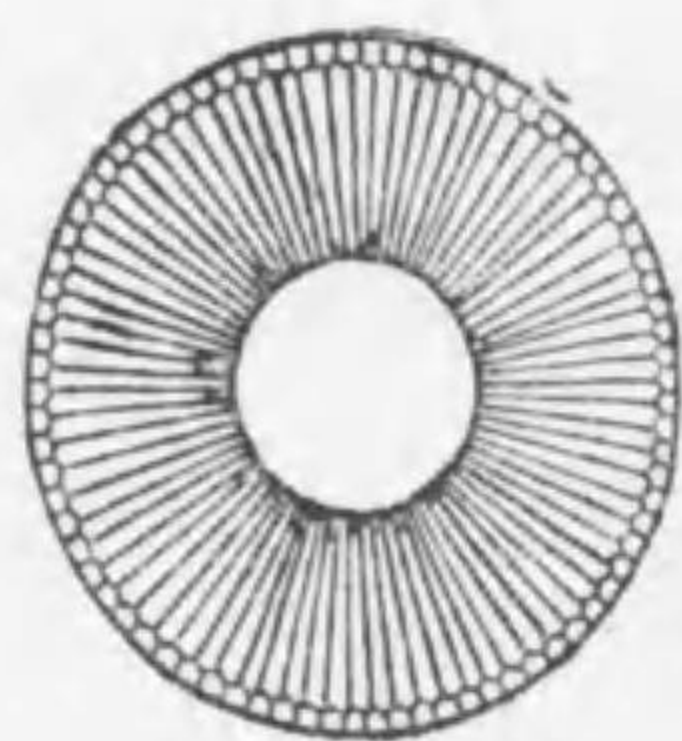


二、圓縁三淡路土瓶敷 圓縁三淡路土瓶敷は、前記の如き方法にて高さ二寸五分許の三淡路を作りて三度捲き、能く形を整へたる後、其の周圍に圓縁を附くるものとす。縁は長さ三四尺許の蔓の兩側を僅か削りて平となし、且一端を薄く削りて段の附かざるやうにしたる後、直徑三寸許に捲くこと三回にしてこれに剝蔓又は籐を縁蔓の外より手前に捲きて右捲となし縁の長さ二寸許となりたる時、嘗て作れる三淡路を其の中に入れ圓の如く括ると淡路結とを括りし蔓を下より上に捲きて繫蔓を抑へ、先に縁を一回捲きし蔓

卷蔓の繼ぎ方

を潜りて外に出し、漸次前と全く同様に縁を捲き淡路結と縁との接觸する所は何れも前述の如く括りて全周を捲くものとす。而して卷蔓の短くなりたる時は、成るべく目立たざる所に於て繼ぎ足すべし。其の方法は先づ長き剝蔓の一端を五六分乃至一寸許薄く削りて裏を出し、これを縁蔓と共に數回捲きて容易に脱げざるやうにしたる後、卷蔓の末端を右方に曲げて裏を出し、其の上を繼蔓にて右廻に捲くものとす。斯くて卷蔓の末端は縁蔓の間に挿入して脱げざるやうにし、最後に槌にて能く打ち均らすべし。

卷縁圓形土瓶敷



三、卷縁圓形土瓶敷 卷縁圓形土瓶敷は、ボール紙を以て外圓の直徑三寸内圓の直徑一寸二分許の蛇の目形原形を作り、更に其の周邊を一周する縁蔓を用意したる後、縁蔓と原形との間に剝蔓又は葦菅の類を挟み、内圓を通じてこれを右廻に捲き縁は原形と縁蔓との間を向ふに通ほして外方より手前に捲き、原形と縁蔓との間を通りて裏面より内圓の孔を潜り、これを反復して遂に全部を捲き上ぐるものとす。

四、蝦背土瓶弦 蝦背土瓶弦を作るには、先づ長さ八寸幅中央二分五厘両端一分五厘厚さ五厘許の心竹を削りて、其の上に二十番内外の亞鉛引鐵線又は真鍮線にして長さ一尺五寸許のものを載せ、心竹の兩端より一寸餘の所より曲げて複線となしたる後、蔓を捲き蝦背を作るを順序とす。蝦背には籐又は剝蔓の成るべく長きものを用ひ、使用前一二時間乃至數時間水に浸して特に軟くするを要す。次に蔓の一端

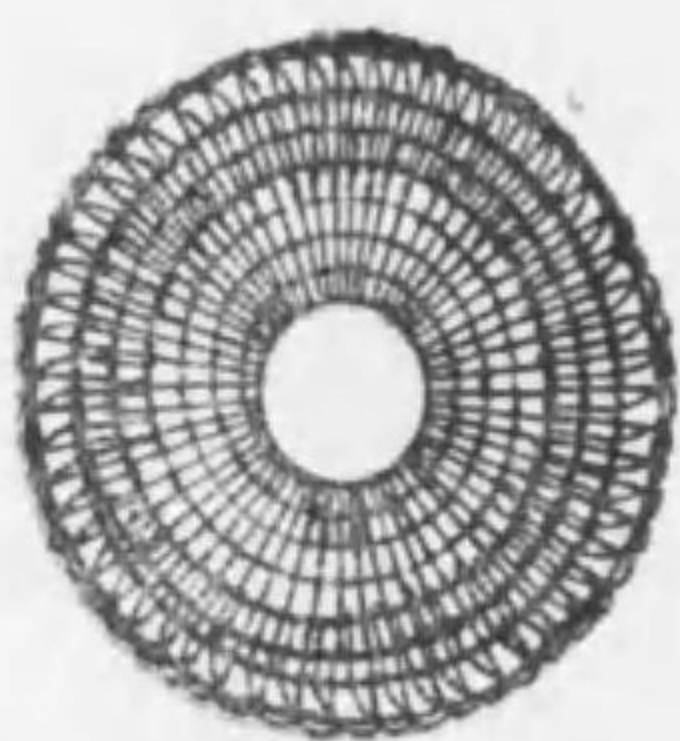


を薄く削りてこれを心竹及び針金の上に載せ、其の先端を手前

として左手に持ち、心竹の先より右卷に五分許捲き更に蔓の端を離して二三回捲き又再び抑へて二回捲き、先に抑へざりし所に筥を刺して孔を明け、其の中に蔓を左方より通して左下に抑へ、又右捲すること二回にして先に作りし蝦背の下に筥を刺して蔓を左より右に通ほし、左下に抑へて捲くこと二回、これを反復して次第に作り他端より六分許となりたる時、蝦背の下を通ほすことを止め、尙

ほ二三回捲きて蔓の端を曲げ心の上に載せて其の上を捲くこと數回にして其の都度弦を潜らしめ最後に一端を持ちて強く引き締め不用の部分に切捨つべし。蔓の捲き方は、左右何れにするも可なり。唯、互に反對に作る點異り。又兩端の針金は、曲げて土瓶の乳形を懸くるに用ふること敢て多言を要せざるなり。

五、蝦背縁圓形土瓶敷 特に太き防已木通蔓若くは肉籐の一端を次第に薄く削りて内徑一寸許の圓形を作りたる後、更に縦蔓を其の外部に右廻に捲きて直徑二寸五分許となすべし。次に細き剝蔓又は皮籐の一端



を縦蔓の間に挟み、右廻に中心の孔を通ほして放射狀に捲き全周を一回したる後、縦蔓を捲きつつこれと先に捲きし最も外の縦とを横蔓にて捲き直徑三寸許となりたる時、縦を次第に薄く削りて圓形となし横蔓を其の端まで捲くべし。斯くて其の外部を一周する太き蔓を添へ、更に前の如く捲きて全周を捲き終りたる後、其の端を縦の間に挿入し、最後に蝦背縁を作るものとす。蝦背を作るには、先づ圓周を手前に向け細くして長き剝蔓又は皮籐の一端を最終の縦と

其の次の縦との間に右方より挟み、前の土瓶弦の如く蔓を右下より左上に導き、右より左下に曲げて小き輪を作り、左より右に縦を潜りて右下より左上に導き、蝦背の下を左方より右方に通ほし、左下に抑へて、前に縦蔓を捲きし横蔓の間を通りて縦蔓を潜らしむべし、これを反復して全邊を作るものとす。但最後は最初の輪を右下より左上に通ほして一つ前の蝦背を潜り、右上より左下に抑へ、最初の輪を通り、其の端を縦の間に挟みて餘れる蔓を切捨つべし。

蝦背縁五角土瓶敷
縦横



六、蝦背縁五角土瓶敷 此は蝦背縁圓形土瓶敷と全く同様の方法によりて、内圓の直徑八分、外圓の直徑二寸許の圓形を作りたる後、外方の縦を捲きつつ横を捲くこと一回にして最終の縦は外のみを一回、外の縦と其の中の縦とを一回交互に捲き、次に其の外部に稍、長き縁蔓を圓の如く附け、最終の縦のみを捲く横蔓にて圓形と五角形との接觸する所を三、四回捲きて先づ一本の縁蔓を附け、更に其の外に一本の蔓を添へて縁を複線となし、この二本の縁蔓を横にて捲き最後に縁蔓と縁蔓との間に剝蔓又は皮籐を通ほして蝦背

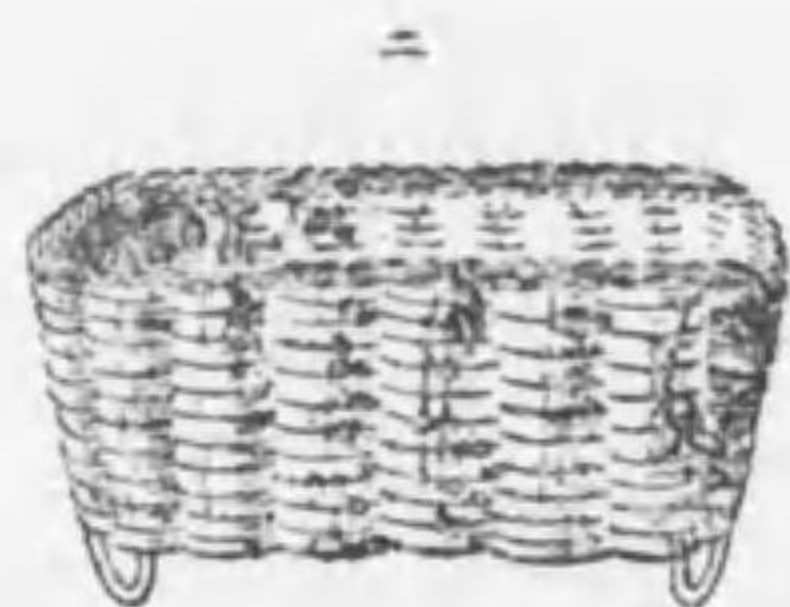
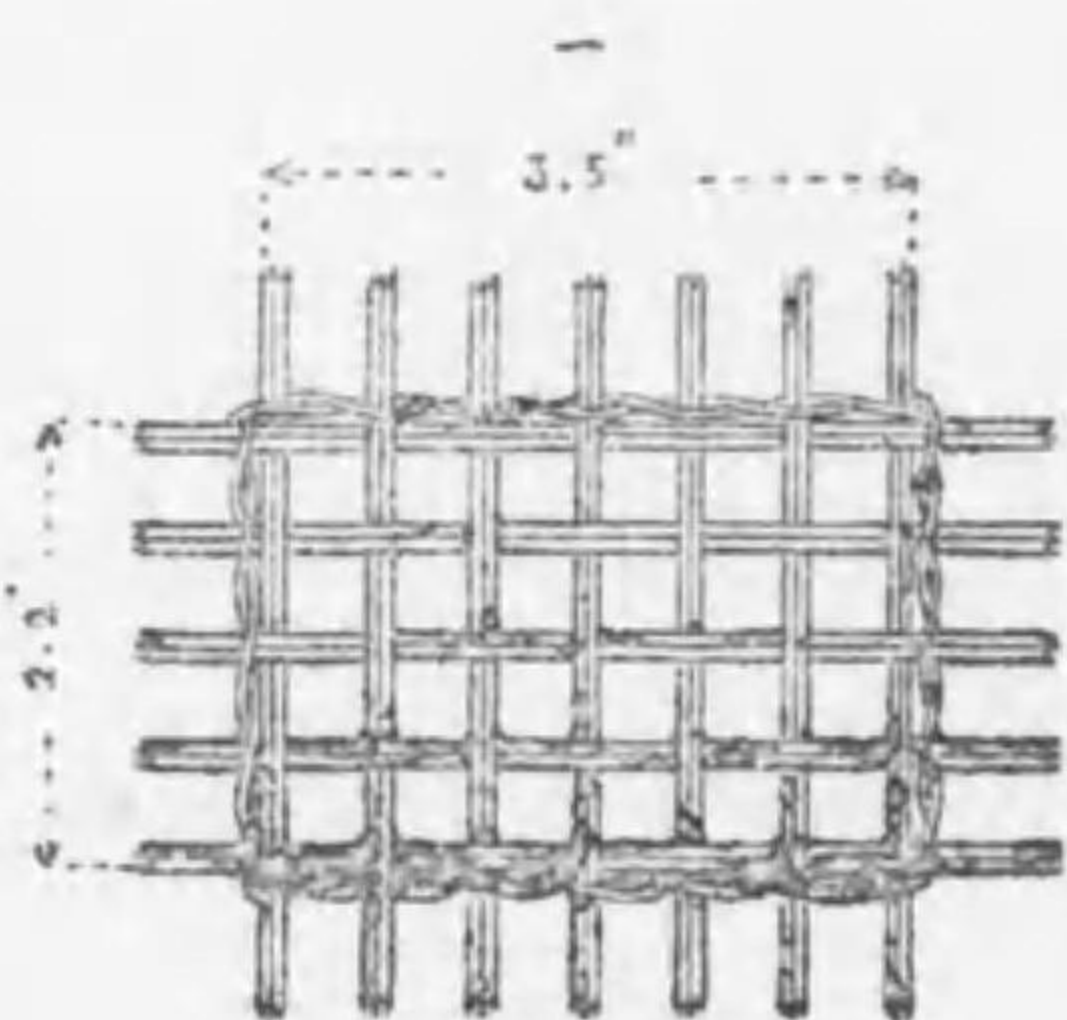
格子組底角籠

格子組

二本編

を作るものとす。其の方法は、全く前に同じ。

七、格子組底角籠 格子組底角籠を作るには、先づ長さ一尺二寸許の縦十、四本と長さ一尺三寸許の縦十本とを各二本一組として排べ、一つ置きに抑潜して一



圖の如くなすべし。複線又は單線にて、斯くの如き形狀に組むを格子組と稱す。勿論縦は何れも中央にて組み合せ、能く其の形を整理して長邊三寸五分、短邊二寸二分許となし、二本の蔓を以て底の周圍を左綯に絡みて一周したる後、各の縦を上方に曲げ二本の横にて側を編むものとす。すべて二本の横にて編むものを二本編と稱し、専ら縦の偶數の時に用ひらるる編み方なり。即ち甲の横にて抑へたる縦を乙の横にて潜り、乙の横にて潜りたるものを甲の横にて抑へ、これを反復して次第に側

を編み稍廣口となすべし。この際編型を用ふれば容易に形を整ふことを得べし。斯くて其の深さ一寸五六分となりたる時、縁を編むものとす。縁は此方側の縦三本を取りて左端の一本を其の右二本の向側を通ほして外に出し、更に其の右隣の縦一本を加へて三本となし、前と同様に左端の縦を其の右の縦二本の向側を通ほして外に出すべし。これを反復して縁を一周し、編み終りも他の部分と全く同様に二本の縦を潜りて外に出だし、何れも一様の組織となすべし。次に縦の端を引き締め能く其の形を修正したる後、外方に出でたる縦を三本取りて前と全く同様に編み、外に出でたる縦を横と縁との間へ刺し、其の先端を内に出して、全部の縁を編み終らば縦の餘分を剪定すべし。最後に特に太き蔓を選びて長さ二寸五分許に切り、其の端を削りて二つに曲げ、これを底の隅にある縦と並行に刺して、高さ三分許の足を附くべし。

井桁組底
楕圓形石
輪籠
井桁組

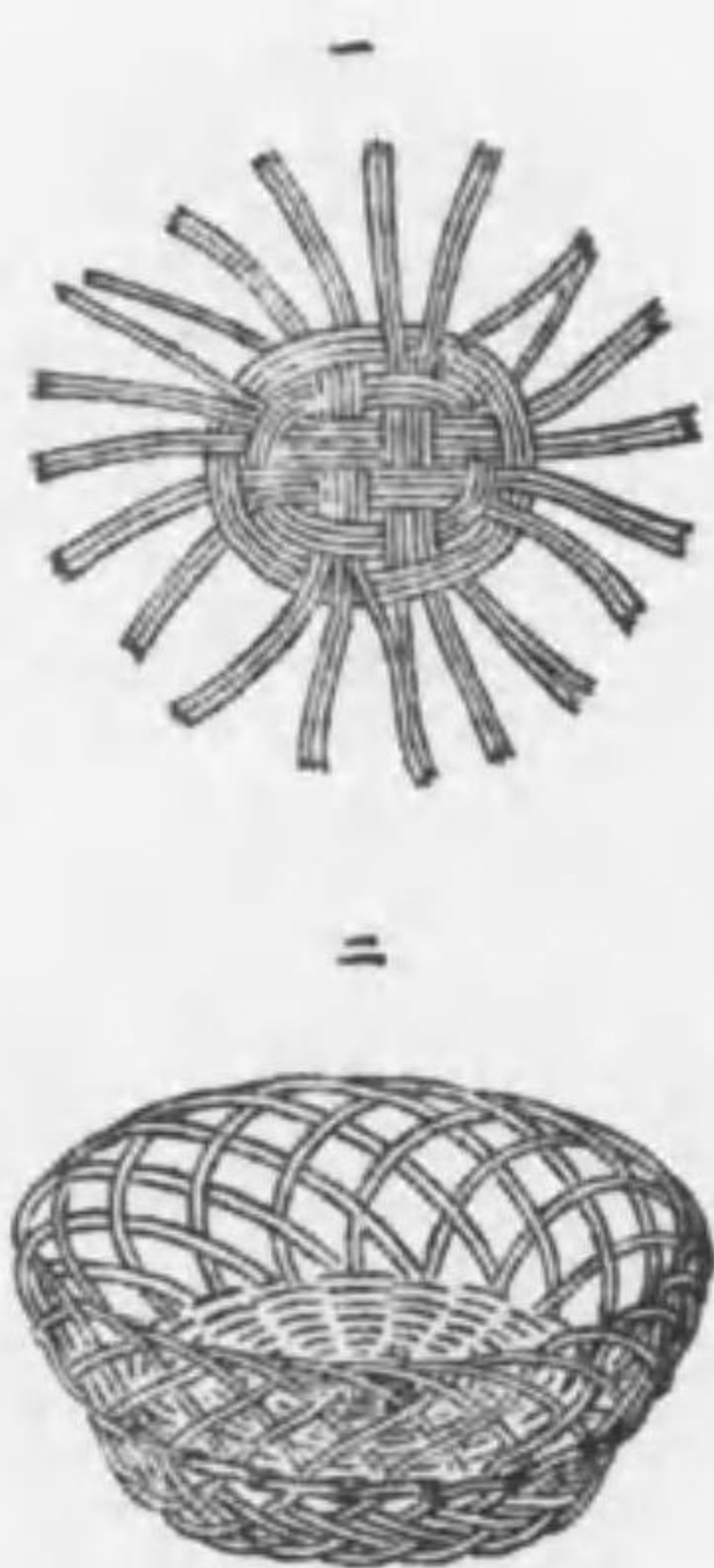
八、井桁組底楕圓形石輪籠 井桁組は、四組の縦を一圓の如く交互に抑潜して井桁形となしたるものにして、一組の縦の数は製品によつて一定せざれども通常三本乃至八本なり。井桁組底楕圓形石輪籠は、長さ二尺内外の縦十九本を五

第一横

第二横

第三横

本づゝ三組と四本一組となし、縦の中央にて一圓の如く廻旋狀に組み能く其の形を整へたる後、周圍を長さ一尺二寸許の蔓にて三回右廻に上の縦を抑へ下の縦を潜りて同一の所を捲くべし、これを第一横と稱す。次に長さ一尺六七寸許の蔓にて前に抑へし所を潜り、潜りし所を抑へて捲くこと三回に及ぶ、これを第二横と稱す。斯くて全部の縦を二本



づゝに分ちて十九組となし、成るべく長き蔓にて縦を一つ置に抑潜して長徑三寸短徑二寸五分許の楕圓形底を作るべし、若し横蔓短き時は、其の端を下にして繼ぐものとす、これを第三横

と云ふ。次に能く其の形を整理して稍内圓となしたる後、側を編むを順序とす。總べて籠を一本の横にて編まんとする時は、必ず縦を奇數として同一の所を反復せざるやうにし、二本の横にて編む時は縦の數を偶數として、一本の横にて抑へたる所を他の一本にて潜り、二本交互に編むを常とす。従つて縦の數奇數

なる時は一本の横にて編み、偶数なる時は二本の横にて編むものなり。
 側を編むには、向側の縦六組を取りて其の最も左端のものを右方に曲げ、其の右隣の縦二組を抑へ、更に其の右の縦二組を潜り最後の二組を抑へて蔓を外に出すべし。次に其の右の縦一組を加へて六組となし、前と全く同様に左端のものを右方に曲げ二抑二潜一抑して外に出し、これを反復して全部を編むものなり。最後は稍六、敷感あれども其の編み方は全く前と同様にして別に異なる所なく、何れも一様の組織とすれば可なり。斯くて能く側の形を整理して深さ一寸二三分許となしたる後、二本の横を一本づゝ順次縦の間に挟みて底より僅か下を右側に絡み合はせ縦締をなすこと二回に及ぶべし、これを側締と稱す。次に底足を組むものとす、底足を作るには側を伏せて此方側の縦五組を取り、其の最も左のものを右方に曲げて二潜二抑し、其の端を中に出して餘分を切り捨つべし。若し縦長き時は、底足を作る以前に於て適度に切り揃ふるを好しとす。
 圓底とせんには、第一横を捲く時圓形となし、側及び底足を作るに當りても同様圓くする外、別に異なる所なし。

側締
底足

放射組底
精圓籠底
放射組

丸放射組底精圓籠 放射組底は、多数の縦を底の中心に於て放射状に組み、其の周圍を横蔓にて圓形又は精圓形に捲きたるものなり。これに一本の縦を多数に重ねたるものと數本の縦を四組重ねたるものとあれども普通に用ひらるるは後者なり。

放射組底精圓籠を作るには、長さ一尺五寸許の縦二十一本を五本三組六本一組に分ち、五本の縦二組を中央にて十字形に組み、其の上に六本の縦と五本の縦とを順序に重ねて圖の如くし、次に任意の長さを有する第一横にて上二組の縦を抑へ下二組の縦を潜りて精圓形に捲くこと三回、更に第二横にて前に抑へしものを潜り潜りしものを抑ふること三回にして、總べての縦を二本づゝ二十一組に分ち、成るべく長き第三横を以て交互に抑潜すること二三回の後、各縦の間に特に一本の縦を挿して何れの縦も三本を一組となし、續いて横を捲き短徑三寸長徑四寸五分許となすべし。斯くて底の周圍を三本の横にて右側に二抑一潜して一周したる後二回目には左側に二抑一潜して矢の羽組



矢の羽組

となし其の端を縦の下に挟むべし、これを底縮と稱す。

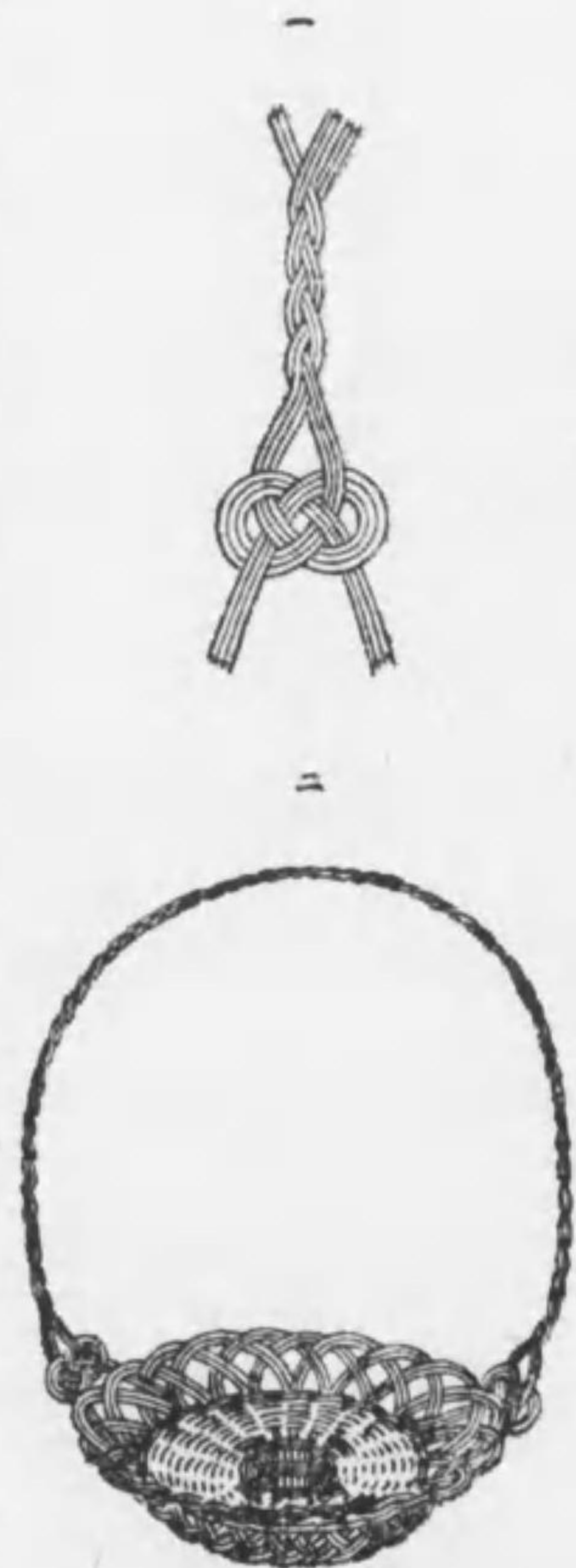
側を編むには、向側の縦三組を取りて左端のものを右方に曲げ一潜一抑して其の端を外に出し、順次同様にして側を編み能く其の形を整へて稍廣口となし、深さ一寸許となすべし。次に側を裏返し縦を二本の横にて右絢に一抑一潜して絡み合はすこと二回にして側縮をなしたる後、底足を編むものとす。

底足は、側を裏返し此方側の縦三組を取りて、側を編みたる場合と全く同様に其の左端の縦を右方に曲げ一潜一抑して内側に出すものとす。斯く同一の方法を反復して全部の底足を編み、其の形を整へたる後、殘餘の縦を切り捨つべし。

花籠

一〇、花籠 花籠を作るには、長さ二尺許の縦二十一本を五本三組六本一組に分ち、互に直角に重ねて放射組となし、第一横及び第二横にて捲くこと各三回、次に縦を二本づつ二十一組に分ちて各縦の間に更に一本づつの縦を挟みて何れも三本を一組となし、第三横を捲きて底の直径を四寸許となすべし。次に二本の横にて右絢に二抑一潜して一周し、二回目は左絢に二抑一潜して蔓の端を縦の下に挟み底縮をなしたる後、側を編むものとす。

側は、向側の縦三組を取りて左端のものを右方に曲げ一潜一抑して外に出し、漸次同一の方法を反復して側を編み、能く其の形を整へて深さ一寸口徑七寸許となしたる後、裏返しして縦を二本の横にて右絢に一抑一潜して絡み合はせ、斯く



すること三回にして側縮をなし、底足を編むべし。即ち此方側の縦三組を取りて左端のものを右方に曲げ、一潜一抑

して其の端を内側に出すものとす、これを反復して底足を左廻に編み能く其の形を整理して高さ五分許となし、最後に手を作るものとす。

手は長さ三尺許の蔓六本を三本づつ二組に分ちて、一端より三寸許隔りたる所に一圖の如く淡路結を作り、左右の蔓を中央に撓めて、左方の内二本を右上に、

右方の外二本を左上に重ね、更に左方の外一本を右上に、右方の内一本を先に右上方に導きたる蔓の下を潜りて、左上方より右上方に曲げ、左方の外一本と共に一組となし、六本の蔓を二本づゝ三組となして交互に斜上方に抑へて三平に編むものとす。斯くて長さ一尺八寸許となりたる時、他端にも淡路結を作りて其の端を二つに分ち、これを側の外より内に通ほし、更に外に出して底足の間に挟み、脱けざるやうにすべし。

放射組底
圓形菓子器

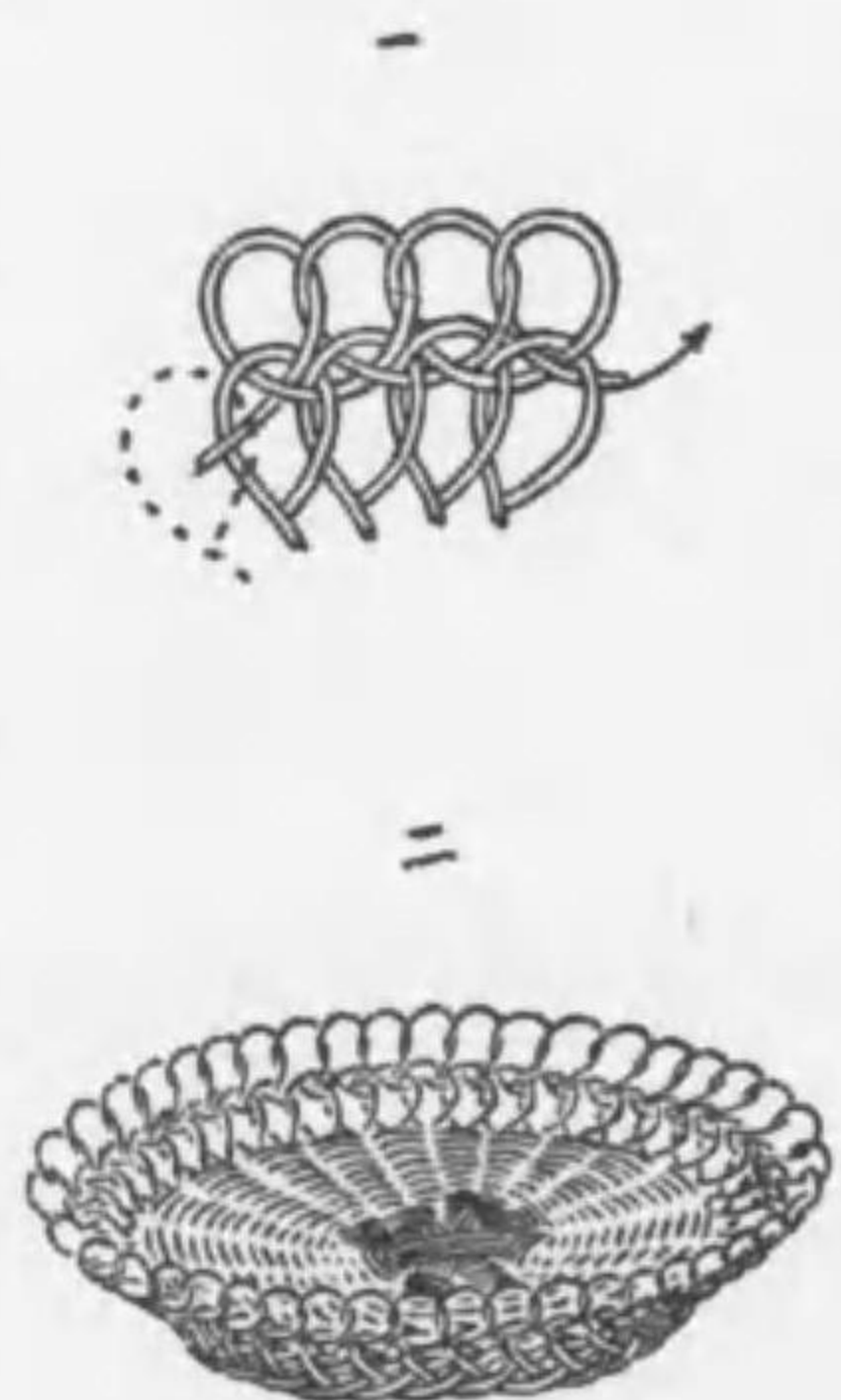
一、放射組底圓形菓子器 長さ一尺三四寸の縦十九本を四本一組と五本三組とに分ち、四本の縦を最下として放射組に編み、第一横にて抑潜すること三回、第二横にて抑潜すること二三回、次に縦を二本づゝ十九組に分ちて第三横にて一抑一潜し直徑四寸許となすべし。

側は、各の縦を一本づつとなし、向側の縦二本を取りて一圓の如く左方のものを右方に曲げ、右方の縦の背後を潜りて手前より左下に抑へ、長さ八分許となして左右の縦の間を外に出すべし。次に其の右隣の縦一本を加へて前と全く同様に組み、順次斯くして全部を作り、口徑五寸餘に整理したる後、底足の編製に移

るものとす。

底足を編むには、製品を裏返して向側の縦四本を取り、左方の二本を右方の二本の背後を潜らしめて其の端を内部に入るゝものとす。餘端長き時は豫め剪定するか又は底足を編みたる後切り捨つべし。

次に長くして精良なる蔓を以て、先に編みたる側の上に圓の如く第二段の側



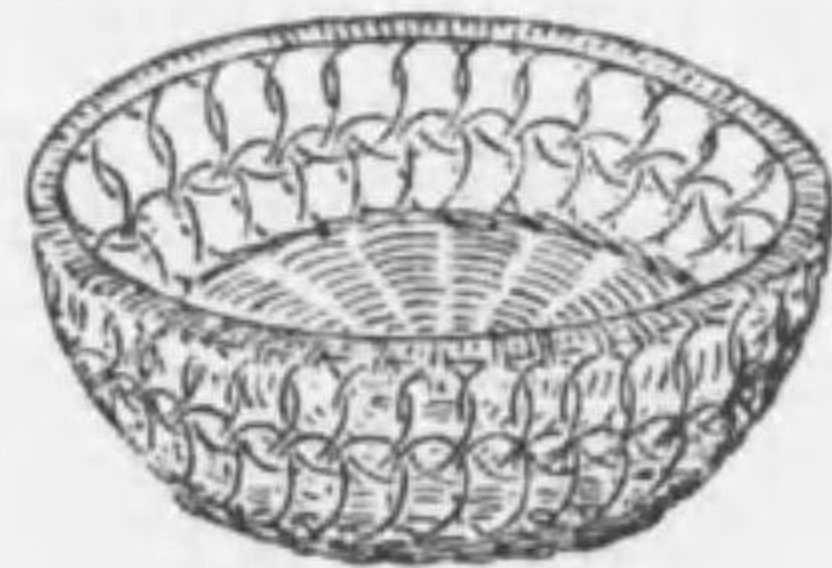
を編み足すものとす。即ち先づ製品の表を上として蔓の一端を向側の蔓と蔓との絡み合へる間に挿し、右上より左下に曲げて第一段の側の乳形の背後より右下に導き、先に曲げし第二段の側の蔓を第一段の側の乳形内にて抑へ、更に前と同様に蔓と

蔓との絡み合へる間を右に通ほして前の如く第一段の側の乳形を抑へ、右上方より左上方に曲げて先に曲げたる第二段の側の蔓を内より外に潜り、尙ほ第一段の側の編蔓を潜りて第二段の側の編蔓を抑へ、第一段の側の蔓と蔓との絡み

合へる間を右に通し漸次同様の方法を反復して輪繫より成れる第二段の側を編み、口徑五寸許となしたる後、能く其の形を整理して側を稍、内方に彎曲せしむべし。この際第一段の側と第二段の側とは常に平状態をなして相切するが如き形を呈し、且編蔓によりて一様の組織に抑潜せらるべきものなり。

一、二、放射組底卷縁楕圓籠 底を作るには長さ一尺五寸許の縦十五本を三本一組と四本三組とに分ち、三本一組の縦を最上として放射状に組みたる後、第一横及び第二横にてそれぞれ三回づつ抑潜して楕圓形となし、次に各の縦を二本づつ十五組に分ちて第三横にて抑潜し、長徑三寸五分短徑三寸許となすべし。斯くて各の縦を一本づつに分ち、其の間に三本の横を順次に挟みて右絢及び左絢に二抑一潜すること各一回にして底締をなしたる後、側を編むものとす。

側は、前に述べし放射組底圓形菓子器と全く同様に作るものなり。底足を編むには、先づ製品を裏返して、底締と同じく三本の蔓を一本づつ縦の間に挟みて右絢に二抑一潜するこ



放射組底卷縁楕圓籠

と一回にして側締をなしたる後、此方側の縦五本を取りて其の最も左端の一本を右方に曲げ二潜二抑して其の端を底の内部に入れ、次に右方に一本の縦を加へて五本となし、前と同様に編み、これを反復して全部を編むものとす。

第二段の側も前の放射組底圓形菓子器と全く同様に編み、口の長徑五寸短徑四寸五分側の深さ一寸五分許となすべし。縁は、口に合致するやう蔓を二重に捲き、剝蔓を以て右廻に捲きつつ輪繫の上部を一、二回づつ括りて、遂に全部を捲くものとす。

一、三、手提小籠 此は特に細き蔓を放射状に組み、前の放射組底卷縁楕圓籠と全く同様の製法によりて小籠を作りたる後、これに手を附けたるものなり。

一、四、圓形貼底卷縁菓子盆 直徑五寸許の圓形「ボール」紙に、裝飾用紙を貼りて底を作り、圓周より一分五厘許隔りたる所に五分許の距離を置いて孔を穿ち、外の輪が圓周に一致するやう蔓を二重に捲きて、これを底の表面に載せ、先に穿ちたる孔に裏面より剝蔓を通ほし、右廻に底縁を捲きて一周したる後、側を作るものとす。



側は精良にして長き蔓を、底縁を捲きたる剝蔓の下底蔓の間に通ほして圖の如き輪繫となし、口徑六寸深さ八分許となすべし。縁は、前の放射組底卷縁楕圓籠と同じく、二本の縁蔓を剝蔓にて右廻に捲き、輪と蔓とを共に四、五回捲きては縁蔓のみを二回捲き、これを反復して縁を作るものとす。

底には、厚さ一分許の板を用ひ、著色彩畫、彫刻、燒繪塗料等を施すも可なり。又「ボール」紙の表面に、展開せる麥稈を貼附するも一つの方法なり。

板底卷縁角盆

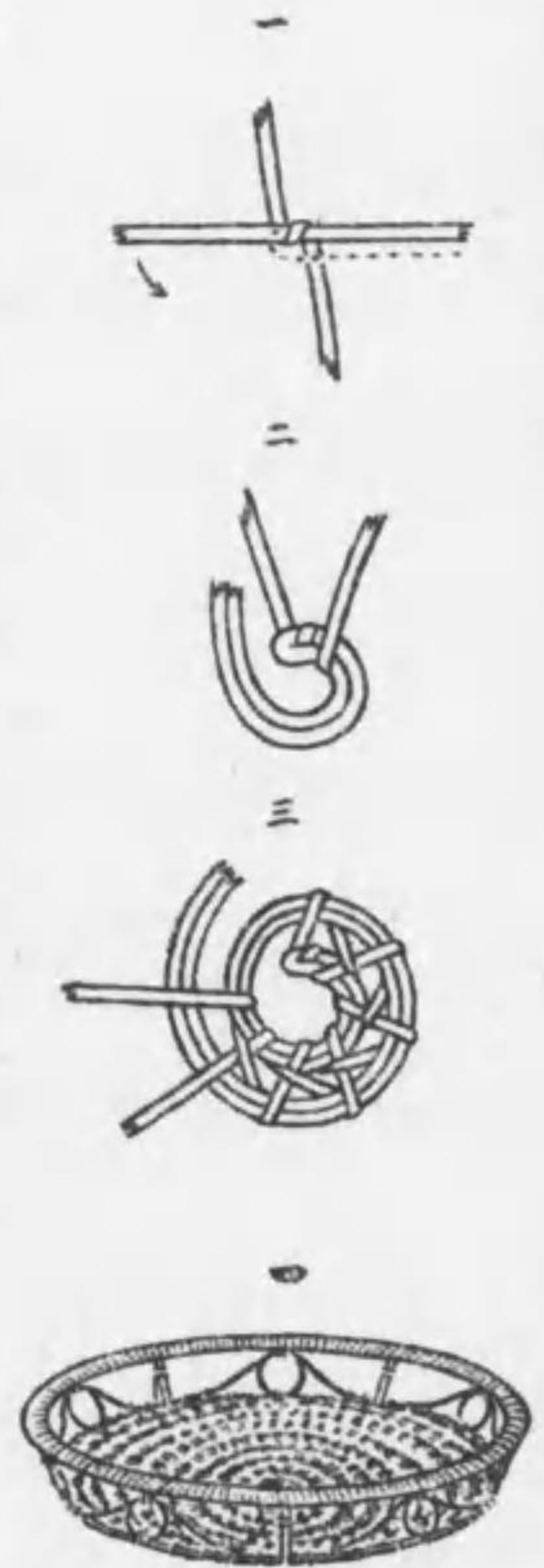
一五、板底卷縁角盆 底には長さ九寸幅六寸厚さ一分五厘許の樺、樟、槐、櫛等の木板、若くは橡、槭、杉、朴等の著色板又は漆、エナメル等を塗れる適宜の板を用ひ、其の周邊より一分五厘乃至二分許内部に一寸許隔てて孔を穿ち、これに剝蔓を通ほして側と底足とを捲くものとす。即ち先づ底の孔線を一周するに足るべき太蔓を底板の裏面に添へ、剝蔓にてこれを捲きつつ底足を作り、更に側の第一段を精良なる蔓にて輪繫に編み、四つ目毎に底板に通ほしたる剝蔓にて輪と底板

圓形絡組底菓子器



と底足とを二回捲き、順次これを反復して底足と側の第一段とを作るべし。側の第二段は、放射組底卷縁楕圓籠と同様に輪繫となし、縁は長さ三尺許の太蔓を能く側に適合するやう二重に捲きて、これと側とを放射組底卷縁楕圓籠及び圓形貼底卷縁菓子盆の如く、縁蔓のみを二回又は三回捲き、次に輪を通ほして共に二回捲き、これを反復して全部を完成するものとす。

一六、圓形絡組底菓子器 圓形絡組底菓子器を作るには、先づ長き蔓を一圓の如く剝蔓にて捲き更に二圓の如く曲げて複線となしたる後、共に右巻に捲きて内徑二分許の輪を作り、三圓の如く左方の横を捻りて表を出し、これを第二の輪の外方より右下に捲きて裏を出し、右方の横を抑へて第一の輪を裏より右巻に捲き表を上とす。次に初めに右方たりし横を以て、第二の輪を右巻に捲きて他の横を抑へ、第一の輪を裏より絡みて最初の如き形となすべし。斯くて常に縦と縦との距離を二分許隔てて横を右巻千鳥に絡みて一周したる後、先に捲きたる第二の輪と次に捲かるべき第三の輪とを絡み合



四四

はすものとす。

其の方法は略前と同じけれども唯、先に捲きたる横の縦に絡みて成せる三角形の

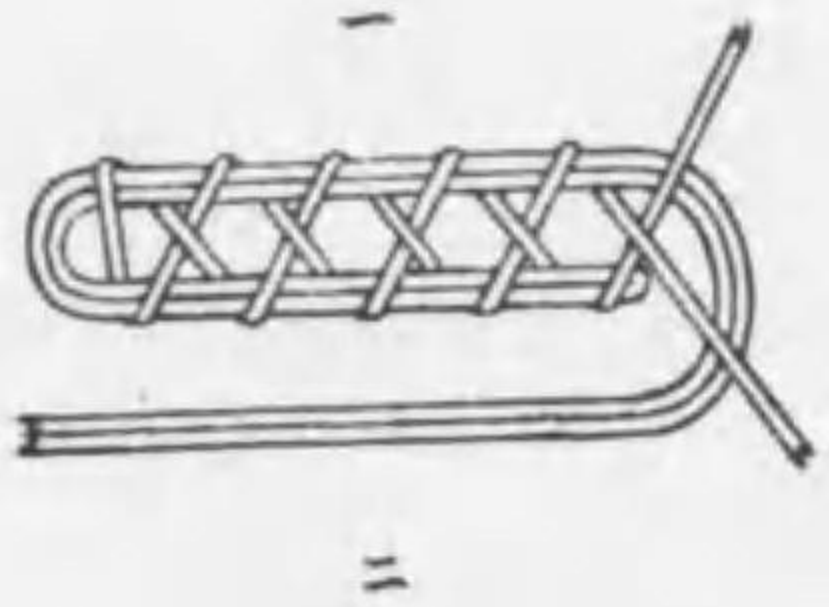
頂角に横を通はして縦と同時に抑潜する點異なるのみ。右の如くして順次縦を捲きつつ横を絡む時は、直徑の増すに従ひ次第に編目の粗大となるを免れず、故に便宜他の部分に横を通はして絡み、編目に大小不同なからしむるを要す。蔓の短くなりたる時は、繼ぎ足して底の直徑五六寸となりたる時、漸次縦と縦との間を狭くして圓形となし、底編を終りたる後、其の周圍を五等分若しくは六等分して側を作るものとす。

側を作るには、先づ長さ三四尺許の稍太くして精良なる蔓を選び、これを最終の底編をなす際縦と共に横にて捲き、等分點より二三絡隔りたる所に於て離し、

更に縦を横にて捲き、等分點に至りたる時、側蔓を右卷に捲きて山形となし、直徑八分許の輪を作りてこれを縦と共に二回横にて捲き、底と連絡すべし。山形の右方も左方と同様に二三絡置きて側蔓を縦と共に四回又は六回絡み、更に側蔓を離すこと二三回にして、其の次の等分點に至り第二の山形を作りて輪と底とを連結し、これを反復して側を作るものとす。

縁は、長さ七尺許の蔓を三回捲きて底の直徑より一寸許長さ直徑を有する輪を作り、これを剥蔓にて右卷に捲きつつ側に取り附くるものなり。この際、側山の形と縁蔓とを二三回捲きて互に連絡し、更に山形と山形との中間即ち先に側蔓を括りし中間に於て縁蔓と縦とを二回捲き、尙ほこれを締むるため右卷に二回捲きて次に縁蔓を捲き、これを繰り返して縁を捲き側を括るものとす。

一七、楕圓形絡組手籠 長さ蔓を不同に折り曲ぐるか、若しくは二本の蔓を描へて複線となしたる後、一圖の如く曲げ剥蔓にて楕圓形に絡むべし。其の絡み方は略前の圓形絡組と同じけれども、稍、其の編み初め異り。其の編み初めは剥蔓の裏を上にして縦の間に通ほし、其の左方を捻りて縦を右卷に絡み、右方の横も



同様に縦を右巻に絡み一圓の如く斜交状に抑潜すべし。この際横を抑ふる蔓は、總べて裏を表はし、他は皆表を出すこと圓形絡組に同じ。斯くて二分許の距離を置いて縦を右巻に捲きつつ横を千鳥に絡みて、長徑五寸短徑四寸許の底を作りたる後、縦を上方に捲きて底と同様に側を編み漸次口を僅に廣くして一寸四五分の深さとなすべし。

縁は、長さ五尺許の蔓を二回捲きて能く口に適合するやうにし、第三回目の蔓は短徑の側より右廻に剝蔓にて捲き、一寸置位に側と縦とを共に二回捲きて側に取り付け、長徑の位置となりたる時外側の縁蔓を左巻に捲きて直徑五分許の輪を作り、輪と縁蔓とを二・三回捲きて又縁を捲き前の如く一寸置位に側と連結して、先に作りたる輪と全く反對の側に至りたる時又輪を作りて二・三回縁蔓と共に捲き、更に縁を捲きて遂に全邊を捲き上ぐるものとす。

手は、長さ二尺五寸許の蔓を左右の輪に通ほし、一方は先端より一寸許の所より他方はそれより八寸許隔りたる所より弦形に曲げて輪を掛くるやうにし、他端は前の蔓に添ふて導き、輪を通ほして往復すること一回にして左右相稱となし、蔓の餘分を切り捨て、三本の蔓を能く排べて土瓶の手の如き形状となし、これを剝蔓にて捲くものとす。捲き初め及び捲き終りは、蔓の端を巻蔓の下に通ほして能く締め容易に解けざるやうにすべし。

一八、箆籠 箆籠は、長さ三尺許の縦二十一本を五本づつ三組と六本一組とに分けて井桁組に編み、第一横及び第二横にて各三回抑潜したる後、總べての縦を二本づつ二十一組に分ちて、第三横にて捲くこと二十餘回にして直徑四寸許の底を作り、中央を裏より壓出して中高となすべし。



次に縦を斜上に曲げ稍廣口となして側を編み、其の高さ二寸直徑六寸許となりたる時、三本の横を一本づつ順次縦の間に挟み二抑一潜して右廻に捲くこと五

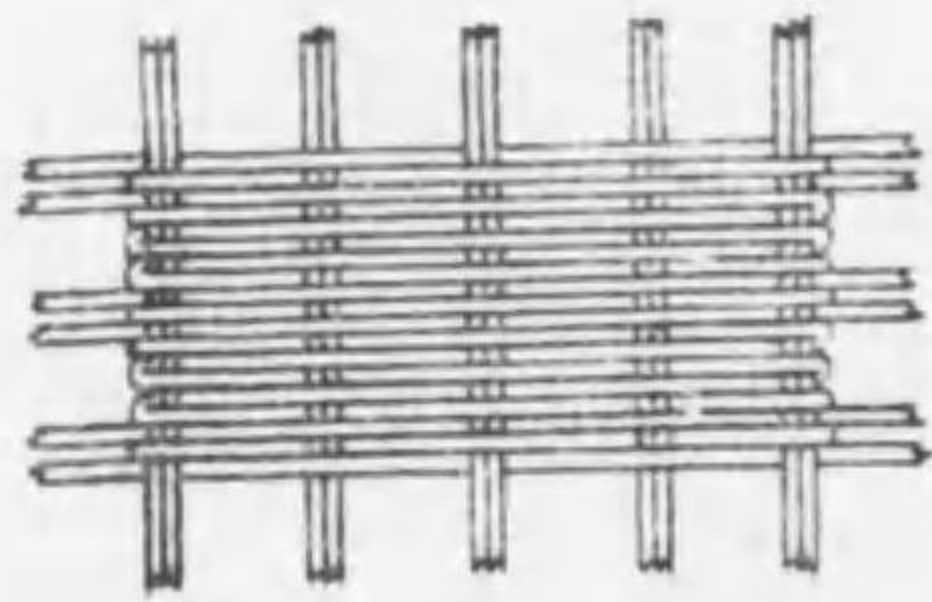
六回に及ぶべし。斯くて又一本の横にて抑潜し、常に其の形を整へつつ美的に編み、高さ三寸許となりたる時次第に口を狭くして深き五寸口径二寸許となし、これより縦を外方に擴げ鈍漏斗形に編むこと一寸五分許にして縁の編製に移るものとす。

縁は、此方側の縦を三本取りて其の左端の一本を右方に曲げ二本の縦を抑へて外に出し、更に其の右隣の縦一本を加へて三本となし、左端の縦を右方に曲げ二抑して外に出すこと前に同じ、これを反復して一周したる後、前と全く同様の方法によりて更に二周して縁編を卒へ縦の餘端を切捨つべし。時宜により、雅致ある太蔓にて紐を附け若くは針金にて乳形を作り掛くるやうにするも可なり。

一九、花挿籠 長さ二尺許の縦十六本を二本づつ八組に分ち、其の中の五組を二寸五分乃至三寸許の間に等距離に排列すべし。次にこの縦と中央にて互に直交するやう他の三組の縦と横とを以て一圖の如く編み、緘底を作るものとす。即ち縦横縦各一、横五、縦横縦各一、横五、縦横縦各一の順序に組み、縦の兩端は何れも潜るやうにすべし。横は成るべく一本の蔓にて組むを好しとすれども、便宜

花挿籠

緘底



二



縦と縦との間に挟む一本は底の長さに切りて組むも差支なし。

右の如くして底の編製を終りたる後、竝列せる五組の縦の中、中央の一組を左右に分ちて一本づつとなし、これ

に一尺許の縦各一本を添へて十七組の縦となすべし。これ主として縦を奇数となし一本の横にて編むに使せんためなれども、又籠の前方を張り出すも縦の間隔に著しき違なく、其の組織に異状を呈せざらしめんがためなり。斯くて一本の横にて一・二回底締をなし、總べての縦を上方に曲げて側の編製をなすものとす。

側は、一本の横にて編み、前方及び左右は特に外部に向つて張り出すを好しとすれども、背後は成るべく扁平となすべし。側の左右三寸五分、前後二寸五分、深

さ二寸八分許となりたる時、漸次口を締めて深さ三寸五分許となし、口の位置を稍、後方に片寄せて楕圓形となし、長徑一寸四分、短徑一寸二分許となすべし。これより次第に口を擴めて鈍漏斗形となし、直徑二寸四分許となりたる時、箆籠と同様に縁編をなし、能く其の形を整理して口を稍、前方に傾け、更に頸の背後に乳形を附けて柱に掛くるやうにすべし。乳形は、蔓紐、針金等にて作るを好しとす。

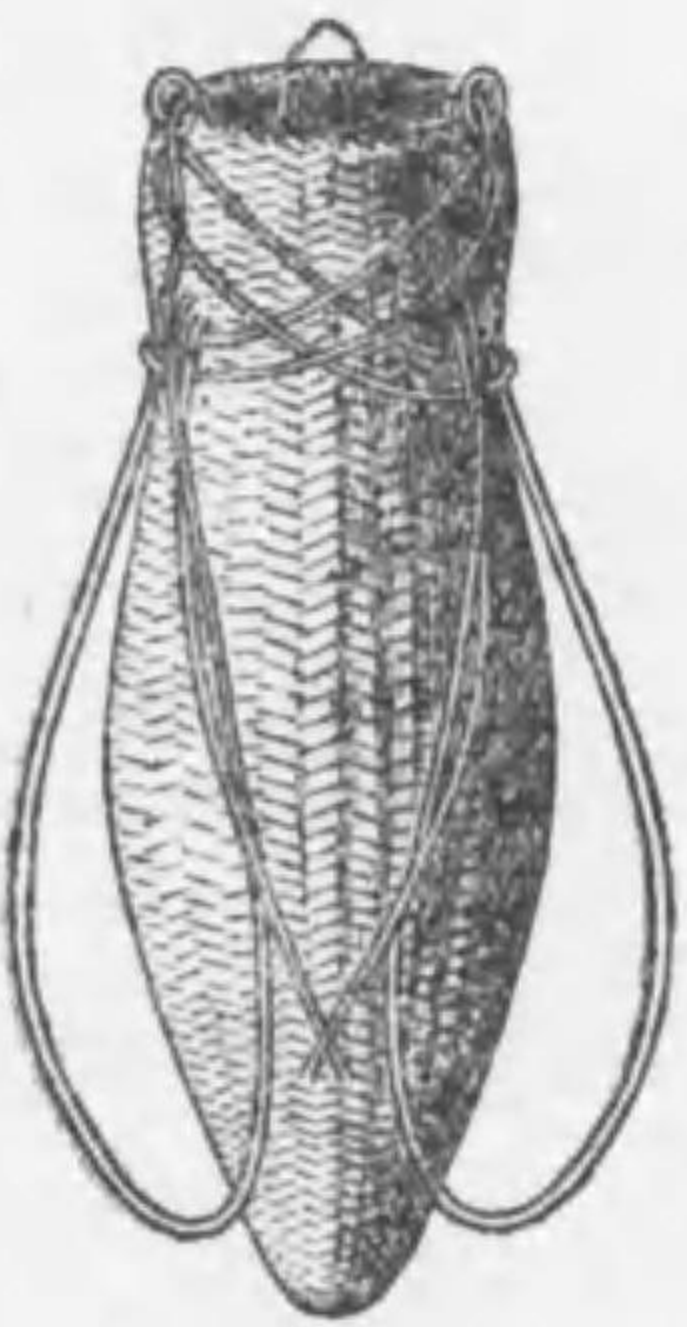
二〇、蟬形花挿籠

蟬形花挿籠を作るには、漂白せざる蔓を以てするか、若くは皮を取らざる蔓を以てする方却つて高雅なるものを得べし。先づ長さ二尺餘の縦十六本を四本づつ四組に分ちて井桁組に組みたる後、一回縦を剝蔓の第一横にて抑潜してこれを一方に曲げ蟬の腹部の末端を作るべし。次に縦を二本づつ十六組に分ち第二横にて抑潜すること一回にして更に各の縦を一本づつとなし、側を腹部、胸部、頭部の順序に編製し、最後に翅を作るものとす。

側を編むには、一本の丸蔓にて左廻に二抑一潜するか又は皮附の丸蔓若くは剝蔓にて作るも一種高尚優雅のものを得れども、茲には特に稍、精巧なる編み方

に就て述べん。即ち先づ漂白せざる三本の剝蔓を隣れる縦の間に一本づつ順序に挟み、表を外にして右方に向はしめ左廻に編むものとす。其の編み方は、左方の横を縦に對して斜左下より斜右上に導きて縦を二抑一潜し、次に中央の横を斜左上より斜右下に抑へて縦を二抑一潜し、先に編みし横の右端を僅に抑へたる後、初め右端に挟みし横を左端の横と全く同様に斜左下より斜右上に導きて二抑一潜し、中央の横の右端を僅に抑へ、更に初め左端にありし横を斜左上より斜右下に曲げて縦を二抑一潜し、右端にありし横を僅に抑へ、尙ほ初め中央にありし横を斜左下より斜右上に曲げて縦を二抑一潜し、初め右端にありし横を斜左上より斜右下に抑へて縦を二抑一潜し、これを反復して恰も花籠の手の如く、各の横を交互に斜左上若くは斜左下より中央に抑へ、且縦を二抑一潜して斜に被ひ、毫も外部に縦の表はれざるやう三平に編みて遂に全部の側を作るものとす。但其の形状は成るべく實物の如くし、腹部の中央即ち下端より四寸許の所に於て左右三寸二分、前後二寸五分許に膨らし、それより次第に締めて長さ五寸五分許となりたる時、左右の外徑を三寸許となし、頭胸部と腹部との區劃を

附け、それより又僅に膨らし殊に頭部は其の背部即ち前側を中高となし、全長八寸許となりたる時、左右二寸七八分前後二寸許の口徑となし、柱に接する後側は稍扁平となすべし。斯くて此方側の縦四本を取り、左端の一本を右方に曲げて一潜二抑するか、若くは五本の縦を取り左端の一本を右方に曲げて二潜二抑し其の端を内部に入れ、次に其の右方に一本の縦を加へて同様に編みこれを反復して縁編を卒へ、口邊を作成したる後餘れる縦を切り捨つべし。



を作るには、特に精良なる丸蔓二本を選びて長さ八尺許に切り、これを豫め能く水に潤ほして軟くしたる後、左右兩翅を同時に作るか又は一方を作りたる後他方を作るものとす。

左右兩翅を同時に作るには、蔓の中央を一寸五分許右綯に綯ひ、これを二つに

曲げて後側の口邊より三分許下、中央より左右に縦二本づつ即ち縦四本を隔てて孔を穿ち、後側より内部に向つて通ほし、先づ柱掛の乳形を作りたる後、頭胸部の側面口邊より一寸八分許下の所に出し、左右より中央に曲げて右を上左を下に組み、口邊の中央より左右に各一寸四分許隔りたる所に於て、眼となすべき上下五分左右四分許の輪を作るべし。この際動もすれば輪の位置移動し易きを以て、便宜蔓又は針金にて括るか、若くは篋を刺してこれに捲き附け、其の用なきに至つて除去すべし。而して蔓を口邊より一寸五分許下の中央に於て左を下右を上、先に組みたる蔓の下を潜りて交點より更に一寸七八分許斜右下及び斜左下に下りたる所より上方に曲げ、先に作りたる輪を通ほして口より中に入れ、更に下に導きて口邊より一寸三分許下りたる側面に出し、最初に左及び右に曲げたる蔓を潜りて長さ約六寸許の翅を作り、先に蔓を出したる内側に縦一本を隔てて挿入し、共に側の内部を通ほして左方のもは右方に、右方のもは左方に導きて先に挿入せし位置より二分許右又は左斜下に出し、嘗て眼を作りし二組の蔓を抑へて翅の中を通ほし、中央下部に導きて翅の内邊を抑へ、左を

下右を上を組み、口邊より六寸餘りたる中央の縦の左右に刺して蔓の端を中に入れ、能く其の形を整へて製作を終るものとす。勿論便宜途中にて蔓を繼ぐも可なり。

左右の翅を別々に作るには、前記の終點より初めて一方の翅を作りたる後、他の翅を作るものなり。即ち先づ二本の蔓を揃へて下端より一寸七分許上りたる前側の中央の縦の右に挿入し、他端を口邊より下一寸五分中央より左一寸三分許の所に刺して籠の内部に通ほし、右方は曲げて今刺したる位置の全く反対の側より二分許斜右上に出し、これを六寸許下に導きて右方より上方に曲げ、長さ六寸許の翅を作り、先に蔓を出だしたる所より縦一本を隔てたる右方に穿孔し、これより蔓を内に通ほし、内部を上りて口に出し、更に表側を垂下して先に作りたる翅の内を通ほして其の附根より斜左上に曲げ、口邊の中央より一寸五分許左の所に於て上下五分、左右四分許の輪を作りて眼となし、蔓の下を左方に潜りて口邊より一寸許下りたる所より右下に曲げて右翅の左邊を潜り、右邊を抑へて五分許右方に行き過ぎたる所より内部に通ほし、左上に曲げて、後側の口邊

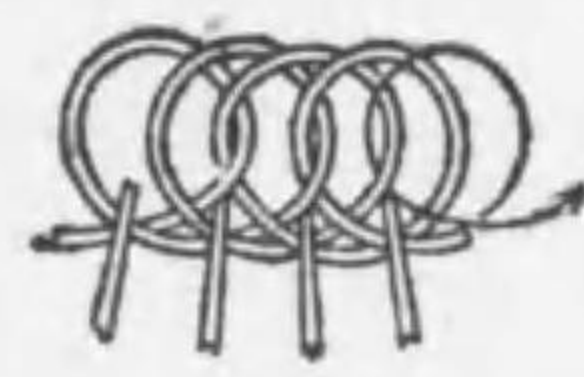
より三分許下にして中央より右に縦二本を隔てたる所に通ほして後側の外に出し、二本の蔓を一寸五分許右綯に綯ひて柱に掛くる乳形を作り、今蔓を後側に出したる位置より縦四本を左に隔てたる所より内に通ほし、前と全く反対の順序にて左右相稱に作るものとす。即ち蔓を口邊より一寸八分許下の左側面に通ほして右方に曲げ、先に左方の眼を作りし二本の蔓を抑へて下の蔓とは中央にて上の蔓とは稍、右方に於て互に交叉せしめたる後、更に斜右上方に導きて嘗て右方の翅を作りて口より下に導きし蔓を右方より潜りて右卷に眼を作り、蔓と蔓との間を右上より左下に通ほして先に左方の眼を作りし上の蔓を抑へて中央にて交らしめ、下の蔓をば中央より稍、左方に於て潜らしめ、更に最初下方より内部に通ほせし蔓を潜りて上方に導き、左眼を作りし蔓の下を潜り上を抑へて輪を通ほし、口より内部に曲げて口邊より下一寸四分許の所より外に出し、右方と同形に長さ六寸許の翅を作り、最初に左上方に導きし蔓を潜りて上方に導き、更に其の蔓を抑ふると共に他の二組の蔓をも抑へて先に翅を出せし右隣に挿入して中に出し、右方に曲げて先の蔓と交らしめ、右の翅の附根より三分許左

蓋附菓子器

下に出し、左の眼を作りて右下に導きし二組の蔓を抑へ右の蔓の左邊を潜りたる後、更にこれを抑へ左下に導きて最初に一端を挿したる蔓を抑へ、一本の縦を隔てて左に挿入し、能く其の形狀を整へて製作を終るものなり。

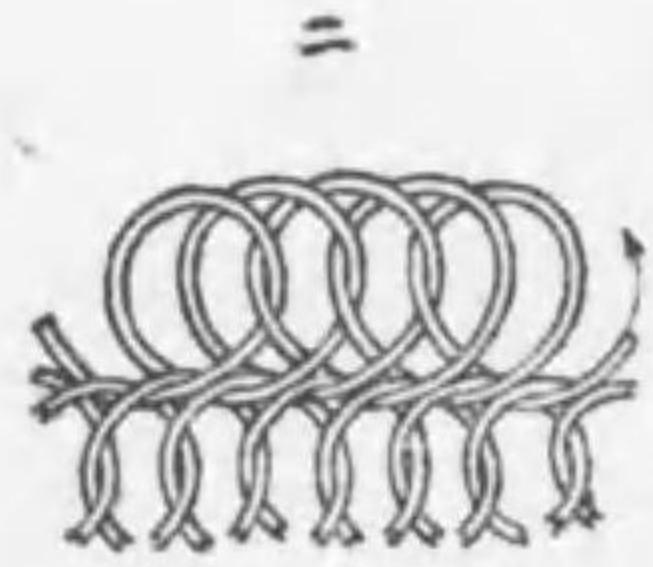
二、蓋附菓子器 蓋附菓子器を作るには、長さ一尺二寸許の縦二十四本を六本づつ放射狀に組み、第一横及び第二横にて各三回捲き、縦を二本づつ二十四組に分ちて二本の第三横にて編み底の直徑を四寸五分許となすべし。

次に精良なる蔓を以て側を編むを順序とす。其の編み方は、一圖に示すが如



く此方側の縦の間に蔓の一端を挟み、左廻に直徑五六分許の輪を作り、次に二本の縦を潜りて第二の輪を作り、其の一部を前の輪に重ねぬべし。更に今潜りし右方の縦と其の次の縦との二本を潜りて第三の輪を作り、其の左方が第一の輪と輪違になるやうにし、又二本の縦を潜りて第四の輪を作り、其の左端は第二の輪の右端と輪違になるやうにす、これを繰り返して側を一周したる後、底足を編むものなり。

底足は、底を裏返して此方側の縦三本を取り、左端のものを右方に曲げて二本の縦を潜り、更に右方の縦一本を加へて前と同様に左方の縦を右方に曲げて二潜し、これを反復して一周したる後、能く縦を引き締め、前と全く同様に此方側の縦三本を取りて左廻に左端の縦を右方に曲げて二潜し、其の端を中に入れて順次に編み、斯くすること前後三回にして縦の餘端を切り、箆籠及び花挿籠の縁の如くすべし。次に、側の第二段を編むを順序とす。其の方法



は、前の編み方と稍異り、蔓を先に作りたる第一段の此方側の輪の中より外に通ほして右上方より左巻に輪を作り、今潜りし輪の次の輪を中より外に通ほして右上方より左巻に輪を作り、先に通ほせし第一段の輪の右隣の輪を潜りて更に右上方より左巻に輪を作り、最初に作りし輪の右方を中より外に潜りて又中に入れ、第一段の次の輪を中より外に潜りて右上方に曲げ左巻になして輪違となすこと二圖に示すが如くして遂に全周を編み、第一段の輪と第二段の輪とを互に絡み合せて少しも無理なからしむべし。

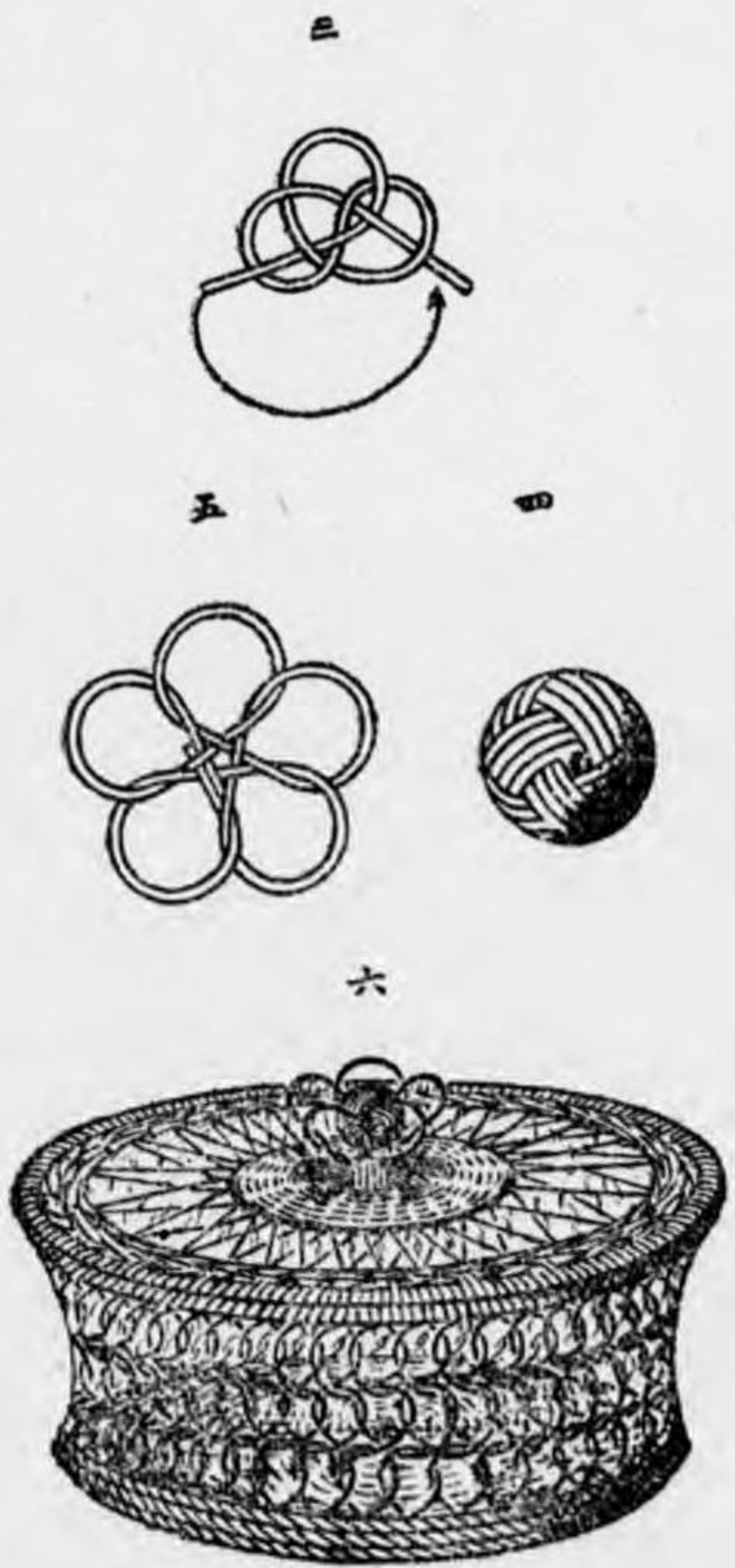
側の第三段を編むには、先づ第二段此方側の任意の輪を通ほして蔓を中に入れ、右上より左巻に輪を作り、第二段の右隣の輪を外より中に潜りて第二の輪を作り、又第二段の次の輪を潜りて第三の輪を作るに當り第一の輪の右方を外より中に潜りて外に出し、第二段の右隣の輪を外より中に潜りて第四の輪の左方を作る際第二の輪の右方を外より絡み、第二段の其の次の輪の外より中に入れこれを反復して全部の側を編製すべし。

斯くて側の口徑を五寸許となし、稍硬き老蔓を三度捲きて口に能く適合せしめ、蔓の兩端を薄く削りて縁蔓を何れも一樣の太さとなし五六個所許括りて加工に便したる後、剝蔓を以て縁を捲くものとす。其の方法は先づ縁蔓の間に剝蔓の一端を挟み六七分許右巻に捲きたる時、側の輪と共に二度捲きて又縁蔓のみを捲き、先に括りし輪より五つ目毎に括りて次第に捲き、遂に縁附を終るものとす。若し卷蔓短き時は、目障りのせざる所に於て繼ぎ足すべきは勿論なり。

蓋を作るには、長さ一尺三寸許の縦二十四本を實と同じく六本を一組として放射狀に組み、第一横及び第二横にて各二回捲きたる後、各縦を二本づつ二十四

組に分ちて、二本の第三横にて編み直徑二寸五分許となしたる後、二本の第四横にて互に二抑一潜して右綯にすること一回、次に同様に左綯にすること一回にして矢の羽組に編み其の端を縦の間に挟むべし。斯くて各の縦を一本づつ左右に分ち、隣合の縦を右を下左を上組みつつ中心より二寸許の所を二本の第五横にて二抑二潜し右綯に組みて一周したる後、更に左綯に組みて一周し、次に向側の縦五本を取りて左端の一本を右方に曲げ二潜二抑して其の端を蓋の内部分に入れ、これを反復して全周を編みたる後、蓋頸を作るものとす、それには先づ蓋を裏返して縦を起し、これを二本の横にて右綯にすること二回にして手前の縦三本を取り、其の左端の一本を右方に曲げて二抑し、漸次同様の方法を反復して一周したる後、更に一層これを鞏固にせんため尚ほ一回同様に編み、餘れる蔓を切り捨つべし。次に蓋と實とを能く一致する様、其の周圍に縁蔓を二・三回捲きて實の如く卷縁となし、五・六回置に二回縁蔓と蓋とを括り、これを反復して全部の縁を捲き、蔓を眼障りのせざる所に挟みて、最後に摘みを作るものとす。

摘は、三圖の如き九曜結を一方に圓めて球狀となし、同じ所を四度抑潜して四



圖の如き球となし、更に他の蔓を以て五圖の如き花形を作り直径一寸五分許に整へたる後、六圖の如く上方に曲げて長さ四寸許の細き蔓二本にて球と花形とを通

ほし、其の端を蓋の中心に刺して裏面に出し、右廻に抑へて井桁形に組むこと二回にして摘を蓋に取り付け、全部を作り上げるものとす。

二、放射組底圓形手籠 長さ一尺四寸許の縦十九本を五本づつ三組と四本一組とに分ちて放射状に組み、第一横及び第二横にて各三回捲きたる後、總べての縦を二本づつ十九組に分ち第三横にて編むこと二十回餘にして、更に各の縦を一本づつに分ちこれに長さ一尺許の縦各一本を添へて直径七寸許に編むべし。但この際縦偶數なる時は二本の横にて編まざるべからざる不便あれば、成

放射組底
圓形手籠

るべく縦を奇數に分ち一組は依然として二本となし三十七組とするを好しとす。次に底を裏返して此方側の縦三本を取り、左方の一本を右方に曲げて二押し其の端を外に出し順次これを反復して一周したる後、底の側面を上にして一回編み、最後に表面を出して更に一回編み、縦の餘端を切除すべし。要は右綯にせし蔓を二筋上下に重ね、最後の二筋は僅か内部に入れ、縦の端を籠の内面に出すにあり。右の如くして底の編製を終りたる後、側を編むものとす。

側は、輪違の四方連續より成る。其の編み初めは、蔓を底の縦又は横に通ほして、圓形貼底卷縁菓子盆の側と全く同様に此方側を左廻に編みて一周すべし。この際側と底との連絡は各の輪を皆底の縦又は横に通ほすか、若くは一つ置き又は二つ置きに通ほすを好しとす。側の第二段は放射組底圓形菓子器及び放射組底卷縁楕圓籠の第二段と全く同様に編み、第三、第四、第五段も第二段と全く同様にすべし。第六段は輪の上下を稍短く編み、側の深さを四寸二三分となしたる後、これに卷縁を附くるものとす。縁の心には長さ二尺六寸、幅四分、厚さ七八厘許の割竹を用ふ。この竹は、兩端三寸許を漸次薄く削りて重ね合はせ、其の

厚さを何れも一様にしたる後、火にて炙り圓形に曲げて側の上に重ね、剝蔓を以て右巻左廻に捲くものなり。縁と側との接觸する所は、縁と輪とを共に二、三回捲き、其の他の部分は縁竹のみを捲きて遂に全周を捲き終りたる後、提手を附け蓋を作るものとす。

手は、長さ三尺五、六寸の蔓八本を取り、四本づつ左右に分ちて一端より一尺許の所に一圓の如き淡路結を作り、更に蔓を各二本づつに分ちて四組となし、左方より第三組の蔓を左上方に曲げ、次に第二組の蔓を右上方に曲げてこれを抑へ、



ニ



右端即ち第四組の蔓を左上方に曲げて第二組の

蔓を抑へ、第三組の蔓に並行せしむ。而して左端即ち第一組の蔓を右上方に曲げ第三組及び第四組の蔓を抑へて第二組の蔓に並行せしめ、右上方に出でたる第二組の蔓を左上方に曲げて第一組の蔓を抑へ、更に左上方に出でたる第三組の蔓を右上方に曲げて第二組の蔓を抑へ、尙ほ右上方に出でたる第一組の蔓を左上方に曲げて第三組の蔓を抑へ、斯く左右交互に左方より右上方に曲げたる蔓は二抑一潜し、右方より左上方に曲げたる蔓は一抑二潜して長さ一尺二寸許に編み、其の端を左右二組に分ちて又淡路結を作り、これを中央より曲げて實に取り附くるものとす。即ち先づ其の端を二本一組として左右に分ち、互に全く反対の側の縁の上邊より一寸許下りたる所にこれを側の外より中に通ほし、側に沿ふて下に導き底を通ほして外に出し、右又は左に曲げ横と同様に縦を一潜一抑して其の端を外に出だし餘端を切り捨つべし。

蓋は、底と全く同様に編みて直径六寸五分許となりたる時、向側の縦三組を取りて左端の二組を右方に曲げ一潜一抑して中に入れ、更に右隣の縦一組を加へて前と同様に編み、これを反復して縁編をなしたる後、蓋を反覆して裏に出でた

る縦を二本の横にて二回右絢に抑潜し、此方側の縦三組を取りて左方の一組を右方に曲げ一潜一抑して中に入れこれを繰り返して蓋顎を作り餘端を剪除すべし。最後に蓋に手を附くるものとす、即ち先づ中心より七八分隔りたる所に蔓を通ほし、これを三度中心の左右に導きて往復し、縦を前後に潜らしめ且右絢として長さ二寸許となすべし。

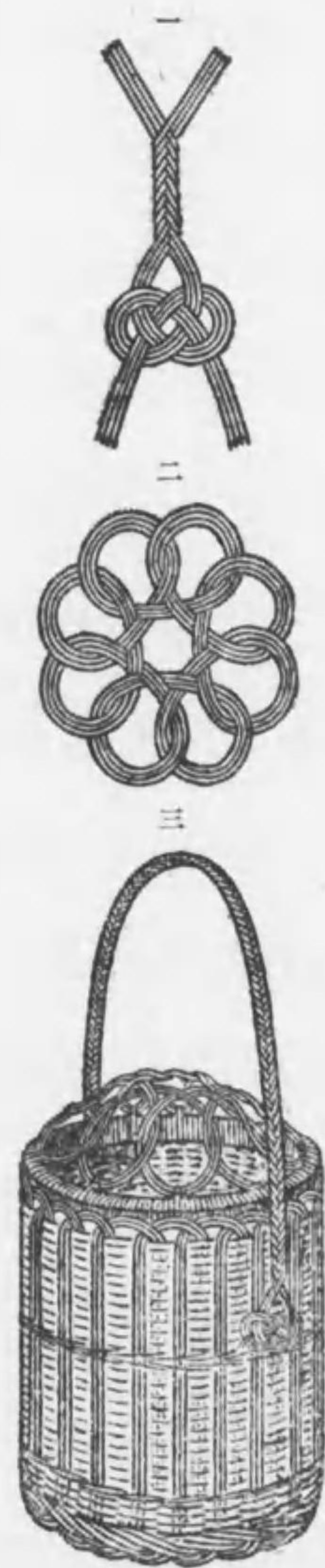
二三蓋附筒形提籠 長さ三尺許の縦十二本を三本づつ四組に分ちて井桁組となし、第一横及び第二横にて各三回編み、次に縦を二本づつ十二組に分ち二本の第三横にて抑潜すること數回にして、各の縦を二つに分ちて一本づつ二十四組となし、更に二本づつの縦を添へて何れも三本を一組となし、尙ほ四五回抑潜して直徑三寸六七分許の底を作りたる後、縦を上方に曲げて側を編むものとす。側は、二本の横にて編み、深さ二寸許となりたる時三本の横を隣れる縦の間に入れ、何れも二抑一潜して左絢となし、一周したる後、右絢に二抑一潜して胴締をなすべし。但こは後に縦を通ほすものなれば、成るべく緩に編み、完成後其の形の毫も緊縮せざるやうにすべし。斯くて又二本の横にて編み、深さ三寸五分許

蓋附筒形
提籠

胴締

となりたる時縁編をなすべし。其の方法は、先づ向側の縦二組を取り、左方のものを右方に曲げて一抑し、其の端を外に出すべし。これを反復して縁編をなしたる後、各の縦を外側の縦と縦との間に導きて兩隣の縦に並行せしめ、曩に三本にて編みたる横の間を通ほして底部に至り、又三本の横にて右絢に二抑一潜すること一回、次に二本の横にて一抑一潜すること三回許にして底足を編むものとす。底足は、底を裏返して此方側の縦五組を取り、其の最も左方のものを右方に曲げて二潜二抑し、其の端を中に入るべし、次に其の右隣の縦一組を加へて前と全く同様に編み、これを反復して全部の底足を作り、其の形を稍、内方に曲げて不用の蔓を切り捨つるものなり。

手は、長さ二尺許の蔓六本を一圖に示すが如く三本づつに分ち、一端より一寸二三分隔りたる所に淡路結を作りたる後、左右の蔓を中央に撓めて左を上右を下にして交互に組み、右端の蔓を左上に曲げて他の二本を抑へ、左方を四本、右方を二本となすべし。次に左端の蔓を右上方に曲げて三本の蔓を抑へ、左右各三本づつとなし、斯く交互に左右より中央に抑へて長さ一尺許となしたる後、蔓を



三本づつ左右に分ちて又淡路結を作り、其の端を側の中央より稍、上部に刺して二つの縦を抑へ、内部に出でたる蔓を左右に開きて横と同様に編み、其の端を縦の間に挟むべし。こは成るべく丈夫に挟み容易に脱げざるやうにすべし。
蓋は、特に長くして稍、太き精良なる蔓を選びて、二圖の如く互に一つ置きに抑潜して八瓣となしたる後、能く其の形を整理して中高となし、直径三寸二分許となすべし。斯くて同じ所を三重に捲きて花形を作り、更に其の形状を整理すべし。若し蔓の短き時は、便宜目障のせざる所に於て織ぐを好しとす。次に實に能く適合するやう長さ一尺二寸許の蔓を二回捲きて直径三寸七分許となし、剥

果物籠

蔓を以て右卷に捲きて花形の先と接觸する所は二回圓縁三淡路土瓶敷の如く括りて全周を作り、最後に蓋頸を作るものなり。蓋頸は、實の内部に能く箱入するやう蔓を上下に三、四度重ね、剥蔓にて捲きつつ花瓣と縁との繋を締めたる蔓に通ほして蓋の裏面に取り附くべし。

二四、果物籠 果物籠は、長さ四尺許の縦十七本を四本づつ三組、五本一組に分ちて井桁組となし、第一横にて二回捲きたる後、各の縦を二本づつ十七組に分ち第二横にて編むこと十四、五回にして直径一寸五分許となしたる後、縦を一本づつ三十四組に分ち更に一本を加へて三十五組となすべし。斯くて第三横にて編むこと十數回にして各の縦に長さ一尺九寸許の縦二本づつを添へて三本を一組となし、更に編みて底の直径三寸五分許となりたる時、縦を斜上方に曲げて側の編製に移るものとす。但底は初めより稍、内窪に編み、製作後中央のみを反對に押し上げて中高とするを好しとす。

側は、二圖に示すが如く次第に膨めて編み、深さ五寸許となりたる時、内徑六寸を適度とし、それより漸く口を狭めて深さ六寸口徑四寸五分許となすべし。次

に此方側の縦二組を取りて左端の二組を右方に曲げ右隣の縦を潜りて外側に
出すか、若くは此方側の縦三組を取りて左端の二組を右方に曲げて二潜し、これ
を繰り返して縁編をなすものとす。而して縁編を終りたる縦は、先の蓋附筒形
提籠と同じく側の外部を下に導きて底の外側に於て縦縮をなすものとす。即
ち底より三分許上に三本の横を順次縦の間に挟みて、何れも左廻右廻に二抑一
潜して五回絡みたる後底足を編むものとす。底足は先づ底を仰向となし、此方
側の縦四本を取りて左端の縦一組を右方に曲げ右隣の縦三組を二潜一抑して
其の端を中に入るべし。これを反復して底足を作り、残餘の縦を切り捨て、能く
其の形を整理すべし。

手は、長さ四尺許の蔓八本を左右各四本づつに分ちて、一端より二寸許の所に
淡路結を作りたる後、長き方を一圓の如く左右より曲げて右を下、左を上、交、重
ね、上に至るに従ひ次第に其の形を小さくすべし。斯くて上より第一組の左上方
に向へる蔓を右上方に、右上方に向へる蔓を左上方に曲げて左廻し、右上方に向
へる蔓を上となすべし。次に上より第二の蔓の右方を左上方に曲げて先に右

上方に向へる蔓を抑へ、左方の蔓を右上方に曲げて更にこれを抑へ、同様に第三
及び第四の蔓の右方を先に左方を後にして、それぞれ左上方及び右上方に曲げ
て交互に編製し、左右を各四本づつとなすべし。但第三蔓の右方は、左上方に曲
げて右方の第一蔓と第二蔓とを抑へ、其の左方は左方の第一蔓と第二蔓との間
より出して右上方に曲げ第二蔓と第三蔓とを抑ふべし。又第四蔓の右方は、右



方の第一蔓と第二蔓との間に出して左上方に曲げ、右方の第二蔓と第三蔓とを抑へ、左方は左方の第二蔓と第三蔓との間より右上方に曲げて、左方の第三蔓と第四蔓とを抑ふるものとす。次にこれを裏返して右を先に左を後に右左より交互に抑ふることに八回にして又表を抑ふることに八回、更に裏を抑ふることに八回、斯くの如く交互に表裏を八回づつ抑へて四角形の紐を編み、表面と裏面、右側面と左側面とはそれぞれ同様の組織となし、隣接せる面は全く上下反対の形状を呈せしむべし。而してこれが編製に當りて最も注意すべきは、何れの蔓も皆二抑して側面に出し、表面を編まば次に必ず裏面を編み、其の後にあらざれば決して再び表面の編製に用ひざることこれなり。斯くて長さ約二尺許となりたる時、又淡路結を作り其の兩端を實の口邊より一寸許下に取附くべし。其の方法は、蓋附筒形提籠に同じ。

蓋は、長さ一尺五寸許の縦十七本を四本づつ三組、五本一組に分ちて井桁組となし、第一横にて抑潜すること二回、次に各の縦を二本づつ十七組に分ちて第二横にて捲くこと三十回内外にして直径四寸許となしたる後、向側の縦五本を取

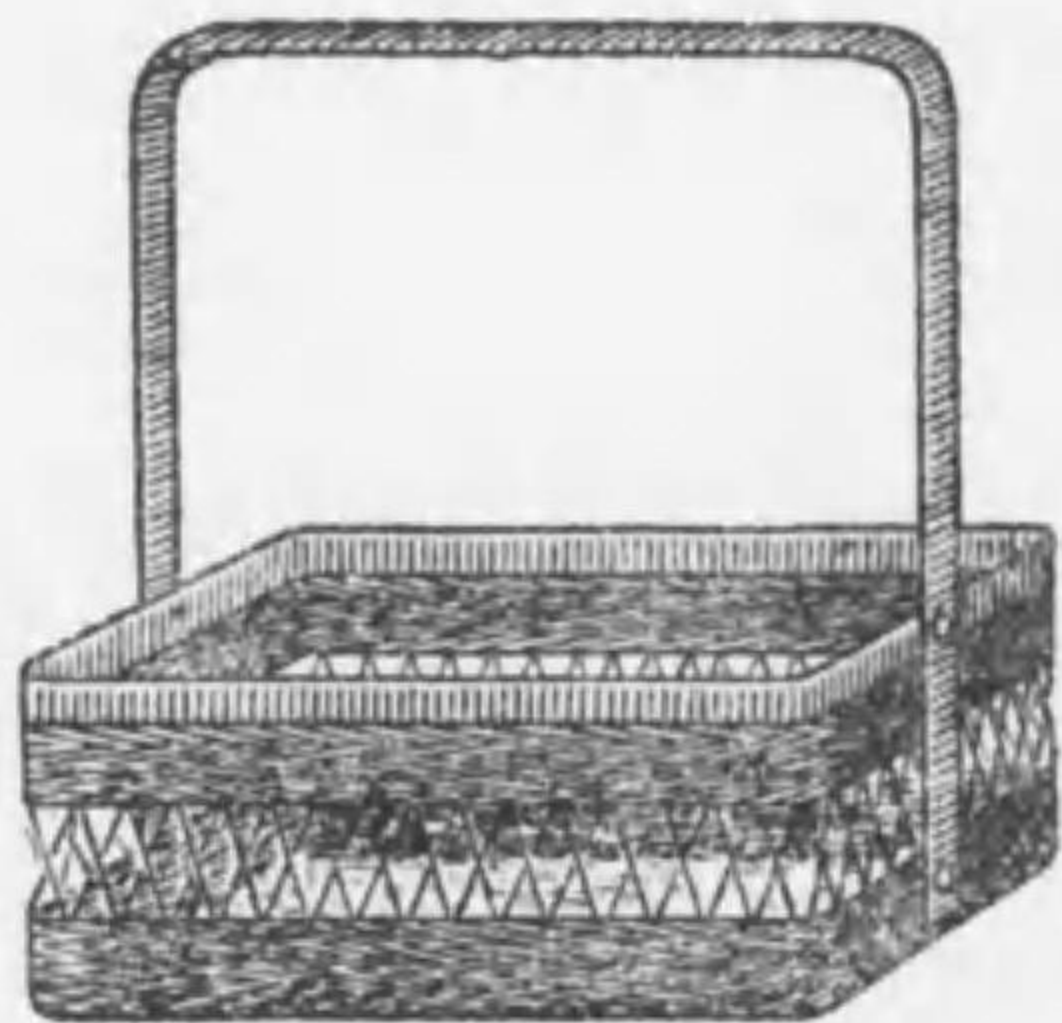
りて左端の一本を右方に曲げ二潜二抑して其の端を裏に出すべし。これを反復して縁編をなし、次に蓋を裏返して縦を二本一組となし、一本の横もて抑潜すること七八回にして蓋顎を固めたる後、此方側の縦五本を取りて左端の一本を右方に曲げ二潜二抑して其の端の中に入るものとす、これを反復して蓋顎を編み餘れる蔓を切り捨つべし。次に稍細き蔓もて蓋の上に装置すべき花形を作るものとす。先づ長さ六寸許の縦十三本を三本三組、四本一組として井桁形に組み、第一横にて二回捲きたる後、縦を二本づつ十三組に分ちて四・五回捲き、又一本づつ二十六本となし編製の便宜上一本を加除して奇數となし、更に五・六回編みて心を作り、最後に花瓣を作るを順序とす。花瓣は向側の縦を右廻に曲げて次の縦を潜り其の右側に並行して刺し込み、全部を同様にして花形を作るものなり。而して長さ一尺二寸許の蔓三本もて兩端より二寸許残して淡路結を作り、別に同じ長さの蔓三本を翼に作りたる淡路結の中央に通ほして遠淡路結を作り、二つの淡路結を互に直角となしたる後、四組の足を何れも五分許隔てて花形と蓋とを重ねたる中心に通ほし、蓋の裏に出して順次右廻に曲げ、最後の

角形巻手籠

組は最初に曲げたる蔓の下に通ほして井桁組となし、更に其の端を逆に折り曲げて左廻の井桁組を作り、これにて摘みの取り付けを終るものとす。蓋は、中央部を上より壓入して稍、中窪となすべし。

二五角形巻手籠 長さ一尺五寸許の縦三十四本を二本づつ一組として十七組に分ち、これを九寸の間に排列して等距離となしたる後、長さ一尺八寸許の縦二十二本と長さ九尺許の横十本とを準備してこれを組み合はせ、織底を作るものとす。即ち先づ十七組の縦と一本の縦とを一抑一潜して直角に編み、更に一本の縦を以て前と反對に抑潜したる後、長さ九尺許の横にて隣の縦と反對に抑潜して五回往復すべし。斯くの如く二本の縦と十七組の縦とを交互に抑潜し、更に長き横にて編むこと往復五回に及ぶべし、これを反復すること十回にして最後に二本の縦にて最初の如く組み、能く其の形状及び位置を整理して各の縦を中央に於て直角に組み、長さ九寸幅六寸許となすべし。次に此方側の縦三本を取りて、左端の一本を右方に曲げ其の右隣の二本を抑へ、これを反復して底締をなしたる後、側を作るものとす。

側を作るには、總べての縦を上方に曲げて何れも底に直角となし、初め底に於て隣合なりし縦各一本づつを取りて二本を一組となし、縦の間に三本の横を一本づつ順次に挟みて右綯に二抑一潜すること一回、次に左綯に二抑一潜すること一回、斯く交互に右綯及び左綯として側を編むこと



と前後六回若くは八回の後、其の端を横の間に挟み、更に各縦の左方を左上方に右方を右上方に開きて、左を上右を下に斜交せしめ、又二本の縦を一組として前述の如く矢の羽組に三本の横にて二抑一潜すること六回若くは八回にして上下を同様の組織となし、側の高さを三寸五分許となすべし。而して縦の長さを五分許に切り揃へたる後、長さ三尺内外幅五分厚さ四五厘許の縁竹を九寸に六寸の矩形に曲げ、更に其の中に適合する縁竹を入れて縦を挟み、剥蔓を以て右巻に縁を捲きて側を作り上げるものとす。角は、外の縁竹のみを一回、内外共に一回、外のみを一回捲きて巻蔓の重複を避く

●口縮は、蓋附菓子器の所に述べしが如く、細き蔓を以て九曜結を作り同じ所を三度抑潜して直径五分許の球となしたる後、薄き剝蔓を合せたる三筋の蔓を左右より交互に抑へて三平に編み、この紐を二つに曲げて球の上より下に通ほし一方を他方より一寸五分許長くすべし。斯くてこれを側の中央上部口邊より一寸五分許下の側に通ほして内部に出し、長き方を左上に導きて一段上の縦と縦との間より外に出し、左方より右方に曲げて編蔓を抑へ、再び中に通ほして先に左上方に導きたる編蔓を抑へ、更にこれを他端にて抑へ、左上方に向へる蔓の下を通ほして廻旋状に組み、能く締めて餘端を切り捨つべし。但九曜結は、口邊より一二分上に出だすを要す。次に前と同様に合剝蔓を三平に編みて長さ八寸許となし、これを先に附けたる口縮と全く同様に其の反対の側に取り附けて九曜結を掛くるやうにすべし。

手は、長さ一尺二寸許の蔓六本を蓋附筒形提籠の手の如く、兩端より四寸許編みて打ち均らし稍扁平となしたる後、其の部分を二つに曲げ添蔓をなして直径四分許の太さとなし、一端の乳形六分許を残して剝蔓にて捲き、手の中央二寸許

の間に蝦背を附け、更に他端にも同形の乳形を作りて卷蔓の解けざるやうにすべし。蝦背の作り方は、蝦背土瓶弦の製法と稍異り、別の剝蔓を背に添へて一端を五、六回捲き、この添蔓を卷蔓にて一潜一抑したる後、交互に二潜一抑すること



七八回にして更に一潜し、尙ほ其の端を抑へて手を捲き終りたる後、別の剝蔓を背蔓の第一節に右より左に通ほし、右下に曲げて一端を抑へ、第四節の右より左に通ほし、右上に導きて第二節の右より左に通ほして右下に導き、次に第五節に通ほして右上に導き、これを反復して最後の節に通ほしたる後、右上に導き、右方より左方に刺して工を終るものとす。要するに蔓を右より左に通ほして右下に曲げ、二節を隔てて右より左に通ほし、右上に曲げ、これを繰り返して蝦背を作るものとす。同様にして二つの手を作りたる後、側の乳形に取り附くるものなり。乳形は、長さ一尺四

寸許の細蔓三本を二つに曲げて、側の中央より左右に一寸八分許隔りたる第一側最上の縦と其の下の縦との間に内より外に通ほして淡路結を作り、其の兩端を第二側最下の縦と其の上の縦との間に通ほして内に入れ、更に第二側の第三縦と第四縦との間に出して六本の蔓を蓋附筒形提籠の手と同じく一寸許編みて手の乳形に通ほし、これを二本づつ三組に分ちて一組を第四の縦と第五の縦との間より、他の二組を左右に分ちてこれを第五縦と第六縦との間より内部に通ほし、右方のものを左に曲げ左方のものを右下に曲げてこれを抑へ、更に下方のものを上方に曲げて右下に向へる蔓を抑へ、其の端を初めに曲げたる蔓の下に通ほして能く締むること口締に同じ。これと同様にして左右表裏に四個の乳形を作り、これを以て手を取り附くるものとす。

旅行用、バスケット

二七、旅行用「バスケット」旅行用「バスケット」には、其の形状大小構造製法等種々あれども、今次に比較的簡單なるものを擧げん。

底は、長さ二尺四寸許の縦三十九本を三本一組として十三組に分ち、これを九寸の間に排列して縦と縦との距離を等しくしたる後、長さ二尺七寸許の縦二十

本と五尺五寸許の横九本とを中央にてこれに直角に組むものとす。即ち先づ一本の縦を十三組の縦の中央より左へ三寸許隔りたる所に於て一つ置に抑潜して組み、又一本の縦を其の右に一潜一抑して前の縦と全く反對に編み、更に長き蔓にて三回往復抑潜し、同様に順次其の右にこれを反復すること前後九回にして最後は二本の縦蔓を初めの如く抑潜して幅六寸長さ九寸許の織底を編製すべし。次に底を起して短邊を上下に立て、左上の隅より縦を右廻に抑潜して底締をなすものなり。それには先づ左より第一の縦三本の中左の一本を左側の縦とするため左方に曲げ、中央の一本は右方に曲げて右端の一本と左より第二の縦三本とを抑へて第三縦左の一本と共に前側の第三縦となし、右の一本は右方に曲げて第三縦の中央のものまで抑へて第四縦左の二本と共に前側の第四縦となすべし。第二縦左の一本は左方に曲げて前側の第一縦となし、中央のものは其の儘前側の第二縦となし、右の一本は右方に曲げて第四縦の中央のものまで抑へて第五縦左の一本と共に前側の第五縦となす。第三縦左の一本は、前側の第三縦に用ひられ、中央のものは右方に曲げて第五縦左の一本までを

抑へて其の右隣の縦と共に前側の第六縦となし、右の一本は右方に曲げて第四縦及び第五縦を抑へて、第六縦左の二本と共に前側の第七縦となすべし。第四縦左の二本は前側の第四縦に用ひ、右の一本は右方に曲げて第五縦及び第六縦を抑へて第七縦左の一本と共に前側の第八縦となすべし。第五縦左の一本は前側の第五縦に用ひ、中央の一本は其の儘前側の第六縦となし、右の一本は右方に曲げて第七縦の左二本までを抑へて第八縦の左二本と共に前側の第九縦となすべし。第六縦左の二本は前側の第七縦に用ひ、右の一本は右方に曲げて第八縦までを抑へて第九縦左の一本と共に前側の第十縦となすべし。第七縦左の一本は其の儘前側の第八縦に用ひられ、中央のものは右方に曲げて第九縦の左一本までを抑へて其の右隣の縦と共に前側の第十一縦となし、右端のものは第九縦までを抑へて第十縦左二本と共に前側の第十二縦となし、第八縦左の二本は前側の第九縦となし、右の一本は右方に曲げて第十縦までを抑へて第十一縦左の一本と共に前側の第十三縦となす。第九縦左の一本は前側の第十縦に用ひられ、中央のものは其の儘前側の第十一縦となし、右方のものは第十縦全部

を抑へて第十一縦左の一本と共に前側の第十三縦となし、第十縦左の二本は前側の第十一縦に用ひ、右の一本は右方に曲げて第十二縦左の二本までを抑へて第十三縦の左一本と共に前側の第十五縦となし、第十一縦左の一本は前側の第十三縦となし、中央のものは右方に曲げて第十三縦即ち右端の縦左一本までを抑へて其の右隣の縦と共に前側の第十六縦即ち右端の縦となすべし、右の一本は右方に曲げて残れる底の縦全部を抑へて右側第一縦の左一本と共に右側の第一縦となし、第十二縦左の二本は前側の第十四縦となし、右の一本は右方に曲げて前側の縦及び底の右側第一縦を抑へて第二縦の左一本と共に右側の第二縦となすべし。第十三縦左の一本は前側の第十五縦となし、中央の一本は其の儘前側の第十六縦となし、右の一本は右方に曲げて底の右側第一縦及び第二縦を抑へて底の右側第三縦の左一本と共に右側の第三縦となすべし。次に底を左に廻はして長邊を立て左より第一縦の左一本は右側の第一縦となし、右一本は右方に曲げて第二縦及び第三縦を抑へ、第四縦左の一本と共に右側の第四縦となし、第二縦左の一本は右側の第二縦となし、右の一本は右方に曲げて第三縦

及び第四縦を抑へて第五縦の左一本と共に右側の第五縦となすべし。同様に右方の縦を右に曲げ二組の縦を抑へて其の次の左方の縦と共に側の縦となし、これを反復して、側面の底締をなしたる後、底を左に廻はして前側と同様に後側を右側と同様に左側を編みて底締を終るものなり

側を作るには底を「バスケット」用編型に打ち付け、又は平に置いて全部の縦を上、に折り曲げ、其の間に三本の横を順序に挟みて何れも右絢に二抑一潜して一周したる後、更に左絢に一周して矢の羽組に側締をなし、次に二本の縦にて一抑一潜して側の深さ七八分許となりたる時、二本の縦には其の間に長さ七寸許の縦一本を添へて何れの縦も三本を一組となし、更に横を編みて側の深さを六寸許となすべし。但側は垂直とすることなく、何れも中央を稍、外に張出すべし。斯くて更に側締の如く三本の横にて右絢及び左絢に二抑一潜すること各一回にして上下を均齊となし、縦の端を五分許に切り揃へ縁を附くるものとす。總べて蔓を繼ぐには、其の先端を中に入れ、外観を美しくすべし。

縁を作るには、先づ長さ三尺四・五寸、幅五分、厚さ一分許の竹二本を用意し、一本

を長邊一尺短邊六寸三分許の矩形に曲げて兩端を重ね合はせ、更に他の一本は其の内部に能く適合するやうに曲げて、其の縁竹と縁竹との間に側の縦を挟み、剝蔓を以て縁を捲くものとす。縁を捲くには縦と縦との間は勿論、各、の縦の間にも剝蔓を通して隙間なく美しく捲くべし。角は外縁を一回、内外共に二回交互に捲くこと三回にして更に外のみを一回捲き其の左右は内外共に捲くものとす。

蓋は、長さ六寸五分の縦二本と八寸五分の縦一本とを一組とせる縦十七組を作り、これを九寸の間に排列して各縦の間を等距離となし、次に長さ一尺と一尺三寸との縦各、十一本を用意して二本を一組となし、更に長さ五尺許の横十本を準備して底と全く同様に組み、長さ九寸幅五寸五分許の織蓋を作り、周圍に出でたる縦を三本の横にて右絢に二抑一潜して一周したる後、又左絢に一周し、更に右絢に一周して蓋締をなすべし。この際何れの縦も長さ一本のみ蓋締の外に出づれば、それを順次に右方に曲げて其の隣の縦の間に刺し同形の乳形を作りたる後縁を捲くものとす。縁は、長さ三尺五六寸、幅七分、厚さ三厘許の縁竹を矩



形に曲げて緩に實を被ふやうにし、剝蔓もて縁竹のみを五六回と、乳形と共に二回と交互に捲きてこれを織蓋の周圍に取り附くべし。織蓋に用ふる蔓は、蓋締を除くの外は稍細きを好しとす。

手は、長さ二尺六寸許の太蔓を二重に捲きて半月形となし、弦の部分に長さ五寸幅三分厚さ一分許の力竹を添へて剝蔓にて捲きたるもの二個を作り、これを蓋の中央に取り附くるものとす。其の方法は先づ一つの手を蓋の中央より八分許前に弦を蓋に接して立て左右を等距離にしたる後、「バスケット」を提ぐる際蓋を損せざるやう其の裏面に長さ八寸直径一分強の力竹を添へ、長さ五六寸の太蔓にて手の兩端より五分許隔りたる所を、圖に示すが如く蓋の編蔓及び力竹と共に三四回捲きて蔓の兩端を蓋の裏面に出し、編蔓と同様に縦の間に挟む

ものとす。他の手も蓋の中央より八分許後に、前の手と同様に排べて取り附くるものなり。

蓋と實との蝶繫は、長さ八寸許の細蔓六本若くは八本を左右より交、斜上に組み、紐を作りたる後、二つに折り曲げて其の端を蓋の後側の左右兩端より三寸許隔りたる所の織蓋と蓋締との間へ通ほし、それぞれ左右より五つ目の縦を挟みて裏に出し、乳形の長さを二寸餘となし、各の蔓を四組に分ちて廻旋形に組み、更に長さ三寸許の細蔓四本を二本一組として乳形の根許を括るべし。即ち先づ一組の蔓を以て乳形の編蔓を左右に抑へ、其の端を縁竹と織蓋との中間に通ほして裏面に出し、これを他の一組の蔓にて前後に十字形に抑へ、其の端を蓋の縦の間に通ほして裏面に出し、廻旋形に抑潜して締め括りをなすものとす。蔓多くして取扱に不便なる時は、便宜半數位に切り捨つべし。次に蓋を實に被ひ、二つの乳形を背後に曲げてこれに稍太き一本の蔓を通ほし、側の横六七本と共に緩に三回捲きて實に取り附け、開閉を自由にしたる後、其の端を左右に開きて横と同じく縦の間に挟むべし。

口締は、蓋の前側に蝶繫と同一の方法を以て同形の乳形二つを作り、實には蝶繫の乳形を括りしものより稍大なる乳形を一本の太蔓にて左右に各一つづつ作り、これに長さ五寸直徑一分五厘許の太蔓を通ほして中央より曲げ、其の端を剝蔓にて捲き門を作るものとす。其の捲き方は、剝蔓の一端を五分許曲げて二重となし、長き方にて五六回太蔓を捲きて其の端を先に曲げたる蔓に通ほし、他端を引き解けざるやうに締むべし。素より蝶繫及び口締は、左右前後均齊にして、口締の上下の乳形は分離すれども門は蓋の乳形に通ほして下に抑へ、右又は左に廻はしつゝ倒す時は、口を締むることを得べし。

第二章 羊齒細工

意義

目的

材料

羊齒細工は、羊齒を以て土瓶敷状差籠等の日用品を作る細工なり。

目的 羊齒細工は、材料に關する知識を授け、其の處理法及び加工法の一般を知らしめ、兼ねて副業思想を養ふを旨とす。

材料 本細工の主要材料には羊齒を用ひ、補助材料には染料軟化劑、厚紙、板膠、

主要材料
羊齒

大羊齒

小羊齒

糊、針、金釘等を要す。

羊齒 羊齒は又齒朶と書き、其の種類極めて多けれども、本細工の材料として普通に用ひらるるものは、大羊齒及び小羊齒なり。この外雄羊齒、濕氣羊齒、兩面羊齒、姫蕨、犬蕨等も使用せらる。

大羊齒 大羊齒は、裏白科に屬する常緑の隱花植物にして、多年生の草本なり。一名裏白、諸向、鬼羊齒、穗長等と稱す。好んで暖國の山中に叢生し、能く濕地に繁茂す。根莖は土中を葡萄して隨處に葉柄を出し、大なるものは其の高さ數尺に達す。葉柄は順直にして光澤ある褐色を帯び、性剛堅なり。分岐して二又となり、枝は頗る長し。數多の複葉は羽狀をなし、表面は鮮綠色を呈して光澤あり、裏面は白粉色なるが故に裏白の名あり。こは其の葉莖共に容易に枯れざるを以て、年始の注連飾に用ひ長壽を祝福す。葉柄は伐採して箸、筆軸、土瓶敷、茶盆、煙草盆、パイプ、狀差、短冊掛、額縁、小箱等の如き、屈曲少き細工に用ふ。

小羊齒 小羊齒は、裏白科に屬する多年生の草本にして、大羊齒より稍小なるを以てこの名あり、又一つに蟹羊齒と稱す。廣く溫帶地方に分布し、本邦中部以

雄羊齒

南の山地に自生せり。葉は分岐して叉状をなし、表面は深綠色、裏面は白粉色なり。葉柄は褐色にして大羊齒より細く小なれども、強靱にして毛なく光澤あり、其の長さ小なるものは一尺許なれども、大なるものは三四尺に達す。採つて籠を編み、又羊齒板として各種の器物を作るに用ふ。

雄羊齒 雄羊齒は一名綿馬羊齒と稱し、水龍骨科に屬する大形の羊齒にして能く山地に自生す。葉は、二回羽狀に分れ、各小葉は其の先端微細なる鋸齒狀を呈す。葉柄は褐色の毛茸を有し、其の長さ一二尺に過ぎずと雖も、細くして脆からざるが故に籠類の製作に適す。

濕氣羊齒

濕氣羊齒 濕氣羊齒は水龍骨科に屬する普通の羊齒にして、山野の陰地に自生す。葉は一回羽狀複葉にして各羽片も亦稍羽狀に分裂し、各裂片の縁は僅に微細なる鋸齒狀をなす。葉柄は、其の長さ一二尺に過ぎずと雖も細くして柔軟なるが故に籠類の製作に適す。

兩面羊齒

兩面羊齒 兩面羊齒は、水龍骨科に屬する多年生の羊齒にして、能く山地に自生す。地下に塊狀の根莖を有し、これより叢生する葉は高さ二尺許に達す。三

姫蕨

回羽狀複葉にして葉柄は平滑なれども、葉身には短き毛茸を有す。小羽片は、稍斜方形を呈し、縁には鋸齒を有す。葉柄は長さ一二尺に過ぎざれども、柔軟なれば籠類の製作に用ひらる。

姫蕨 姫蕨は、水龍骨科に屬する大形の羊齒にして、山野の陰地に自生す。其の小なるものは小羊齒に似て細く、大なるものは大羊齒の如く葉の長さ三尺に達し、葉柄太く其の全長四五尺に及ぶものあり。細きものは籠の製作に、太きものは指物の製作に用ふ。

犬蕨

犬蕨 犬蕨は、水龍骨科に屬する羊齒にして到る所の山野に自生す。葉は瘦せて長く、大なるものは其の長さ二尺に及ぶ。疎に二回羽狀に分岐し、各羽片の小葉は鋸齒狀を呈し、先端細く尖る。葉柄は長さ一二尺に過ぎずと雖も、細くして靱性あれば籠類の製作に使用せらる。

薇

薇 薇は、山林原野に自生する薇科植物なり。其の幼芽は食用に供すべく、其の嫩葉は卷縮する形狀蕨に似たり。葉は、二回羽狀に分裂したる支柄上に楔形にして鈍頭又は稍圓頭の小葉を排列し、小葉は微細なる鋸齒を有す。其の成長

補助材料
染料
軟化劑
炭酸曹達

したるものは長さ二・三尺に達し、能く大羊齒に似たる製作に用ひらる。特に其の髓心は柔軟にして屈曲自在なるが故に、初步の籠細工に適す。

染料 染料は、羊齒を染むるに用ふ。普通に使用せらるるものは、茶粉・洋紅・紫粉・青竹粉・オーラミン・エロー・サフランニン・ログード・重クロム・酸加里等なり。

軟化劑 羊齒の軟化劑には、炭酸曹達・苛性曹達・苛性加里・醋酸等を用ふ。

炭酸曹達 $\text{CO}_2\text{N}(\text{H}_2\text{O})_2$ は、單に曹達又は洗濯曹達と稱し、食鹽を主要原料として製したる無色透明の結晶なり。其の製法に、ルブラン法と、アムモニア曹達法との二種あり。ルブラン法は、食鹽に硫酸を作用せしめて生じたる硫酸曹達を石灰石及び石炭と共に反射爐中に入れて焼き、其の灰を水に溶して製する方法にして、我が國に於ける炭酸曹達は専らこの製法による。アムモニア曹達法は、食鹽の冷溶液に「アムモニア」を溶解し、これに炭酸瓦斯を壓入して重曹の沈澱を造り、次にこの沈澱を熱して炭酸瓦斯と曹達灰とを分解せしめたる後、曹達灰を水に溶解して結晶せしむるものなり。能く水及び温湯に溶け、其の溶液は強きアルカリ性反應を呈し、一種不快の味を有す。硝子・石鹼・苛性曹達等の

苛性曹達

製造に用ふる外洗濯及び軟化劑となす。

苛性曹達 NaOH は又水酸化「ナトリウム」と稱し、炭酸曹達の溶液に石灰乳を加へて煮沸するか、若くは食鹽の溶液を電解して製す。工業上多量に製造するには多く後者に依る。其の方法は、融解せる食鹽又は食鹽水に電流を通ずれば陽極に鹽素を生じ陰極に「ナトリウム」を生ず、然れどもこの「ナトリウム」は直に水と作用して苛性曹達となる、この溶液を蒸發して水分を除き、型に注ぎて細き棒狀に凝固せしむ。普通市上に見ゆる苛性曹達は、白色結晶狀の固體にして棒狀又は塊狀・粉狀等をなす。質硬くして脆く、水及び酒精に能く溶解し、強きアルカリ性を有す。石鹼の如き觸感を有し、強烈なる腐蝕性あり、舌觸り苛烈にして皮膚を犯し痛感を覺ゆ。極めて潮解し易く、空氣中の炭酸瓦斯と化合して漸次炭酸曹達に變ず、故にこれが保存には能く密封するを要す。こは苛性加里に比して廉價なるを以てこれに代用し、工業上其の用途極めて廣し。石鹼の製造・石油及び「コールタール」の精製・木材紙料の製造用として又化學藥品及び曹達の製造工業及び家庭の洗濯漂白劑として其の用途尠からず。年々歐米より

輸入すること百二十萬圓に上る。

苛性加里 苛性加里 NaOH は又水酸化「カリウム」と稱し、炭酸加里の溶液に石灰乳を加へて苛性化し、不溶解の炭酸石灰を除去して清澄液を蒸發するか又は鹽化「カリウム」の水溶液を電解して鹽素と「カリウム」とにし、この「カリウム」に水を用せしめて水酸化「カリウム」を造る、この溶液を含水量八%まで煮詰めて型に注ぎ、通常長さ四寸直径二分五厘許の棒状となす。これは白色の固體にして著しく有機質を侵蝕するの性を有し、能く濕氣を吸収して忽ち潮解す、又空氣中に於ては炭酸瓦斯を吸収して炭酸加里となる、水及び酒精に溶解し易く、其の溶液は強き「アルカリ」性なり。これは重要な工業藥品の一にして工業上及び化學上其の用途廣く、最も多く用ひらるるは石鹼の製造なり、此の外、棧酸の製造及び染色用、藥用等に用ふること尠からず。

醋酸 醋酸 $(\text{C}_2\text{H}_3\text{O}_2, \text{CH}_3\text{COOH})$ は有機酸類中最も重要なものなり。これが製法には、酒精の酸化に依るものと木材乾餾の副産物より製するものとあり。前者は三十五度許の溫度に於て桶に鉋屑を充たし、上より六乃至一〇%の稀釋酒精

醋酸

苛性加里

を注下して、其の酒精が鉋屑を浸し桶の底に達する間に、「バクテリア」の作用によりて空氣中の酸素を吸収し酸化して醋酸となる方法なり。後者は、木材乾餾の生成物の一たる木醋液に石灰を加へて中和し、熱して木精「アセトン」等の他の成分を餾出せしめ、残留する醋酸「カルシウム」に適量の鹽酸を加へ蒸餾して製す。純醋酸は無色透明の液體にして水に能く溶解し、一種の臭氣を放ち、鋭き酸味を有す、一七度以下の溫度に於ては結晶して固體となるが故に、氷醋酸の名あり。普通濃醋酸と稱するものは、約三〇%許の純醋酸を含み、食醋は通常二乃至六%の純醋酸を含むものなり。これは諸種の醋酸鹽、鉛白「コールドターナル」染料及び火薬の製造食物の貯藏等に用ひられ、又食用とする外、醫藥に用ふる等其の用途廣し。本邦に於ては近年これを製出するに至りしが、其の産額少きを以て國內の需要を充たすに到らず、歐米諸國より輸入すること年々二三十萬圓に上る。

厚紙 厚紙は、羊齒の一面を削りてこれに貼附し、所謂羊齒板を作るに用ふ。

板 板は、専ら製品の素地とするに用ふ。其の材質は主として松、杉、樅、朴、桂等を用ふ。

厚紙板

膠

護謨膠
醋酸膠

膠は、堅牢を要する羊齒板の貼料となし、又緊要なる部分を接合するに用ふ。普通の膠は、速に凝固して使用上の不便尠からざれば、成るべく護謨膠又は醋酸膠を使用すべし。護謨膠は、湯煎したる三千本膠に同量の護謨糊と少量の「グリセリン」を加へて製し、醋酸膠は、濃厚なる膠液八に純醋酸二を加へて製す、共に冷却後二三日間は糊状を呈して使用上頗る便利なる上、其の膠著力は普通の膠と別に異なる所なし。

「フォルマリン」膠

精品の膠著には、濕氣を去るため接合部の両面に五〇%の「フォルマリン」を施し、約二十分間許経過したる後、普通の膠を以て接合するを可とす。これ所謂「フォルマリン」膠にして、膠著後數日を経れば不溶性に變質し、濕氣及び熱度に對して鞏固なり。

糊

磐石糊
護謨糊

糊は、磐石糊又は護謨糊を好しとす。磐石糊には、麩を精製したるものと、藕を布にて濾しこれに微量の食鹽を加へて乾かし、能く粉碎したるものを水にて練りたるものとあり、共に接合力強く水に對して丈夫なり。護謨糊は、亞刺比亞護謨を水と共に煮て製したるものなり。何れも其の接合力は膠に及ばざれ

ども、普通の糊に比すれば遙に強く且糊著の速なると殘餘の使用し易きとの長あり。殊に護謨糊は、別に防腐劑を要せずして長く腐敗せざれば、使用上頗る便利なり。

針金

針金 針金は、羊齒を縫ひ又は編むに用ふ。縫ふには二十二番線内外、編むには二十八番線位の亞鉛引鐵針金を好しとす。特に大形のものを作らんと欲せば、更に一層太きものを用ふべし。

釘

釘 釘は、板及び羊齒を接合するに用ふ。銅、眞鍮、鐵等の小釘及び木釘、竹釘等を使用す。

羊齒の採集法

羊齒の採集法 羊齒は、溫暖なる地方に於ては到る所の山野に自生すれども、地勢及び土質によりて其の品質に幾分の差あり。總べて風通し好き松林等の瘠地に生ずるものは、其の色澤美麗にして質強く、帶黒褐色を呈して品質極めて優良なり、殊に晩秋の候となり枯草落葉後に於て其の著しきを知るべし。日常好き肥沃の山野に生ずるものは、其の性軟弱にして弾力乏しく、概ね其の色淡褐色にして艶悪く品質稍劣等なれども、著色に便なるの長あり、屈曲を要する籠類

の製作に用ひらる。

羊齒は、普通三年目の晩秋に枯死するものなれども、稀に五六年に及ぶものあり、こは年々一段づつ増加するものなれば、其の年齢は葉の段數によりて容易に知ることを得べし。細工には、其の用途によりて一年生乃至三年生を用ふ。一年生は、其の組織未だ完成せざれば、晩秋の候より翌年の三月頃までの間に折取し、二年生及び三年生は、四時任意の時期に採取すべし。但春夏の候は草木繁茂して採集上の不便尠からざる上、成長の時期なれば多少其の品質軟弱となるを免れず、故に成るべく農閑を利用して秋冬の候に採取するを好しとす。四年生以上のもは、其の色黒色を呈し、弾性乏しくして罅裂し易く、品質不良なれば使用に適せず。小羊齒の一年生は、其の質柔軟にして韌性に富めば、籠類の編製に最も適切なれども、其の色淡くして光澤乏しく、乾燥後稍収縮するの嫌あり。二年生は一年生より其の質稍硬くして材色も稍濃厚なり、籠の編製に賞用せらる。三年生は品質極めて優良にして其の質堅緻なるのみならず、弾性強く脂氣に富み光澤好く、其の組織略同一なれば、堅牢を主とする指物の製作に用ひらる。然

れども弾性强きに過ぎ稍加工に困難なれば、概ね藥品を以て軟化して屈曲するを常とす。

こは、便宜上級兒童に命じて折取せしむるか、又は農閑期に採集したるものを購入して使用すべし。これが採集法は、根許より狭にて切り取るか、又は自然に枯死せしものの中より長くして無疵のものを選びて折取るべし、努めて濫拔を避くべし、然らざれば幼莖の發生を妨げ、翌年の收穫に多大の影響を及ぼすのみならず、動もすれば根絶するの虞あり、故に一度採集したる所は三四年間休採するを好しとす。

羊齒の處理法 選別

羊齒の處理法 採集したる羊齒は、同種細太長短軟硬によりて選別し、葉面を切り捨てたる後、粗製の籠類及び練習には、其の儘直に使用することあれども、普通には更に適當の處理法を施すものなり。

總べて羊齒は、假令冬期に採集したるものと雖も、其の葉柄に多少の水分を含有し、帶緑褐色を呈するを常とす。故に豫めこれを乾晒するを好しとす。

採取したる羊齒を乾晒せんには、先づこれを流水中に浸すこと一晝夜間許に

乾晒

して引上げ、日光に乾かさば細きものは四日乃至十日間許に、太きものは十日乃至二週間許にして略乾燥すべし。然れども尙ほ一層短時日に乾かし且指物の如く上等の製作に用ひて反張屈曲の憂なからしめんには、淡水を以て煮沸し沸騰後尙ほ一時間許加熱して日光に晒す時は、細きものは三日乃至一週間許太きものは一週間乃至十日間許にして乾晒すべし。然れどもこの法による時は、往々羊歯の色澤を損じ、且若き羊歯にありては屢、其の表面に縦皺を生じ艶を失ひて、上等の製作に用ひ難きことあり。この憂なからしめんには、生羊歯又は一晝夜間許流水に浸したる羊歯を、水蒸氣にて蒸煮すること一・二時間許にして取出し、日光に乾かすを好しとす。

採集したる儘の羊歯は、概ね剛くして自由に屈曲すること能はざれば、籠の製作にはこれを軟化せざるべからず。其の方法には熱湯軟化法、アルカリ軟化法、醋酸軟化法の三種あり。

熱湯軟化法は、乾燥せる羊歯を熱湯にて沸騰後一時間許煮沸して軟化する方
法なり。こは主として若羊歯又は稍細き老羊歯に施すものにして、其の水分の

軟化

熱湯軟
化法アルカリ
軟化
法

乾かざる中に使用すべし。この方法は、其の効果顯著ならざるを以て、曲度の大ならざる製作に用ふる羊歯の軟化に行ふを常とす。

「アルカリ軟化法」は、炭酸曹達苛性曹達苛性加里等の「アルカリ」水溶液を以て煮沸して軟化する方法なり。こは主として小羊歯の如き硬質羊歯にして、特に曲度の大なるものを作らんとする場合に施すものにして、最も普通に用ひらるるものは炭酸曹達の溶液なり。其の濃度は、五乃至七%許を適度とす、即ち約四升の水に百匁乃至百五十匁許の炭酸曹達を溶かし、これに一貫目許の羊歯を浸漬して煮沸すべし。勿論長く加熱する時は、次第に其の溶液減少するを以て補充するか又は過量の溶液を以て煮沸すべし。苛性曹達及び苛性加里は、通常〇・一七乃至〇・三四%の溶液を用ふ、即ち水四升に一本乃至二本を溶解したる液を以て、沸騰後一時間以上煮沸するものとす。但「アルカリ」溶液を以て處理したるものは、必ず清水又は熱湯を以て充分能く洗滌したる後使用すべし。尙ほこの法に依れる軟化羊歯は、其の色稍濃厚となり乾燥後多少脆質に變じて著しく撓屈性を失ふに至るものなれば、これが使用に當りては必ず充分能く水に潤ほすこ

醋酸軟
化法

とを忘るべからず。

醋酸軟化法は、醋酸の稀釋溶液を以て煮沸する方法にして、諸種の方法中最も有効なるものなり。其の方法は先づ葉柄を灰又は磨砂にて磨き、一日間許清水に浸したる後、〇・一乃至〇・二六%許の稀醋酸を以て煮沸するものとす。即ち純醋酸二匁乃至五匁を約四升の水に溶かして其の中に一貫目の羊齒を浸漬没入して沸騰後一時間許煮沸すべし。この法に依れる軟化羊齒は、曲度の大きな製作に適し、且乾燥するも二、三時間水に浸す時は又能く柔軟となりて頗る加工に便なり。

羊齒は、乾燥後美しき栗色を呈するものなれども、又地質によつて多少其の色澤を異にするを免れず。然れば同色のものを多量に要する時及び自然色以外の色澤を得んとする時は、これに著色せざるべからず。其の方法に材料を著色するものと製品を著色するものとの別あり。材料を著色するものは艶を出すに便なれども、切断面の目立つ缺點あり、これに反し製品を著色するものは、全部を一様に著色するの利あれども、多量に染め難き上艶を出すに困難なれば、便否

著色

を慮り其の宜しきに就くべし。

羊齒を著色せんには、先づ布と灰又は磨砂とを以て其の表面を磨き、五%許の炭酸曹達液を以てこれを一時間以上煮沸して軟化したる後、清水を以て充分能く水洗すべし。素より豫め「アルカリ」軟化法を施したる羊齒は、この操作を要せざるは勿論なり。特に上等の製作に供せんとするものは、「アルカリ」軟化法を施したる後、更に熱湯洗淨法を行ふを好しとす。

斯くて適度に調合せられたる染料を少許の水に充分能く溶解したる後、染鍋に入れたる適量の水に稀釋して其の中に羊齒を浸漬し徐に加熱すべし。この際時々其の色加減を検し適當の著色を得たる後、取出して直に水洗すべし。更に其の著色をして一層安定鞏固ならしめんには、〇・八三%許の明礬水即ち水一升に四匁許の明礬を溶かしたる溶液を作り、其の液を適度に温めて其の中に著色羊齒を没入して直に引き上げべし。但羊齒は熱體を以てするを好しとす。羊齒は元來鹽基性なるを以て、染料もこの性質を顧みて使用すべし。特に著色上注意すべきは、鹽基性染料は日光に弱く、均一を缺き、品質光澤を損じ、羊齒固有

の色澤を失ひ、却つて其の雅致を損ずることあれば、籠類の外は成るべく着色せざるを尙ぶ。黄赤を除くの外は、略、發色することを得れども、高雅にして用途の最も廣きは、茶褐色、赤褐色、黒色の三種なり。今其の調合比を示さば、次の如し。

茶褐色	「オーラミン」……………一〇	「サフラニン」……………一三	茶	……………五
	「サフラニン」……………二	「エル」……………二	赤褐色	……………二
	「エル」……………一	「エル」……………二	黒色	……………二
		「エル」……………二	紫	……………二
			青	……………二

又黒色に染むるには、木材の黒檀色着色法と同じく、先づ二%許の「ログード」液を以て着色したる後、更に一%許の重クロム酸加里液中に浸して乾かす時は、深黒色を呈すべし。尙ほ苛性曹達又は苛性加里の溶液を以て煮沸するも、同様の結果を得べし。

凡べて着色羊齒は、陰干となして乾かしたる後、布片を以て能く磨き、充分に艶を出すを好しとす。

羊齒板の製法

羊齒板は、専ら指物類の製作に用ふ。これに羊齒を厚紙又は

工具

獨用具
竹尺

小刀

小鋸

板に貼附するものと、羊齒のみを針金にて綴りて膠著するものとあり。前者は羊齒の一面を平に削りて厚紙又は板上に貼附するものにして、これを任意の形状に鋸斷鉋削して諸種の製作に供す。後者は、羊齒と羊齒との接觸する部分を僅削りて密著せしめ、側方より細き三つ目錐若しくは四つ目錐にて小き孔を穿ち、これに針金を通ほしたる後、接觸面に膠を塗布して接合するものなり。要所は特に釘附することあり。

工具 羊齒細工に用ふる工具は、獨用具として竹尺、小刀、小鋸、小鉋、金錘、錐等を要す。是等の工具は、簡易木工、竹細工等と兼用するを好しとす。共用具としては、竹削臺、撓木蒸煮器等を備ふべし。

竹尺 竹尺は、第一章蔓細工に用ひしものに同じ。こは長さを測り直線を畫くに用ふ。

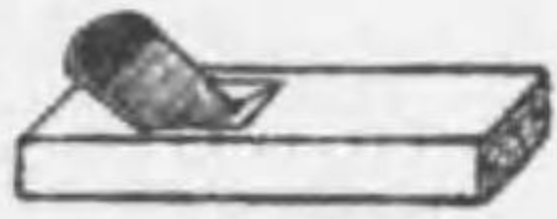
小刀 小刀は、羊齒及び羊齒板、木釘、竹釘等の材料を削るに用ふ。身幅五六分許の紙細工用切出小刀にて可なり。

小鋸 小鋸は、圖に示すが如き形状をなし、板及び羊齒板等を切斷するに用ふ。



こは竹挽鋸と同じく、身を薄くし歯を細く刻みて往復切斷の用をなすやうに作りたるものを好しとす。及渡五寸許身幅及び頭の長さ各一寸柄の長さ四寸五分、一寸に二十目許の爪を當てて左右に動かざるやうにし、鋸の切味に任せて切斷すべし。

小鉋



小鉋。小鉋は又豆鉋と稱し、小形の平鉋なり。臺は長さ五六寸、幅一寸五分乃至一寸八分、厚さ八分許にして、身は幅一寸二分乃至一寸五分、長さ二寸五分許なり。こは研ぐに極めて容易なるのみならず、取扱に頗る輕便なり。通常片手にて持ち、板、羊齒板等の木端及び木口を削るに用ふれども、又板面を削り、竹細工、粘土、石膏細工等に使用することあり。

金錘



金錘は、鉋の刃を出入しまたは釘を打つ等専ら打撃の用に供す。圖に示すが如く、胴の長さ一寸五分乃至一寸七分、一端の直径五、六分柄の長さ七寸、重さ二、三十匁許の小形目打錘を好しとす。

錐

共用具

竹削臺

錐 錐は専ら孔を穿つに用ふ。穂先一寸、柄の長さ六寸許の細き四つ目錐若くは三つ目錐を好しとす。
竹削臺 竹削臺は通常長さ七寸幅二寸三分厚さ五分許の松板に、四分角の當止を其の上下反對の端に附けたるものなり。下面の當止は机の端に掛け、上面のものは竹、木、羊齒等を支へて削るに用ふ。又削臺と同じく、上下の當止を利用して鉋削の用に供することあり。

撓木

撓木 撓木は、堅木の板に大小數個の孔を穿ちたるものなり。こは乾晒したる大羊齒を灰にて磨きたる後、炭火上にて熱し適當の孔に挿入して、屈曲せる羊齒を真直にし、又は所要の形に曲ぐるに用ふ。

蒸煮器

蒸煮器 蒸煮器は、羊齒、蔓等の蒸煮及び羊齒、麥稈等の染色に用ふ。其の構造は、長さ四尺幅一尺深さ八、九寸許に亞鉛引鐵板にて作り、これに木製の蓋を附けたるものなり。これを以て材料を煮沸せんには、器中に水又は藥品、染料等を入れ、材料を能くこれに浸漬して蓋を被ひ、下方より徐に加熱するものなり。蒸煮せんには、器の深さの中間に二個の棧を渡し若くは臺を置きて其の上に羊齒を

架し、これに接觸せざるやう適量の水を入れて徐々に熱すべし。こは左右に煉瓦を積み、其の上に載せ、風なき静なる日を選びて屋外にてするか、又は大なる角火鉢に渡して加熱すべし。

教授上の注意

- 一、羊齒細工は、尋常小學第五學年以上の教材として、農村小學校及び補習教育青年會等に於て授くるに適す。
- 二、本細工は材料硬くして加工稍困難なれども、軟化したるものは取扱ひ易きを以て、厚紙細工、蔓細工、簡易木工等と相俟つて諸種の製作を爲さしむると共に、副業思想の涵養に資すべし。
- 三、羊齒の採集法及び處理法の一般を授け、工具の使用法竝に手入法を知らしむべし。
- 四、羊齒の屈曲を直すには、豫め能く水に浸して其の曲部を火熱し、撓木に通ほして反對に曲げ、冷却したる後取り外すものとす。これに反して特に屈曲を要する時は、其の部分を熱して適當に曲げたる後、其の儘放置して

教授上の注意

冷却せしむべし。

- 五、羊齒の心を抜き取り所謂羊齒「パイプ」を作るには、生羊齒は一晝夜間許、乾羊齒は二晝夜間許清水に浸したる後、火熱して其の兩木口より氣泡の出づるに及び、根許を七八分許折りて心を引き出すべし。
- 六、羊齒の心は、褐色にして柔軟なれば、小き籠を編むに適す。故にこれを利用して籠の編方を練習せしむるも可なり。
- 七、本細工は、厚紙細工、蔓細工、竹細工、簡易木工等と互に相聯關して授くるを好しとす。
- 八、指物類を作るには、羊齒板を以て成形するか、又は厚紙若くは板にて素地を作り、其の上に羊齒を貼附接合するものとす。素地を厚紙にて作る時は、其の接合部は厚紙細工の如く目貼するか、若くは木工の如く釘附すべし。
- 九、籠類を製作せしめんには、豫め蔓細工にて其の基礎練習を爲さしめたる後、羊齒竹の順序に依らしむべし。

- 一〇、籠を編むには、通常軟化したる羊齒を用ひ、これが製作に當りては特に羊齒を折損せざるやう充分に注意せしむべし。
- 一一、羊齒細工に於ける籠類の製作法は、蔓細工と殆んど同様なれども、材料の性質上精緻なる編製をなすこと能はざれば、其の編み方は頗る單純なり。籠類の製作に使用する羊齒は總べて小羊齒の如き細きものに限られ、二年生を最も好しとす。
- 一二、籠を編むには材料の節約を旨とし、長き羊齒を求め難き時は短きものを繼ぎ足して作らしむべし。

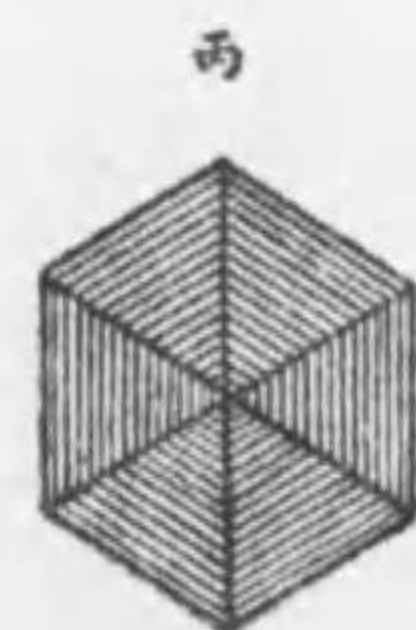
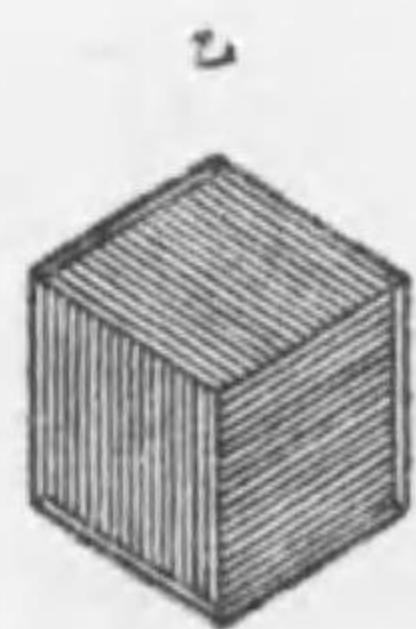
教材

土瓶敷

教材

一、土瓶敷

- 甲圖の如き土瓶敷を作るには、厚き「ボール」紙又は厚さ一分許の板の両面に羊齒を貼附して羊齒板を作り、これを正六角形に鋸斷鉋削して外形を整へ

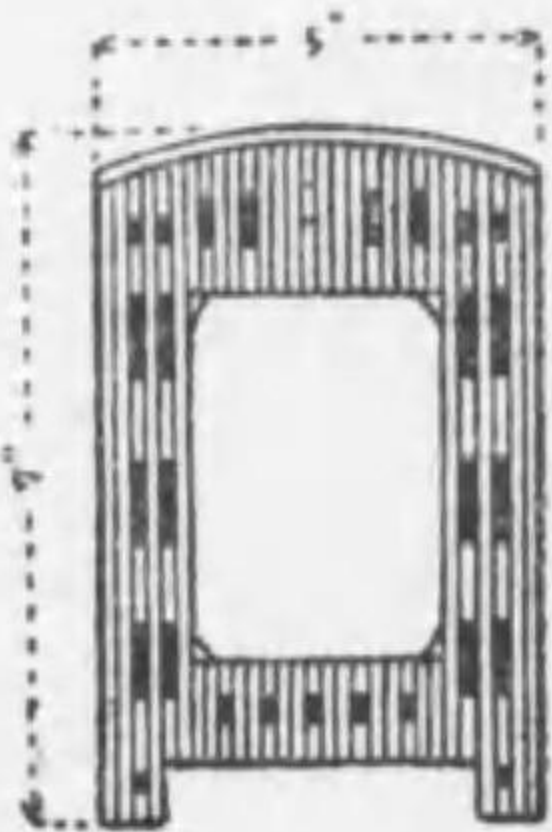
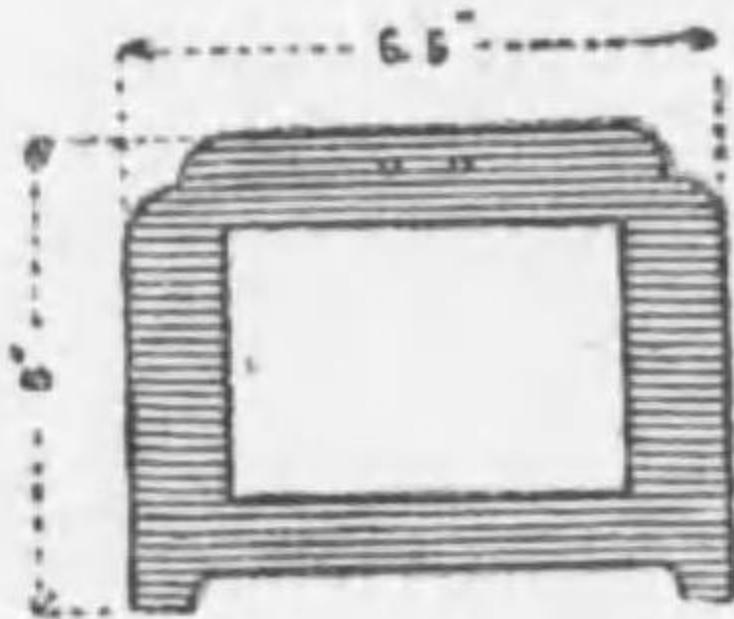


たる後、更に内部に小き正六角形の孔を穿ち、次に其の周圍及び内孔に一面を削りたる太き羊齒を膠著して、要所を釘附するものとす。乙圖及び丙圖の如きものを作らんには、羊齒板を菱形若くは正三角形に切斷して、正六角形に膠著したる後、前の如く太き羊齒の一面を削りて縁附をなすべし。

繪葉書挾

二、繪葉書挾

繪葉書挾は、十二「オンス」許の「ボール」紙を以て、厚紙細工と同様に素地を作り縁貼をなしたる後、一面を削りて平になしたる羊齒を裝飾用紙の代りに貼附するものなり。其の形狀には種々あれば、適宜の形を考案し且任意の模様を施さしむべし。



繪葉書を挟むべき額面は、長さ四寸五分、幅二寸八分許を適度とす。

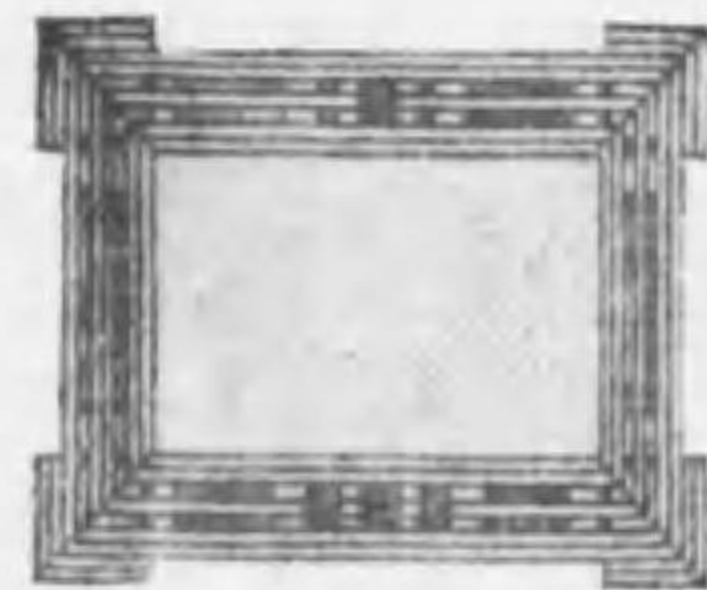
寫眞挾

三、寫眞挾

寫眞挾も繪葉書挾と同じく厚紙にて素地を作り、其の表面及び木端・木口に羊齒を貼附してこれを裝飾し、且適宜の模様を表出すべし。裏面には寫眞を挾

額縁

むやうに止を附け、更に適度の傾斜を保たしむるために支を備ふ。
こは、直に羊齒の綴板を以て作り、透模様を施すも可なり。

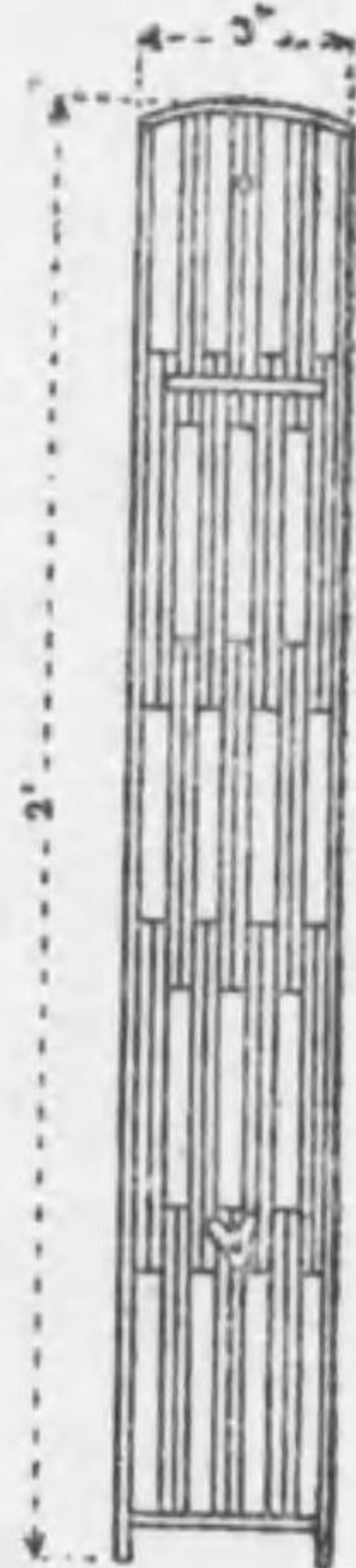


四、額縁 額縁は、杉又は樅の薄板を以て圖の如き素地を作り、其の上に羊齒を膠著するものなり。其の圖案は、適宜に考案するを好しとす。又其の大きさ及び縦横の割合の如きも用途によつて一定し難きも、縦横の關係は通常 $3:4:5$ を適度とす。

裏面には、額面より二三分許隔りたる所に、一面を削りたる羊齒を接合し、尙ほ長さ八分許の裏板留を釘附して裏板硝子を止むべし。

短冊掛

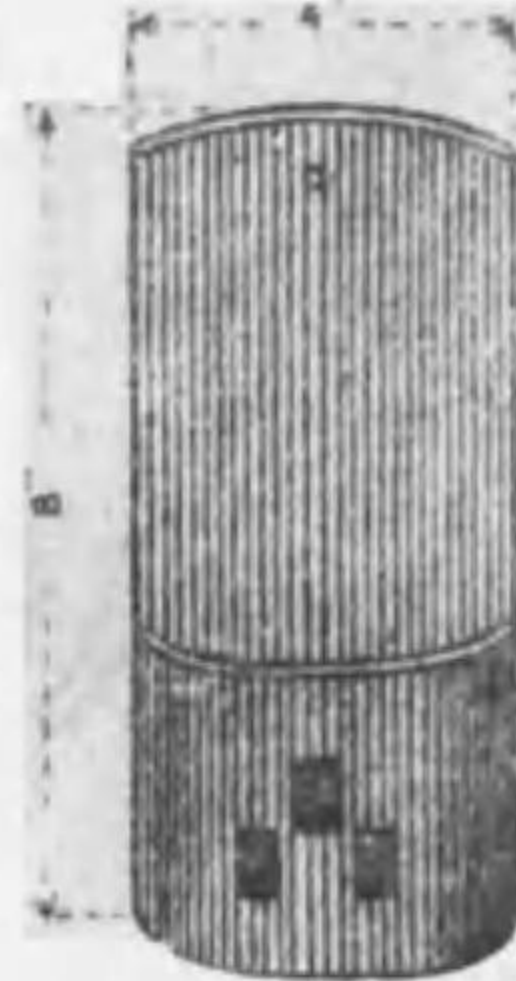
五、短冊掛



短冊掛は、厚紙を以て圖の如き素地を作り、其の上に裝飾用紙を貼り、更に羊齒を貼附したるものにして、周圍の羊齒は膠著後釘附するものとす。上部の短冊挟は、羊齒の一面を削りて短冊を挟むや

狀差

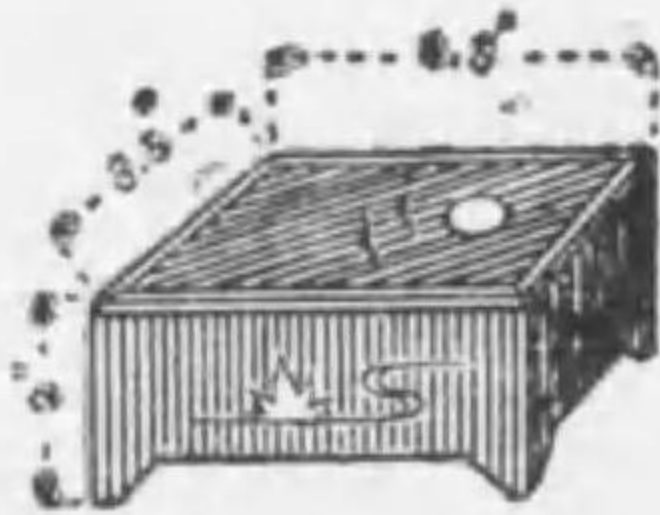
うに作りたるものにして、下部は羊齒の又を適當に切りて釘附したるものなり。厚紙の代りに薄板を用ひ、又は羊齒の綴板のみを以て作るも可なり。



六、狀差 狀差は、羊齒の綴板を以て圖に示すが如き形狀に作り、底板を固著したるものなり。底板は厚さ一二分幅一寸許の杉板を以て作り、其の形狀は平き蒲鋒狀をなせり。要所は特に鞏固ならしめ、ため膠著後更に釘附すべし。尙ほ前側には、適宜の透模様を施さしむるを好しとす。

巻煙草入

七、巻煙草入



巻煙草入は、十六、オンス乃至二十、オンス許の「ボール」紙を以て、圖に示すが如き素地を作り、其の表面に羊齒を貼りて裝飾したるものなり。

蓋は印籠蓋となし、裏面には羊齒を以て蓋顎を附け、底は上げ底として横より小釘にて打ち附くべし。蓋及び側には成るべく模様を現はすを好しとす。こは別に素地を作ることなく直

角盆

接羊齒の綴板を以て作るも可なり。



八角盆 角盆は先づ長さ八寸七分幅六寸二分厚さ一二分許の板の角を丸味づけて底板を作りたる後、其の表面に方一寸許に切りたる羊齒板を圖に示すが如く石疊に貼附すべし。次に其の周圍に長さ三尺許の羊齒を長方形に曲げて膠著し、更に其の上に四本の羊齒を重ねて都合五本の羊齒にて側を作り、尚ほ其の内部に能く適合するやう三本の羊齒を方形に曲げて底板上に載せ、互に能く接合すべし。勿論要所は、何れも小釘を以て打ち附くるものとす。底板の裏面には、漆又は「エナメル」を塗るか若くは著色すべし。

花筒



九、花筒 花筒は羊齒の綴板を以て圖に示すが如き圓筒を作り、底には二分許の厚さを有する圓き板を箝め、側面より小釘にて打ち附けたる後、長さ一尺許の太き羊齒を圓形に曲げて上下に接合し、縁及び底足となすべし。側には適宜の透模様を施すを好しとす。

煙草盆

一〇、煙草盆



煙草盆は、長徑六寸短徑四寸許の楕圓形の底板を作り、其の周圍を一周する綴羊齒を以て側を作り、要所を釘附したる後、太き羊齒を曲げて縁及び仕切を附け、最後にたくして丈夫なる大羊齒を以て圖に示すが如き提手を作り、鋌釘を以てこれを側の左右に取り附くるものとす。底板は厚さ二分許を適度とし、時宜により漆又は「エナメル」を塗布するか、若くは色著けするを好しとす。

石鹼籠

一一、石鹼籠

石鹼籠は、特に細き小羊齒を選びて放射組底を作りたる後、側を編み底足を作りて手を附くるものとす。即ち先づ長さ二尺許の縦二十二本を五本二組と六本二組とに分ち、六本の縦を上として放射状に組み、第一横及び第二横にて各、四回捲くべし。勿論二本の横にて二回捲くか、若くは四本の横にて一回捲くも可なり。次に六本づつの縦は三本づつに、五本づつの縦は三本と二本とに分ち、二本の縦には其の間に長さ一尺許の縦一本を挟みて何れの縦も皆

三本を一組となし、第三横を以て前に潜りしものを抑へ抑へしものを潜りて、能く其の組織を整理しつつ編進して直径三寸許の底を作るべし。この際一本の横にて編む時は、常に同一の所を抑潜するものなれば、これを避けんため二本の横を用ひて交互に編むものとす。短き羊齒を縦に用ひんとする時は、底のみを作りて縦を剪定し側の縦を接ぎ足すか、若くは底の部分は縦を互違となして、側を編むに當り不足の縦を補充するを好しとす。



側は、此方側の縦四組を持ちて左端の一組を右方に曲げ、一潜一抑一潜して其の端を外へ出し、更に其の次の縦一組を加へて四組となし、前と同様に編み、順次これを反復して編み上ぐべし。斯くて能く其の編み方を整理して口径四寸、深き一寸二三分許となし、底の周圍に於て二本の横もて縦を右側に縛ふこと二回にして側締をなし、底足を作るものとす。底足は、此方側の縦二組を取り左方の縦を右方

に曲げて一抑し、其の端を内部に入るべし。而して不用の縦を切り捨て最後に手を附くるものとす。

手は、長さ二尺許の羊齒四本を取りて二本づつに分ち、一寸餘隔てて側の外部より底と側締との間に通ほして底足の羊齒と同様に曲げ、次に二本づつ右側に縛ひ他端より五六寸許の所にて二本づつに分ち、他端と全く反對の側に、前の如く側の間に通ほして底足と同様に曲ぐべし。

一二、楕圓形湯籠 楕圓形湯籠は、長さ一尺七寸許の縦二十八本を三本四組と二本八組とに分ちて、三本を一組とせる縦二組を一端に於て四寸五分許互違に重ね、他の二組を三寸五分許互違にして其の上に直角に重ねべし。次に二本を一組とせる縦四組を交互違に四寸許附合せにして一組としたるものを其の上に五六十度許の角度をなすやうに重ね、更に同様にしたる四組の縦を一組として其の上に放射状に組み、第一横及び第二横にて各三回づつ捲きたる後、二本を一組とせる縦を開きて長さ一尺三寸許の縦を一本づつ添へ、總べての縦を三本一組となし、二本の第三横にて各五回許捲きて長徑五寸短徑三寸五分許の楕圓

底を作り、側を編むものとす。

側は向側の縦五組を取りて、左端の一組を右方に曲げ、外より交互に抑潜し、其の端を外に出し、更に右方に一組を加へて前と全く同様に抑潜し、これを反復して側を編み、能く其の形を整理して深さ二寸餘となし、稍外圓としたる後、二本の横にて右綯に側締をなすこと二回にして底足を作るものとす。底足は側を伏せて此方側の縦三組を取り、左端の一組を右方に曲げて一潜一抑し、其の端を中に入れ、これを反復して編製すべし。

手は長さ二尺五寸許の羊齒四本を綯ひて、前の石鹼籠の手の如くし、長徑に添ふやうに取り附くるものなり。

一三、花籠 花籠は、長さ二尺四寸許の縦三十二本を八本づつ四組に分ちて放射状に組み、第一横を以て抑潜すること四回次に第二横を以て前と反對に抑潜すること四回にして中心を編み、各の縦を四本づつに分ちて十六組となし、二本の第三横を以て順次に編み、底の直徑を六寸許となすべし。この際底は僅か内圓形に彎曲せしむるを好しとす。

花籠

側は、向側の縦三組を取りて左端の縦を右方に曲げ、其の右隣の縦の外部より潜らせ右端の縦を抑へて外に出し、漸次同一の方法を反復して右廻に側を編み、能く其の形を整理して口徑八寸深さ一寸一二分許となしたる後、裏返して縦を二本の横にて綯ひ側締をなし底足を作るを順序とす。底足は此方側の縦二組を取りて左方の縦を右方に曲げ、右隣の縦を抑へて其の端を内側に出すものとす、これを反復して左廻に編み、能く其の形を整へて不用の縦を缺切し、手を附くるものなり。

手は長さ三尺許の羊齒六本を撚り、其の兩端を三本づつに分ちて側の外より石鹼籠の手の如く底と底足との間に挿入し、底足と同様に曲げて取附くるものなり。(三、十六頁の花籠参照)

一四、楕圓形花籠 楕圓形花籠は、其の製法略前の花籠と同様なり。先づ二尺五寸許の縦三十二本を八本づつ四組に分ちて放射状に組み、短徑五寸長徑七寸許の楕圓底を作り、次に側を編むものとす。この際若し縦を經濟的に用ひんとする時は、短き羊齒にて底を作りたる後周圍を缺切し一尺許の縦を一寸許底に

楕圓形花籠

刺し込みて織ぎ足すを好しとす。
 側は總べての縦を十六組に分ちて、花籠の如く向側の縦三組を取りて左端の一組を中央の縦の向ふより右端の縦の手前に抑へて外へ出し、更に右隣の縦一組を加へて三組となし前と同じく潜りては抑へ、これを繰り返して全周を編み能く形を整理したる後、裏返して側締をなすこと六回に及び、前の花籠と同様に此方側の縦二組を取りて左方の一組を右方に曲げ一抑して其の端を内側に入れ、更に其の次の一組を加へて同様に編み、これを反復して遂に全部の底足を作るものなり。

手は長さ三尺許の羊齒十二本を揃へ、一端より七寸許隔りたる所より四本づつ三組に分ち、左端の一組を右上方に曲げて中央のものの上に載せ、次に右端の一組を左上方に曲げて先に右上方に曲げたる羊齒の上に載せ、これを反復して一尺六七寸許の長さに編み、兩端を六本づつに分ちて長徑の側の外部より内部に通ほし、底と側締との中間に刺して底足の内部より外に出し、更に中に入れて底足と同様に編むものとす。若し所要の長さの羊齒を得難き時は、便宜織ぎ足

「バケツ」形手籠

して用ふべし。

一五「バケツ」形手籠 「バケツ」形手籠は、長さ四寸許の縦三十本を八本、三組と六本一組とに分ちて放射状に組み、第一横及び第二横にて各三回許捲きたる後、各の縦を二組に分ちて十六組となし、更に第三横二本を以て直径四寸許に編みて底を作り不用の縦を剪定すべし。次に長さ一尺三寸許の縦四十八本を三本一組として織ぎ足し、底の所より上方に曲げ二本の第四横を以て一寸許編み第一側締をなしたる後、更に二寸許隔てて五分許二本の第五横にて編み、第二側締をなすべし。側の縦は、一組を四本とするも可なり。斯くて向側の縦三組を取り、



第二章 羊齒細工

左方の縦を右方に曲げて中央の縦を抑へ、第二側締の外より右方の縦を抑へて外に出すべし。これを反復して側を右廻に編み、能く形を整へて深さ三寸五分乃至四寸口徑六寸内外となすべし。次に側を裏返して底の所に於て第三側締をなし、底足を作るものとす。底足は此方側の縦二組を

取り、左方の一組を以て右方の縦を抑へ、其の端を内部に入ることゝを反復して編むべし。

手は長さ二尺七八寸許の羊齒六本を綯ひ、其の兩端を三本づつに分ちて側の外より第二側締の中を通ほして底に出し、底足と同様に編むものなり。

一六、茶碗籠 茶碗籠は、長さ二尺餘の羊齒三十二本を四本づつ八組に分ちて二組を互違に重ねること三寸五分許にして放射状に組み、五本の横を以て右廻りに各の縦を抑潜して一回捲きたる後、裏に於て二つの縦を潜り、前に抑へたるものを潜り潜りたるものを抑へて一周し、先に二つ潜りし縦の一つを抑へ、他の下に其の端を挿入して一見一本の横にて各五回捲きたるが如く



し、次に二本の横を以て交互に捲くこと四五回にして縦を二本づつに分ち、長さ一尺七八寸許の縦一本づつを繼ぎ足して各の縦を三本一組として十六組となし、更に二本の横を以て編むこと五六回にして底の直径を六寸許となし、底編を終るものとす。斯くて此方側の縦五組を取り、左端若くは右端の縦を其の右

又は左の縦の外より抑へ、一つ置に抑潜して其の端を外に出し、更に縦一組を加へて抑潜すること前の如くし、これを繰返して側を編みたる後、其の形を整理して内圓形となし、口径一尺許とすべし。次に籠を裏返して二本の羊齒にて側締をなすこと二三回にして底足を作るものとす。底足は、向側の縦三組を取り、其の左方又は右方の縦を以て他の二組の縦を拯ひて編み、其の端を内側に入るるものなり。其の餘端長き時は、豫め所要の長さに切りて編むを好しとす。

一七、果物籠 果物籠は、長さ六七寸許の縦三十二本を八本づつ四組に分ちて放射状に組み、四本の横を以て茶碗籠と同様に中心を編み、更に三四回二本の横にて交互に編み、各の縦を四本づつ二組に分ちて數回編み、直径六寸許の底を作り餘れる縦を剪定したる後、十六組の縦の兩脇に長さ一尺六七寸許の縦二本づつを刺して總計三十二組となすべし。

次に向側の縦十組を取りて、其の最も左の一組を右方に曲げ又は右の一組を左方に曲げて、其の右方又は左方の縦を順次三潜二抑二潜二抑して外に出し、更に其の次の縦一組を加へて同様に編み、これを反復して側を作るものとす。斯

くて能く其の形を整理して二寸許の深さとなし、底の所に於て二組の縦を一組となし側を伏せて側締をなし、底足を編むものとす。底足は、此方側の縦二組を取り其の左方又は右方の一組を右方又は左方に曲げて一抑し、其の先端を中に入るべし。

手は楕圓形花籠の如く、長さ三尺許の羊齒十二本を三分して編むか又は九本を三分して編み、其の兩端を六本づつとするか又は五本と四本とに分ちて側の外より内に通はし、底と底足との間を潜りて底足と同様に挟むものとす。



蓋は、長さ二尺三四寸許の縦三十二本を八本づつ四組に分ちて放射状に組み、直徑四寸許に編みたる後、縦を十六組に分ちて二本づつとなし、三つの縦を取りて左端のものを中央の縦の向側より潜りて更に右端のものを抑へ、其の次の縦の所に排べて挿入すべし。順次この方法を反復して側を編み、其の形を整理して外圓花形の蓋を作り實に被ふものとす。又蓋は底の如

く長さ四寸許の縦三十二本を八本づつ四組となし、これを放射状に組み、直徑四寸許の中心を編み、餘れる縦を剪定したる後、二本を一組とせる長さ一尺許の縦を刺して前述の如く花形に編むも可なり。

一八、炭籠 炭籠を作るには、長さ二尺許の縦三十二本を八本づつ四組に分ちて放射状に組み、直徑三寸餘の心を編みたる後、各の縦をそれぞれ二分して十六組の縦となし、更に二本の横を以て編み底の直徑を七寸許となすべし。



側を作るには先づ縦を上方に曲げ、稍、口を廣くして編み、それより漸次狭くして口徑六七寸許となし、深さ二寸許の時長さ五寸餘の縦を二本づつ添加して、四本の縦を一組となし、次に縁を編むを順序とす。縁は、向側の縦二組を取りて左方の縦を右方に曲げ、其の右隣の縦を一組づつ右廻りに潜りて其の端を中に入るものとす。外觀を美しくせんには、三組以上の縦を取りて編むを好しとす。

手は、長さ一尺六寸許の稍、太き羊齒四本を取りて絡み

合はせ、其の兩端を二つに分ちて縁の重複せる部分に挿入し横の間に挟むか、又は針金にて側に括るものとす。最後に側の内部に反古紙を貼り、炭粉の漏出を防ぐべし。

第三章 杞柳細工

意義 杞柳細工は、皮を剥ぎたる杞柳を以て、籠、バスケット、行李等の如き實用品を作る細工なり。

目的 本細工に於ては、其の製作法を知らしむるとともに、杞柳の栽培法及び處理法の一般を授け、兼ねて副業思想を養ふを以て要旨とす。

材料 この細工の主要材料には杞柳を用ひ、補助材料には麻絲、竹蔓、ツク、皮、金具等を用ふることもあり。

杞柳 杞柳は又行李柳とも稱し、楊柳科に屬する落葉の灌木なり。水濕を好み水邊に能く自生すれども、今は多く栽培せらる。葉は披針形にして裏白く、多くは對生にして縁邊に微鋸齒を有す。花は小さく、雌雄株を異にす。幹は輕軟に

主要材料
杞柳

材料

目的

意義

細葉

中葉

大葉

補助材料
麻絲

して材色白く、其の枝條を以て籠、バスケット、行李鞆等を作り、皮は紙料に供す。

杞柳には、細葉、中葉、大葉の三種あり。

細葉 細葉は又葉細とも稱し、葉小きを以て小葉とも云ふ。莖皮赤味を帯べば赤莖又は赤木とも云ふ。幹根共に細長くして、耐水力乏しく收穫多からざれども、品質極めて優良なれば細工に最も賞用せらる。

中葉 中葉は莖皮青味を帯べば、一つに青莖又は青木と云ふ。幹は細葉に比すれば稍大にして性强韌なり。其の品質は、細葉に次ぐ。極めて肥沃の地若くは水害多き濕地に適し、根は強大なり。皮剥ぎ易く白芽の生産率頗る多し。

大葉 大葉は、葉大なるを以てこの名あり。一つに葉廣又は丸葉と稱し、莖皮白味を帯べば白莖又は白木とも云ふ。幹は太く一見其の發育良しきが如く、なれども、中身頗る太く質軟弱にして品質劣等なる上收穫少けれども、耐水力強きを以て低濕地に栽培する時は、却つて其の收穫他種を凌ぐことあり。

麻絲 麻絲は、杞柳を編み布皮を縫ひ附くる等に用ふ。纖維強くして細太不同なき麻の撚絲を好しとす。番によりて其の太さには種々あり、普通に用ふる

竹

は四番・四番半・五番・五番半・六番・七番の六種なり、四番最も太く七番最も細し。用途により適當のものを選ぶべし。

竹 竹は主として縁及び手に用ひ、烏竹ウチダチ又は苦竹を好しとす。縁とする苦竹は、通常表皮を削りて其の上に削墨の液を塗り、黒く染めて乾かしたる後、更に黒漆を施すものとす。縁竹は、薄く削りて殆んど皮のみとなし、火力を用ひざるも自由に屈曲するやうにすべし。

蔓

蔓 蔓は特に屈曲を要する所若くは強力を要する所に用ふ。漂白したる木通蔓又は防已は、其の儘若くは剝蔓として杞柳に混用し、籐は縁竹を捲き、又は手を作るに用ふ。縁竹を捲くには皮籐を用ひ、手を作るには丸籐を用ふ。(二頁蔓参照)

「ツツク」

「ツツク」は太き亞麻絲・黄麻絲又は木綿絲を以て織製したる厚地粗織の平織物なり。主として穀類の袋・包装用・洋服・靴・雜囊・ゲートル等の製作に用ふ。木細工に於ては、専ら製品の角及び麻繩を掛くる所に當て、損傷を防ぐに用ひらる。皮 皮は製品の角に當て、又は麻繩を掛くる所に縫ひ附け、若くは締むる等に

皮

金具

用ふ。通常中牛皮を使用すれども又馬皮を用ふることあり。
金具 金具は、主として「バスケット」附屬品として使用する。「ニッケル」鍍金の丸環・麻環・錠前・鉄等を用ふ。

杞柳の栽培法
土質

杞柳の栽培法 杞柳は、他の作物に比して浸水及び風害に堪ふるの性あるを以て、土地の高低乾濕を選ばざれども、これが栽植に適する土質は、排水の佳良なる沖積土を尙び、小礫を含める粘質壤土にこれに次ぐ。斯くの如き土質に於ては、發育早く枝條細長くして性強靱なるのみならず色澤鮮美にして殆んど純白なるものを得べし。これに次ぐを礫砂土及び砂質土とす、其の發育強力品質共に前者に譲る。土地利用のため河水汎濫して水害多く、他作物の收穫少き低窪地及び排水の不良なる低濕地並に瘦薄地に於ても能く生育し相當の收穫あれども、是等の土地に於ては概して發育遲緩なれば、枝條太短く光澤悪しくして品質良好ならず、株の存續年限も亦短し。

整地

杞柳を挿植せんとする土地は、其の田たると畑たるとを論ぜず總べて深く耕起するを要す。畑地は通常前作物を採取したる秋期に於て荒起をなし、深さ一

挿植

尺許に耕して土塊を碎き、寒氣に曝して膨軟ならしめたる後、多くは翌春の三月に耕鋤し地面を平坦にして同時に平畦となす。排水の良否によりて二間乃至三間毎に相當の深さを有する溝渠を設け排水に便す。水田にありては稻の收穫後能く耕して排水を行ひ、翌年の二・三月頃に於て鋤を以て土塊を碎き地面を均らして、一尺七寸乃至二尺許の幅を有する畦を作り、六條毎に深さ幅共に二尺許の排水溝を穿つものとす。其の距離は、地質の乾濕によりて適宜伸縮するものなり。而して二年目よりは耕鋤をなすことなく、單に中耕を行ふに止まる。

杞柳の蕃殖は、専ら挿木法に依る。其の種苗は、挿植後三年乃至四・五年を経過したる母株の強壯真直にして發育の良好なる枝條より選擇す。其の長さは五・六尺にして直徑三分弱周圍八分許のものを好しとす。こは冬刈をなすに當り、適當の良枝を選びて殘し置き、挿植期に至りて刈り取り、下部三寸上部五・六寸を切り捨て、一枝より長さ七・八寸乃至一尺許のもの三本位を取りて種苗となす。挿植は十一月頃より翌年の三・四月頃迄に行ふ。通常陽燥なる畑地は冬期に於てし、濕潤なる低地は春期に行ふ。其の方法は先づ種苗の根許を二方又は三方

中耕

より削りて先を尖らし、五・六寸許を地中に挿入して地上には三・四寸許出すものとす。株の距離は、八寸乃至一尺三寸許を適度とし、何れも繩を張りて正條に挿植すべし。種苗は、豫め挿床に假植したる後移植する時は、其の發育極めて佳良なり。而して挿植密に過ぐれば、枝條細長く品質優良なれども、收量少く樹命短し。これに反して粗植に過ぐれば、樹命長く收獲多けれども、枝條粗大にして挿植後四・五年を経過するにあらざれば、精品の製作に適せず。通常一反歩に約七八千本の種苗を要し、其の用量は二十八貫乃至三十二貫内外なれども、瘠地には太きものを肥沃の地には細きものを植うるを常とす。杞柳の樹命は、地質の良否と管理の適否とによりて多少の差あれども、通常九年乃至十五年目に古株を發掘し挿替を行ふものとす。

挿植初年の中耕は、春期より數回行ふも、この間は新根漸く生じて甚だ微弱なれば、これを損傷せざるやう充分の注意を拂ふべし。二年目よりは春期雜草の繁茂せざる中に二・三回、冬期に一回淺く耕耘して翌年草の生ぜざるやうにするを好しとす。總べて中耕は、肥料を施す以前に根許の土を兩側に掘り上げ、施肥

除草

後能くこれを軟くし、根許の兩側に掻き寄せて地面を均らすものとす。八、九月頃更に中耕を行ふことあり。

挿植の年は兎角雜草繁茂するものなれば、努めてこれを除かざるべからず。除草は成るべく芽の短き時、草の生ずるを見て年に一、二回乃至五、六回行ふを好しとすれども、多くの勞力を要すれば普通は一、二回に止むるを常とせり。

施肥

肥料は、主として人糞尿、大豆粕、油粕、鯨粕、堆肥等を用ふ。其の量は地味の厚薄によりて一定せざれども、多き時は枝條脆弱となり品質劣等となれば、其の分量は成るべく少きを好しとす。植附の初年は肥料を施すに及ばすと雖も、成長の速ならんことを欲せば、五月上旬頃に一回人糞尿を株間に施し、更に六月上旬九月中旬頃に施肥すべし。糞尿の濃度は三倍位に稀釋し、其の量は地質によつて多少の差あれども、反當三百貫内外を普通とす。第二年よりは、一反歩につき大豆粕は十五、六貫、油粕は十貫、鯨粕は五、六貫施せば可なり。年々浸水して沃土を沈澱する所は、全く肥料を要せざるなり。

摘芽

杞柳の新芽發生して、其の長さ二、三尺に達する頃より腋芽を生ず。元來杞柳

蟲病害

は枝條の眞直なるを尙べば、特に其の分枝を避けざるべからず、故に腋芽の餘り成長せざる中に絶えず圃地を巡視して腋芽を掻き取るを要す、これを芽搔と云ふ。芽搔は少くとも腋芽の三、四寸に達するまでの間に行ふべし、若しこれが管理を怠る時は、品質を劣惡ならしむるを免れず。杞柳の成長は二期に分れ、夏期に於て溫度華氏の八十度以上に昇る時は、一時其の發育を中止し、盛夏の候を越えて稍、冷氣に向ひ八十度以下の溫度に降る時は、再び成長を始むるものなれば、芽搔も第一回は五月下旬に第二回は六月下旬第三回は第二期の成長時に行はざるべからず。但土用後は枝條に疵を生じ、著しく其の品質を害するを以て行はざること多し。又基部にある腋芽は幹の成長を害すれども、先端にあるものは別に差支なきを以て、採收後に切り捨つるも可なり。通常挿植後四、五年目には、本作業の必要少きに至る。芽搔の方法は、發芽の一、二寸となりたる頃、左手の拇指と食指とにて芽の許を抑へ、右手にて芽を横に押し、掻き取るものなり。杞柳には、春夏の候コガネムシ、サルハムシ等の害蟲發生して新葉を害し、又ハマキムシが心を食ひて發育を害することあれば、摘芽の際これが驅除を忘るべ

杞柳の採集法

からず。この外赤澁病黒枯病等に侵さるゝことあれども、未だ完全なる驅除撲滅法なし。

杞柳の採集法 肥培管理良しきを得たる杞柳は、植附初年に於て其の枝條五六尺の長さに達すれども、普通は挿植後二年目の冬に於て第一回の刈り取りをなし、第三年より夏冬の二回収穫することを得るものとす。而して刈取の初年は多少の收穫あれども未だ收支相償ふに至らず、第二年より利益を得、第三年より其の收穫頓に増加し、第五六年に至りて全盛を極め、第七年より遞減して第九年以後に至り漸く衰へ其の收入僅少となれば、掘取りて挿替をなすものなり。

これが採集には、冬刈及び夏刈をなすものと、冬刈唯一回に止むるものとあり。**冬刈**は落葉後即ち十一月頃より翌年の二月頃迄の間に行ひ、鋭利なる木鎌にて株際五六分乃至二寸許を残して總刈し、凡そ四貫目許の束とす。切株は株摘の際根許の屈曲せるもの及び枝條の順直ならざるものを悉く株際より刈取るものなり、この際特に太きものは母株より一寸許残し、細きものは母株の許より刈り取るものとす。**夏刈**は繁茂せる株より無疵の枝條二本乃至五本許を選びて

冬刈

夏刈

杞柳の處理法
假植
除皮

刈り取るものにして、新條の長さ四尺餘に及びたる頃、即ち夏の土用後十日頃より凡そ三十日許の間に於て刈り取るものなり。こは杞柳の能く繁茂したる時又は夏期白芽の價額の騰貴したる時等に行ふものにして、挿込後三年乃至八年を経たるものに行ふを常とす。凡べて夏刈は、木質粗剛にして製作後其の色澤變じ易きと樹勢の衰弱甚しきとにより、主として冬刈のみを行ひ、夏期は單に成長の優れたる枝條のみを刈り取るを好しとす。夏刈は、晴天の夕方基部より四寸許残して刈り取るか、若くは午前四時頃より十時頃迄の間に刈り取りて三四貫目許の束となし、剝皮場に送りて直に除皮するものなり。

杞柳の處理法 **冬刈**せし春芽は、濕潤なる水田又は濕氣ある空地に密挿して深さ五六寸許に假植し、春期に至り新芽の長さ二三分乃至一寸許となりたる時皮を剝ぐべし。**除皮**は、樹液の流通を初めたる四月より五月上旬頃迄の間に於て、特に晴天の日を選びて行ふべし。夏芽は、刈取後直に水に浸し、一夜間許經過して翌朝剝皮するか、若くは正午迄に除皮すべし。總べて剝皮乾燥は、晴天の日に行ふものとす、若し雨天の日になす時は光澤失せ品質を損すること大なり。

皮を剥ぐには、先づ直径二分五厘乃至三分許の女竹を二尺許の長さに切りて、其の中央二寸許を薄く削り、これを火にて燻べ、缺状に曲げて、挾竹を作りたる後、これを右手に持ち、皮柳を左手に持ち、初めは幹の中央部を挾竹にて挟み、根許に向つて扱き、次に梢に向つて皮を剥ぐものなり。挾竹の代りに、便宜鐵製「ピンセット」形の「コバシ」(コイバシとも云ふ)と稱するものを杭に打ち附け、枝條を其の間に挟みて除皮するも可なり。然れども、こは多少白芽を損ずるの虞あり。

右の如くして除皮したる杞柳は、成るべく迅速に清水に浸し、水中に於て充分強く揉み、樹液及び汚物を能く洗除したる後、日當好き所に設けたる竹製の乾燥棚に薄く擴げて二三日間日光に乾晒すべし、其の程度は能く折れ得るを適度とす。夜間及び降雨の際は、屋内に取り入れ、濕氣に觸れざるやうにすべし。地面及び草生に並列する時は、其の品質を害すること夥ければ、絶対にこれを避くべし。斯くて充分に乾燥せる白芽は、桶の如きものの中に入れ、其の長短を區別したる後、大小色澤によりて上中下の三等に選別し、これを乾燥せる室内に入れて貯へ、必要に應じて取り出し、使用に供するものなり。若し濕氣を帶ぶ時は、忽ち

乾晒

選別

青黴を生じ又は赤變して光澤を失ひ、品質を損ずること少からざれば、乾燥の不充分なるものは、決して貯藏すべからず、又濕潤の虞ある時は、速に日光に乾かすべし。

以上の如くして剥皮精製したる杞柳を**白芽**又は**白柳**と稱し、然らざるものを**皮柳**又は**粗木**と云ふ。

漂白

乾晒せる白芽は、其の色白くして特にこれを漂白するの必要なければ、純白を要する時は、亞硫酸瓦斯を以て燻蒸すべし。これに白芽を漂白するものと、製品を漂白するものとの別あり。行李の如きものは、編製後漂白する時は、編糸を弱くするの憂あれば、これが漂白は成るべく白芽の時に、行ふを好しとすれども、籠類「バスケット」の如きものにありては、寧ろ成形後に於て漂白するを便とす。少量の場合には、通常晒箱を用ふれども、多量の際には、一間四方許の木造小屋の内壁に泥を塗り、瓦斯の漏出と火氣の危険とを防ぎ、其の中に清水に潤はしたる杞柳又は製品を收め、これに亞硫酸瓦斯を充たして燻蒸漂白するものとす。漂白後直に清水にて洗ふ時は、變色すること少く長く其の白色を保つことを得べ

剝柳と其の製法

剝柳と其の製法 剝柳は又引柳と稱し、白芽を薄く剥ぎて幅を一定したるものにして、杞柳を節約し細工を容易にするためには極めて大切なるものなり。これが製法は、乾きたる白芽を其の太さと用途とに應じて三本乃至六本に割りたる後、肉を去り面を取りて幅を一定するものにして、白芽を割るには柳割を用ひ、肉を去るには柳引又は柳引機械を使用し、幅を定むるには幅極（はくき）に依る。其の幅及び厚さは用途によりて一定せざれども、幅は通常三厘より三分に至る數種あり、又厚さには厚引と薄引との別あり。

工具

工具 杞柳細工に用ふる主要工具は、獨用具としては竹尺、小刀、竹削臺等を要し、共用具としては柳割、柳引、幅極、水槽、霧吹、編型、手錐、盤板、差板、踏板、弓、行李、庖刀、槌、鋏、針、晒箱等を用ふ。

獨用具
竹尺、小刀、竹削臺
共用具
柳割

竹尺 小刀 竹削臺 竹尺は、材料及び製品の長さを測り、小刀は竹削臺と相俟つて杞柳及び蔓等を切斷し又は削るに用ふ。共に前章に記せしものと同じ。柳割 柳割は、白芽を割るに用ふ。普通に使用するものは圖に示すが如く、長

さ一寸五分直径七分許の鋼鐵に三個乃至五個の刃を深く刻み、且其の刃先の交點には長さ五六厘許の突尖を具へ、これに接近する切刃は特に鋭くして適度の焼入を施したるものなり。溝は直線的にして稍長きを好しとす。こは質の極めて堅緻なる木にて作るも可なり。



これを以て杞柳を割るには、先づ乾きたる白芽の梢を左手に持ち、柳割を右手に持ちて其の突尖を杞柳の髓に挿入し、刃先を梢の木口に當てて徐に根許に向つて割裂するものとす。この際細太不同を生ぜざるやう特に注意すべし。木製の柳割を用ふる時及び容易に裂けざる白芽を割る時は、豫め小刀にて少し割り置くを好しとす。

柳引 柳引は割柳の肉を去るに用ふるものにして、便宜蔓裂を使用すべし、(三頁蔓裂参照) 特に新調せんとする時は、成るべく頑丈に作り刃に接近する臺木には座金を附け磨滅を防ぐべし。其の用法は剝蔓を作ると全く同様にして、先づ臺木を動かざるやうに固定したる後、豫め水に潤はしたる割柳の一端を右手にて持ち、皮部を下として切刃に載せ、左手の拇指に布を捲きて其の上を抑へ、柳

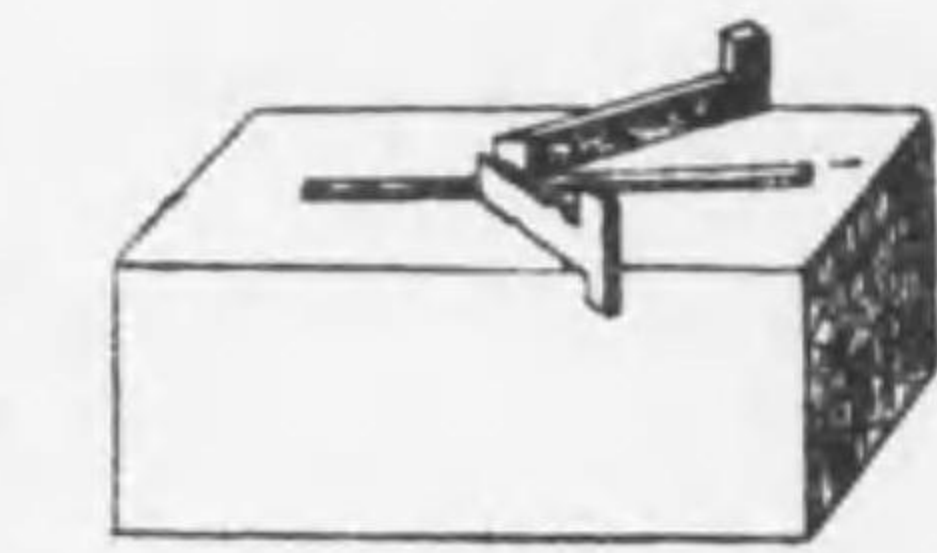
柳引

を手前に引きて剥ぎ二つとなりたるものを右手に持ちて手前に引き、次第に剥離すべし。經費の許す時は、柳引機械を用ふるを便利とす。柳引機械は一つに藤引機械とも云ふ。普通に使用せらるるものは、藤枝鐵工場の製造に係る安田式柳引機械なり。こは足踏にて回轉し、上部に裝置せる「ロール」と齒車との間へ乾きたる割柳を皮部を下にして挿入する時は、割柳は齒車と「ロール」によりて向ふに送らるると同時に此方に向へる「ロール」上の刃物によつて薄く削られ、肉部は右側に皮部は向側に送出せらる。其の厚さは、螺旋によつて「ロール」と刃物との距離を適度に調節して定むるものなり。

幅極 幅極は又分引分揃面取等と稱し、剥柳の幅を一定するに用ふ。其の構造は圖に示すが如く、二個の刀身を櫛又は赤木の如き堅木の臺上に拵入したるものなり。身は右刃と左刃とに作り、長さ三寸幅六七分厚さ七八厘許を適度とし、刃先に近づくに従ひ次第に薄くすべし。刃先と反對の端には高さ三四分許の段を附け身を抜くに便せり。身は共に刃裏を外にして仕込み互ひに六十度内外の角度をなす。臺の大きさは、萬力に挟みて固定するとき、長さ六・七寸幅三

幅極

寸厚さ二寸許にて可なれども、然らざるときは成るべく大きく且つ重くして容易に動かざるやうにすべし。溝は深さ二・三分に穿ちて身に能く適合するやう内部に至るに従ひ稍狭くすべし。



これが使用法は先づ刃先の間を適當の距離となし、引柳の梢を右手に持ちて其の間に入れ、左手を以て左方を抑へつつ右方に引き、更に持ち替へて他端を前と同様に削るものなり。

水槽 水槽は水を入れ、杞柳及び蔓を浸して軟くするに用ふ。適當の大きさを有する水桶を好しとすれども、便宜「バケツ」を用ふるも可なり。

霧吹 霧吹は、製作中杞柳の乾燥硬化するを防ぐため水分を附與するに用ふ。成るべく亞鉛鐵飯又は葉鐵にて作れるものを好しとすれども、間に合せに茶呑茶碗、硝子罎等に水を入れ口にて吹かしむるも可なり。

編型 編型は木又は亞鉛鐵飯を以て、製作に都合良き形狀に作成すべし。廣口のものを作るに用ふるものは、大低作り附けとすれども、口の狭きもの及び側

水槽

霧吹

編型

の外に張り出したるものを作るには、編製後取り外しの出来るやう木にて作るを常とす。

手錐

手錐は又突通ツキトカシと稱し、杞柳を刺込み又は剝柳蔓、銀針等を通ほすに要する孔を穿ち、若くは編み方を整ふるに用ふ。通常圖に示すが如き長さ四・五寸許の鋼鐵製木柄附のものを使用す。



盤板 盤板は又編臺と稱し、長さ四尺内外幅一尺五六寸厚さ一・二寸許の板に十度乃至十五度許の傾斜を保たしめんため木端より一寸許入りたる所に脚を附けたるものなり。こは専ら其の上にて行李を編むに用ふ。

盤板

差板 差板は長さ三尺八寸幅二寸厚さ六分許の板にして、行李の編み初めに弓竹の臺となし、又は編む時の押へとなす。

差板

蹈板 蹈板は長さ三尺八寸幅八・九寸厚さ六分許の板にして、差し終りたる行李の上に置き、其の上に乗りにて編むに用ふ。

蹈板

弓 弓は苦竹にて作る、これに弓竹と裏弓との二種あり。弓竹は圖に示すが如き形状をなし、行李の編み初めに用ふ。其の長さは、行李の大きさによつて一定

弓

せざれども、幅は一寸内外厚さ二分許にして、兩端には錐狀の柄を附け麻絲を掛くるやうにせり。



裏弓は、弓竹と略同様の長さ及び幅、厚さを有し、其の兩端には別に柄を設けず。こは弓竹と相俟つて差し終りたる杞柳の移動せざるやう、白芽の間に挟むに用ふ。

行李庖刀

行李庖刀

行李庖刀は一名切回キリマヘとも稱し、行李を編みたる後、餘分の杞柳を切るに用ふ。其の形状は圖に示すが如き不等邊三角形の身に木の柄を附けたるものにして、刃先は一直線をなし、刃渡は六寸許にして研及を左方に附けたるものなり。



槌 槌には、木槌と金槌とを必要とす。木槌は編み上げたる製品の表面を打ち均らすに用ひ、稍大形のもを好しとすれども、便宜木工用木槌を使用するも可なり。金槌は、釘を打ち又は抜く等に用ふ。全部鐵製にして圖に示すが如く、柄の一端及び柄の末端に釘を抜くやうに溝を附けたるもの輕便なり。



第三章 杞柳細工



鉄 鉄は、杞柳及び蔓麻絲草片、ツク等の材料を切断するに用ふ。こは圖に示すが如き形狀を呈し、特に彈機を附け、及先の極めて銳利なるものを好しとす。成るべく普通鉄と圓切鉄との兩方を備へ、銀金細工と兼用すべし。長さは穂先一寸八分全長六・七寸許のものを適度とす。普通鉄の代りに剪定

鉄を使用するも可なり。

針 針は、目縫をなし又は角に皮、ツク等を縫ひ附くるに用ふ。長さ三寸許の大針を好しとす。

晒箱 晒箱は、本細工に於ては杞柳及び杞柳製品を燻蒸漂白するに用ふ。(二頁晒箱参照)

教授上の注意

- 一、杞柳細工は、尋常小學第五學年以上の教材として課すべし。
- 二、本細工に於ては、其の加工法を知らしむると共に、材料に關する概念を授け、且副業思想の涵養に努むべし。

教授上の注意

- 三、杞柳は、長短細太に依つて其の用途を定め、これが節約利用に意を用ふべし。
- 四、工具の使用法を授け、其の亂用を避けしむべし。
- 五、杞柳は、豫め清水に浸して柔軟となしたる後、製作に供すべし。
- 六、剝柳を長く水中に浸す時は、其の色澤を損するものなれば、成るべく速に取り出すべし。
- 七、本細工は、其の製法稍、困難なれば、實地の指導を怠るべからず。
- 八、製作中は、常に霧吹又は濡菰を以て杞柳に適度の水分を保たしめ、折損割裂を防ぎ加工に便すべし。
- 九、作業中は、特に其の姿勢を正しくせしむべし。
- 一〇、本細工は、蔓細工との連絡を保ち、農業との關係を親密にすべし。

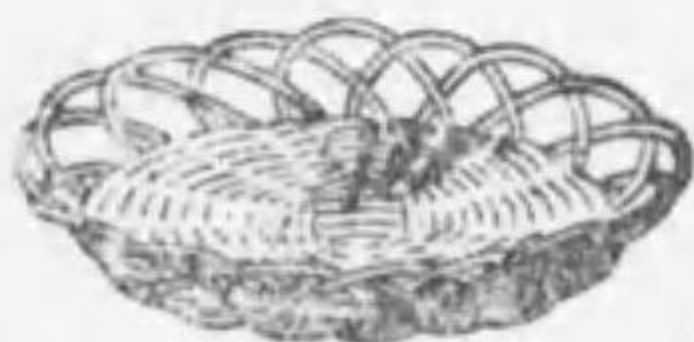
教材

圓形菓子器

教材

一、圓形菓子器 圓形菓子器は、長さ五寸直徑一分五厘許の縦七本を四本と三本とに分ちて、三本の縦を中央にて一寸五分許小刀にて割り、其の中に四本の縦

を通ほして直角に組み、幅一分許の剝柳を以て交互に三本の縦を抑へ四本の縦を潜りて左廻に一回捲き、次に前と全く反對に先に潜りし四本の縦を抑へ三本の縦を潜りて右廻に一回捲き中心を括りたる後、更に二寸五分許の縦一本を添へて總べての縦を十五本となし、これを一本づつに分ちて放射状となし、幅一分強の剝柳一本を以て右廻に抑潜して直径五寸許の圓底を作るべし。この際横に用ふる剝柳は何れも表を上に出づるやうに捲くものとす。斯くて長さ一尺直径一分許の細き縦三十本を二本づつ縦の兩側横の間に一寸二三分許刺込みたる後、向側の縦三組を取りて其の左端の縦を右方に曲げ、一潜一抑して端を外に出し、次に右隣の縦一組を加へて前と同様に編み、これを反復して側を作りたる後、底足を編むものとす。底足を編むには、側を伏せて此方側の縦三組を取り、左端の一組を右方に曲げて一潜一抑し其の端を中に入れ、更に右隣の縦一本を加へてこれを反復し、全部の底足を作りたる後、不用の縦を剪定すべし。これが製作に用ふる縦柳及び剝柳は、成るべく細きものを可とす。



二、楕圓形菓子器 楕圓形菓子器は、長さ一尺八寸許の細き縦二十本を六本二組と四本二組とに分ちて、四本一組の縦を二本づつに分ち一組を四寸許他の一組を六寸許互違にして十字形に組み、更に六本を一組とせる縦を三本づつに分ち五寸五分許互違として放射状に組み、剝柳の第一横にて三四回第二横にて二、三回捲くべし。次に總べての縦を二組に分ちて十六組となし、一本の縦には長さ一尺五寸許の縦一本づつを添へて何れの縦も二本を一組とすべし。但縦の數偶數なる時は、二本の横にて編むの不便あれば成るべく十五組か十七組として一本の横にて編むを好しとす。斯くて短徑四寸長徑六寸許の楕圓底を作りたる後、向側の縦八組を取りて左方の縦を右方に曲げ、二潜二抑一抑し、これを反復して側を編み次に底足を作るものとす。底足は側を裏返して此方側の縦三組を取り、左方の一組を右方に曲げて一潜一抑し、これを繰返して全部を編み、能く其の形を整へたる後、殘餘の縦を切り捨つるものとす。

三、層籠 層籠は、長さ五寸五分直径一分三厘許の縦十四本を七本づつ二組に分ちて、七本を一組とせる縦の中央を何れも一寸二三分許小刀にて割り、其の間

に他の七本を一組とせる縦を通ほして十字形に組み、長き剝柳を以て、向つて右上より左下に抑へ、裏を反對に右上に潜りて、右上より右下に抑へ、右下より左上に對角線を潜りて更に右下に抑へ、右下より右上に潜り、次に右上より左上に抑へ、左下に潜りて右方を抑へ、反對に裏を左方に潜りて左上方に抑へ、右上に潜りて中心を捲き、上下左右對角線を何れも表裏共に抑潜すべし。

斯くて各の縦を放射状となし、二本の剝柳を以て右廻に一抑一潜して直径五寸五分許の圓底を作りたる後、長さ二尺二三寸直径一分許の縦二十八本を準備して、其の根許を五分許削り、これを底の縦と並べて一寸許刺し、此方側の縦三本を取りて其の左端のものを右方に曲げ、他の二本を潜りて上方に曲ぐべし。次に其の右隣の縦一本を加へて三本となし、前と全く同様に左方の縦を右方に曲げて二潜し上方に根曲をなすべし。これを反復して底足を作り側の編製に移るものとす。

側は稍、細き丸柳三本を順次に縦の間に挟み、右絢に二抑一潜して繩目を作ること二段にして側縮をなし、二本の剝柳もて側の縦を左廻に二抑一潜して深さ

根曲

七寸許となし、更に一段丸柳にて繩目を作るべし。側は僅廣口とするを好しとし又時宜によつては六角形其他美的の形狀となし、中央には白色又は青色、赤色、綠色等の麥稈、經木、真田を交へて編製し、尙ほ模様を表はさしむるも可なり。

縁は總べての縦を半外に倒して水平となしたる後、此方側の縦五組を取りて左端の一本を右方に曲げ三抑一潜して内側に出し、更に同様に右隣の縦一組を加へて左端のものを右方に倒し、三抑一潜して内側に出すこと三度に及ぶべし、次に内側に出でたる左方の縦を右外に曲げて二抑し、左より第七の縦の内部に添へて右外に出し、この時に於ける左端の縦を右方に曲げ、三抑一潜して内側に出し、更に内側左端の縦を右外に二抑し、右端の縦と並行して外に出すべし。斯くの如く外側の縦は、左端の一組を右方に曲げて三抑一潜したる後内側に入れ、内側の縦は左端の縦を右方に曲げ、二抑して其の左隣の縦と排べて外に出し、左より第七以後の縦は外側も内側も共に二本を一組として取り



第三章

紀柳細工

平縁

扱ひ、外側に三本を一組とする縦の出でたる時より右端の一本を列外に出し二本の縦を一組として編製すべし。即ち最初より七番目以後に抑潜する縦は内外共に二本を一組として用ひ、二回内側に出で其の次に外に出でたる際は列外に出して任務を終るものとす。これを反復して一圓の如き形状に編み、遂に全縁を作成したる後、能く其の形を整理して殘餘の縦を切り捨つべし。これを平縁と稱し、蓋なき製品の縁は多くこの編み方に依る。

湯籠

四、湯籠 湯籠は、長さ三寸四分直径一分許の縦十三本を六本と七本との二組に分ちて、七本の縦の中央を何れも一寸餘小刀にて割り、この中へ六本の縦を通ほして直角となし、これに長さ一寸六七分許の縦一本を加へ、中心を剝柳にて上下交互に一抑一潜して左廻に一回捲き、更に前と反對に一回捲きて中心を括りたる後、各の縦を一本づゝ二十七組に分ちて放射状となし、薄引の剝柳を以て右廻に捲きて底の直径を三寸三分許となし、不用の縦を剪除すべし。底編に用ふる剝柳は表を籠の内面に出づるやうにすべし。次に長さ一尺三四寸直径一分許の縦二十七本を準備して其の根許を三四分許斜に削り、これを底の縦に並行



して其の傍に五分乃至一寸許刺し込み、此方側の縦三組を取りて左方の一組を右方に曲げ、右方の縦二組を潜りて上方に曲げたる後、右隣の縦一組を加へて同様に左方の縦を右方に曲げ二潜して上方に曲ぐべし。これを反復して根曲をなし、底足を作りたる後、上方に曲げたる縦を稍、廣口となし、截頭圓錐形の編型を入れて直径八厘内外の丸柳三本を順次に隣れる縦の間に挟み、右絢に二抑一潜して左廻に三本絢すること三段、次に長さ三寸直径五・六厘許の丸柳五十四本を一本づつ各縦の左右に添へて三本を一組となし、幅一分許の剝柳を以て一つ置きに抑潜して高さ三寸五分許となし、更に又三本の丸柳を以て一回繩目に編み縁を平縁となすべし。手は、長さ二尺餘直径一分三厘許の丸柳二本を根許と梢とを互選になし、薄引の剝柳にて中央部五六寸許を捲き、其の兩端を一寸餘開きて、左右對稱の位置に縁を貫き縦に並行して二寸許横の間に強く刺して容易に抜けざるやうにすべし。

五、花挿籠 花挿籠は、長さ二尺二寸幅一分許の稍、厚引の剝柳十本を五本づつ二組に分ちて、互に中央に於て十字形に組みて方二寸許の格子組底を作りたる後、幅五厘許の剝柳二本を以て其の周囲を一つ置きに捲くこと四五回にして縦を上方に曲げ、二抑一潜して次第に編み漸次側の形状を圓筒状として直径を三寸許となすべし。而してこれより次第に細くして深さ二寸直径二寸五分許となりたる時、三本の横を以て右絢左廻に一段編み更に左絢左廻に一段編みて矢の羽組となすべし。次に長さ二寸幅二分許の稍、厚引の剝柳四十本を用意し、これを横柳に三十度許の角度をなすやうに一端を縦と縦との間に挟みて左下より右上に縦を二抑して他端を内部に入れ、尙ほ他の一本を以て二本の縦と先に挟みたる横とを共に左上より右下に抑へて交叉し、其の両端を内部に入るべし。これを反復して側に斜交状の帯飾を施したる後、三本の細き横を以て矢の羽組に編み、更に二本の横を以て二抑二潜して側を編み深さ五寸許となりたる時口徑を一寸七八分となし、これより一寸許は漸次太くし且順次に縦の間に挟みたる三本の横を以て縦を右上及び右下に二抑一潜して編み、(五〇頁の蟬形花挿籠

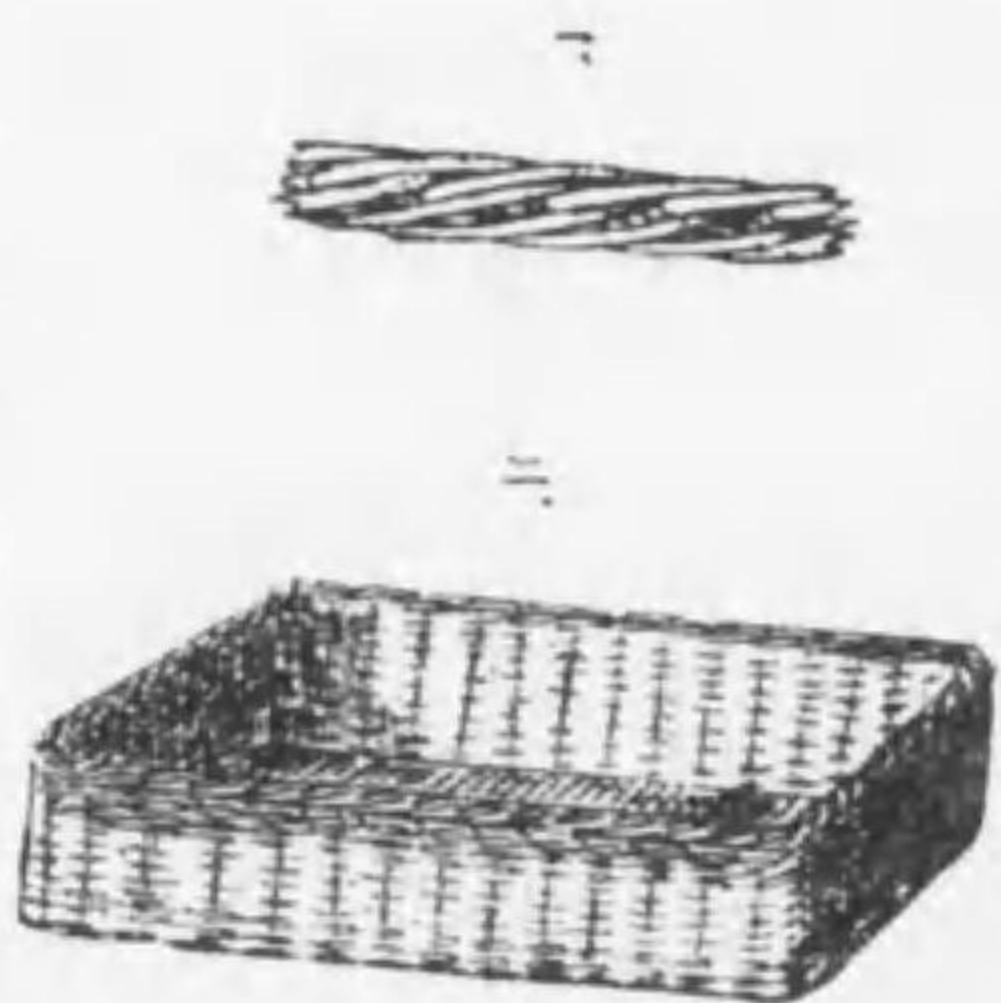
参照)側の直径二寸許となりたる時より稍、口を狭くして深さ六寸口径一寸八分許となしたる後、縁編をなすものとす。縁は此方側の縦三組を取りて、左端の一組を右方に曲げ右隣の縦二組を潜りて外に出し、更に其の右隣の縦一組を加へて同様にしこれを反復して一通り縁を編みたる後、先に外に出だしたる縦を左方に曲げて二本の縦を右下より斜左上に抑へ、左隣の縦二本を潜りて其の端を内側に入れ餘分の縦を切り捨つべし。總べてこれが編製に用ふる剝柳は、皮部を外側に出すやうにするものとす。



柱に掛くる乳形は、長さ七八寸許の剝柳又は皮籐を中央より二つに曲げ、口邊より一寸許下の後側に一本の縦を挟みて内部に通ほし、乳形を七八分許の長さとなし、兩端を其の三四分許下より外に出し、乳形の内側より外に捲きて相互の間を結ぶやうに通ほし、右下及び左下に導きて交叉せしめ兩端を側の内部に入るものとす。

こは製作後、茶粉又は其の他適當の色を以て染色するを好しとす。

六、角籠 角籠は、長さ八寸許にして直径二分許の縦四本と直径一分許の縦六本とを準備し、太き縦二本を一組として五寸許の距離に排べ、其の間に細き縦六本を排列して等距離となし、一本の細き丸柳にて交互に抑潜して長さ八寸幅五寸許の織底を作るべし。斯くの如く丸柳を以て編みたるものを丸木編と稱す。次に長さ八寸直径一分許の丸柳四十八本を用意して何れも其の根許を僅に削り、底の短邊には縦に沿ふて横と横との間に十本刺し込み、長邊には六分許隔てて兩側の親縦に手錐にて十四個の孔を穿ち、それぞれ其の孔に縦を刺し込みたる後何れの縦も上方に曲げて皆底に直角となすべし。斯くて短邊の縦に並行して順次に四本の丸柳を刺し、これを右方に曲げて側の縦を三抑一潜して右絢に繩目を作りて一周したる後、三本の横にて右絢に二抑一潜して編むこと二段にして下の繩目を作り、次に幅一分餘の剝柳を以て側面の中頃より左廻に縦を一抑一潜して側を廻はしつづ編み、前と全く反對の側に到りたる時更に一本を加へて二本の横を以て漸次に側を編み、深さ一寸五分許となりたる時下の繩目と同様に三本の丸柳を以て縦を二抑一潜して右絢に繩目を作ること三段にし



て縁編をなすものとす。縁編は此方側の縦三組を取りて其の左端の一本を右方に曲げ二潜して外に出し、更に其の右隣の縦一組を加へて前と全く同様に二潜して外に出し、これを反復すること前後四回にして、次に最初に二抑して外に出せし縦を以て其の右隣の縦を外より三抑一潜して其の端を外に出し、第五本目の縦を初めの四本の如く右方に曲げて二潜し、先の縦の一端と並べて外に出すべし。次に第二に外へ出せし縦を以て、其の右隣の縦を三抑一潜して外に出し、更に第六の縦を右方に曲げて二潜し、二本を一組とせる縦の外に出でたるものは、其の右側の縦即ち長き一本を以て右方の縦を三抑一潜し、左側の短き縦は列外に出して編み、これを反復して遂に縁編をなしたる後、残餘の縦を切り捨つべし。この縁を並縁と稱し、其の平面圖は一圖に示すが如し。

七、蓋附角籠

蓋附角籠の實は、長さ八寸直径二分許の縦二本を三寸二分許隔

織組
面底

てて排べ、其の間に長さ八寸直径一分許の縦五本を等距離に排列して、幅一分二厘許の剝柳を二本肉合せとして皮を外とせる横を以て編み、長さ八寸幅三寸二分許の織組兩面底を作りたる後、長さ一尺内外直径七厘許の縦五十四本を準備して其の根許を僅削り、これを長邊に十九本短邊に八本づつ刺して、此方側の縦三本を取りて其の左端の一本を右方に曲げて、右隣の縦二本の下を潜りて上方に曲げ底に直角となし、これを反復して根曲をなしたる後、三本の細き丸柳にて側の縦を二抑一潜して右側に捲き繩目を作ること三段の後、長さ一寸三四分許にして稍細き縦八本を四隅の縦に一本づつ添へて二本を一組となし、幅七厘許の剝柳二本を以て側を編み高さ一寸五分許となすべし。但編み初めは決して同一の所よりすることなく且狭く削りて目立たざるやうにすべし。次に三本の丸柳もて二段繩目に捲き、角籠と同様に縁を並縁に編み不用の縦を剪除するものとす。

蓋は底と殆んど同様の方法を以て作るものにして、長さ八寸七分直径二分許の縦二本と長さ八寸五分直径一分許の縦十本とを以て、太き縦を三寸三分許隔

兩面蓋
縁飾

てて其の間に細き縦を二本一組として等距離に排べ、幅七厘乃至一分許の剝柳を合せたる横を以て長さ八寸四五分幅三寸八九分許の織組の兩面蓋を作りたる後、兩木口を装ひ且横の解けざるやうにするため縁飾をなすべし。縁飾は長さ五寸許の極細き丸柳五本を左より各縦と並行に横の間に刺し、更に左方の親骨に同じ太さにして長さ四寸許の丸柳を捲きて兩端を右方向に向はしめ、右上に導けるものを右下に向へるものにて抑へ、左より第一の横を潜りて第二横との間を右上に出だし、次に第一横を右下に曲げ第二横を潜りて右上に導き三本の横を右上に向つて並行せしむ。斯くて右上に向へる左端の横即ち初め親骨に捲きて右上に向ひしものを右下に曲げて第二横の上に排べ、共に右下に曲げて他端及び第一横を抑へ更に第三横を潜りて右上に出し、次に右上に出でし左端の横を第三横と排べ、共に右下より右上に曲げて第四横を一潜し右上に出したる後、右上に出でし左端の横即ち第一横の右上に出でたるものを右下に曲げて第四横の上に排べ、共に右下より第五横を潜りて右上に出し、更に第五横を右下に曲げ右上に出したる第二横の一端を右下に導きてこれを排べ、第一横の先端



及び第四横を抑へ、更に右上に曲げて親骨を抑へ、尙ほこれを第三横の先端もて抑へ、右上に向へる第四横は第五横及び第二横の先端を抑ふると共に親骨を右廻に捲きて第二横の先端と第三横の先端との間を通りて蓋の右より第二縦の間に挿入し、右上に出でたる第五横は右の親骨の左邊に沿ふて總べての横を上より下に捲き、其の端を親骨に沿ふて挿入したる後、列外に出でたる横を剪除し一圖に示すが如くすべし。左木口を編むには、右木口と全く反對に向つて右の親骨より初め、先に右上及び右下に導きしものを總べて左上及び左下に導きて編むものとす。

蓋と實とを結び附くる蝶繫は、長さ四・五寸許の蔓若くは細き丸柳四本を用意し、二本を一組として一端より一寸許を實の後側左端より四本目の縦を挟みて縁編と繩目との間より中に通ほし、互に抑潜して結び外に出でたるものを一寸五分許綯ひてこれを蓋の親骨に捲き裏に通ほして

兩端を開き、先に他端を中に通ほして結びたる所より實の外に出し、更に四分許綯ひて兩端を開き、實の上邊より七分許下に於て縦柳を挟みて中に導き、兩端を互に抑潜して結び餘端を剪定すべし。他の一方も全くこれと同様にして反對の位置に絡み、蓋の開閉を自由にすべし。

口縁は、實の前側中央上部に長さ二寸許の防已木通蔓籐を以て乳形を作り、更に長さ三寸許の太き防已木通蔓若くは幅一分七厘許の皮籐を以て、蔓細工の教材旅行用「バスケット」の門の如く作りて、これを蓋の前邊の中央に乳形にて取り附け、以て口の開閉に備ふるものとす。

手提籠

八、手提籠 手提籠は、長さ五寸直径二分許の丸柳五本を三寸三分許の間に排列して等距離となし、細き丸柳一本にて編み、長さ五寸幅三寸三分許の織組丸木底を作りたる後、長さ一尺三寸直径一分許の縦二十九本を、四隅には二本づつ短邊には四本と五本、長邊には六本づつ底の周圍に刺して上に折り曲げ四方轉となるやう稍廣口となし、三本の丸柳にて右綯に二抑一潜して側に下繩を施すこと二段にして、幅一分五厘許の一本の剝柳にて側の縦を一抑一潜して口徑六寸

五分に四寸五分、深さ三寸許に編みたる後、縁編をなすものとす。縁は此方側の縦六組を取りて、其の左端のものを右方に曲げ二潜二抑一潜して外に出し、更に右隣の縦一本を加へて六組となし、前と同様に二潜二抑一潜し、これを反復して一周したる後、外側に出でし縦四組を取り、左端のものを右方に曲げて二潜一抑し、先端を外に出すべし。次に其の右隣の縦一本を加へて同様に編み、これを繰り返して縁編を終り、残りの縦を切り捨つべし。

手は、長さ二尺幅五分厚さ五厘許の竹の両端三寸許を鋭く削りて、皮部を外にし、両端を去る七寸許の所より曲げ、これを側の長邊に上より縁と横との間に刺して容易に脱けざるやうにしたる後、其の上の細き杞柳を添へ、幅一分許の剝柳を捲き、中央に於ては添柳を三回又は五回交互に捲きて浮かせ、其の両端は縁に斜交状に括りて解けざるやうにすべし。

蓋は長さ二尺一寸直径二分五厘許の丸柳を六寸三四分と四寸五分との矩形に曲げて其の重ね目は薄く削りて目障りのせざるやうにしたる後、蓋の短邊を七等分して六つの等分點の所を小刀にて割り、其の間へ長さ六寸五六分幅一分



五厘許の稍厚引の剝柳六本を挿入して表の方へ張り出し、幅一分餘の剝柳を以て縦を一つ置に抑潜し縁柳には二回捲きて捻り、皮が常に蓋の表面に出づるやうに織蓋に編製すべし。短邊の縁巻は別の剝柳を以てすべし。斯くて能く其の形を整理してこれを實に被ひ、提手に環もて取り附

くべし。即ち手を通ほして直径一寸許の剝柳の環を作り、これを剝柳にて捲き其の末端の解けざるやうに挟みたる後、これに長さ五六寸幅一分強の剝柳を通ほして蓋の縁と共に二回捲きてこれを蓋の縦と同様に縦の間に挟むものとす。

九、盛籠 盛籠には、其の形状、大小、編方等種々あれども、今次に其の一例を示さん。底は長さ六寸直径一分七厘許の丸柳四本を取りて、其の中央一寸五分許を割り、これに長さ八寸直径一分五厘許の丸柳五本を排べて通ほし、短き縦の間隔を四分許として直角に中央に於て組み肋骨状となすべし。次に幅一分五厘許の剝柳を以て中心を括るものとす。即ち先づ長き縦を左右として剝柳の一端を縦の間に挟み、左端の短き縦を右上より左下に潜り、左下より右上に抑へて捲

き、更に右下より左上に左端の短き縦と先の剝柳とを抑へて斜交状に組み、裏面に於ても同様となし、短き縦と縦との間を三回づつ右方に捲きて短き縦を左上より右下に潜り、何れも同様に捲きて右端の短き縦は左下より右上に抑へ、其の裏を左下に潜りて左下より左上に捲き、裏面を左上より右下に潜りて右下より



左上に抑へて一圓の如く左右を對稱となし、餘端を左下に導きて右端より第一縦と第二縦との間より表面に出し、右廻に縦を一つ置きに抑潜して、長き縦の左方には更に長さ三寸許の縦一本を添へて總べての縦を十九本とし、先端を開きて放射状となすべし。斯くて剝柳を以て稍、中心に傾け

詰編

皮部を表はすやうにして漸次楕圓形に抑潜し、長徑八寸短徑六寸許の楕圓底を作り不用の縦を切り揃ふべし。斯くの如く皮が表裏に現はれ中心に傾くやうに編むを詰編と稱す。

側は長さ三寸五分幅一分三厘許の剝柳八十本を縦として準備し、長さ二尺六

昇編

寸許の剝柳二本を肉合せとして底の周圍に楕圓形に捲き側縮をなして、幅一分二厘許の長き剝柳を以てこれを一回捲き、次に其の間に縦を挟みて一回捲き、底の縦に接する所に至りたる時それより五分許内部に手錐にて孔を穿ち、これに剝柳を通ほして側と底とを連結し、更に縦を挟みては捲き、捲きては縦を挟みて底縦の周圍に至りたる時は其の都度底縦に剝柳を通ほして捲き、底の周圍に側縦を挟み終るべし。但この縦は何れも側縮より三分許下に出すものとす。斯くて側縮と同一の長さを有する半割柳二本を以て側の縦の下端を挟み、側縮に用ひたる剝柳と同じ幅の剝柳を以て前と同様に捲き、更に三四寸許隔てて側縮と共に捲き全周を八九個所括りて底足を作り、不用の縦を切り捨つべし。側を編むには、長さ一尺幅八厘許の剝柳を側の縦と同數即ち八十本用意して、底面に十五度許の角度をなすやうに各縦の間に左下より右上に挟みて二十八本の縦を抑潜すべし。同様に其の右隣の横を斜右上に編み順次これを反復して全部の側を編製するものとす。この編方を昇編と云ふ。側は僅外部に張り出し、稍、廣口となすべし。便宜編型を用ひて編み、形狀の整一を期するを好しとす。

斯くて長さ三尺幅一分五厘許の厚引の剝柳を以て口邊の周圍を捲き、これと側の縦とを剝柳にて捲き最後に縁を附くるものとす。縁は心に長さ三尺直径二分五厘許の丸藤又は木通蔓防已等の蔓を二本用ひて能く口に適合するやうに兩端を薄く削りて重ね合せ長徑一尺短徑八寸許の楕圓形となし、二本の縁蔓を以て側の縦を挟み、不用の部分を剪定したる後、幅二分許の剝柳を以て縁を捲くものとす。其の捲き方は、側の縦と縦との間を二回又は三回緊密に右廻に捲きて、縁に毫も隙間なからしむべし。

辨當入

一〇、辨當入 辨當入の實を作るには、長さ七寸直径七厘許の丸柳七十本許を長さ五寸許の弓竹に張れる麻絲に差したる後、素地を編み縁を附くるものとす。麻絲は細きものを弓竹の長さの約五倍許取り、これを折半して右廻に綯ひ弓竹に掛けて複線となしたる後、弓竹を縦とし二本の編絲の間に柳の梢を左右より交互に差して斜交狀となし、何れの柳も長さの真中に於て交るやうにすべし。而して後に側となるべき前後兩端の柳は各十五本の中最初の一本と最後の一本とは一本を一組として編み、他の十四本は二本づつを一組として編製するも

のとす。斯くて全部の縦を差し終らば、弓竹を横に柳を縦にして、他の麻絲を縦柳の一端に括り、前に差したる柳と反對に抑潜して兩側の十四本は二本づつ同時に抑潜し兩端の一本は麻絲を捲きて順次に抑潜し、編絲の間を何れも二分許となすべし。中央を去る二寸許の所より編絲を蒲鋒狀に細く編み、他の半分も



同様に編みて長さ六寸五分幅四寸許の小判形の素地を作り不用の柳を剪除すべし。次に素地を潤ほして左右前後を曲げ深さを一寸許となしたる後、縁を附くるものとす。縁は長さ一尺五寸幅二分五厘厚さ二・三厘許の剝竹の兩端を一寸許重ねて括り、これを素地の周圍に箝め更に其の内部に適合する縁竹を作りて素地の縦を挟み不用の縦を切り捨てたる後、幅二分許の薄引剝柳を以て縁を右廻に捲くものとす。縁の木端は曩に一本編せし縦に剝柳を通ほして縁竹に括り、木口は縁竹にて挟みたる縦の脱けざるやうに捲くものとす。

蓋は、長さ七寸三分幅四寸三分許の素地を作りて實と同様に曲げ、縁を附けて實に能く適合するやうにすべし。

一、行李 行李には、大馬、長尺、尺高、大荷、尺荷、小荷等の別ありて、それぞれ其の形状及び寸法を異にす。大馬は、行李の外法、長さ二尺六寸幅一尺六寸深さ七寸五分にして、長尺は又二つ折と稱し、長さ二尺四寸幅一尺四寸深さ七寸なり。尺高は、長さ二尺二寸幅一尺二寸深さ六寸五分にして、大荷は又三つ折と稱し、長さ一尺九寸幅一尺三寸五分深さ七寸なり。尺荷は、長さ一尺七寸幅一尺一寸五分深さ六寸五分にして、小荷の一は長さ一尺七寸五分幅一尺二寸五分深さ五寸六分、小荷の二は長さ一尺五寸五分幅一尺一寸深さ五寸二分なり。而してこれが編製に用ふる杞柳及び麻絲は、製品の大小によりて細太適宜のものを使用すべきは、勿論なり。

普通の行李は、概ね素地と仕上との二分業に依つて製せらる。素地を作るには、乾晒せる白芽を使用前一時間乃至三時間許清水に浸して曲ぐるも容易に折れざるやうにしたる後、水中より引上げ菰に包みて成るべく一二時間以内に使用すべし。又麻絲も割竹を鈍四角形に曲げたる枠に捲き、水に潤ほして適宜の所に吊し使用に供すべし。編絲の太さは行李によつて細太適當のものをを用ふべしと雖も、普通には六番位のものを用ふ。

斯くて麻絲を所要の大きさを有する弓竹に掛けて二回捲き、これを外して二つ折となしたる後互に緬ひ合せ、弓竹を皮の方に曲げてこれに二條の麻絲を張り、差板を括りたる麻絲にこれを挟み、盤板を横にして其の上に直角に載せ、一端を抑へて二條の麻絲の間には行李の大きさによりて適宜の長さを有する白芽を差すものとす。白芽は何れも左右より根許と梢とを互違に差し、且編絲を白芽の中央として、白芽と麻絲との接する所は僅か折り左右に移動せざるやうにすべし。而して初めは二本差にすること六回にして左右の長さを同じくし、次に一本づつ同様に差して互に斜交状となし、先づ前側を差したる後、深さだけ左右に長き杞柳を前と同様に一本差にして底を作り、次に初めと全く對稱に後側の袖をも一本差にし最後の六回は二本差として行李の展開形を作るべし。而して弓に差し終りたる柳は差板より外し、九十度回轉して弓竹を横に柳を縦にして盤板上に載せ、差柳の一方に裏弓を挟みて編絲の動かざるやうにし、差板と踏板とを以て差柳を抑へ、弓を盤板の木端に近く竝行に置き、初めは左より右に右手

を以て柳を上下交互に組み左手を以てこれを支へ、其の間に一條の麻絲を導きて編み、右より左行する時は全くこれと反對にし、左右の兩端六組は複線に編製すべし。これを反復して中央を編み、不用の柳は左方を先に剪除すべし。山即ち行李の左右の側を編む時には、左又は右より二本目と三本目との間及び四本目と五本目との間に、深さだけの長さを有する柳一本づつを添へて編み、僅に廣くすべし。これ後に目縫をなす際、袖の木口を外部より被はんがためなり。又底と山との境即ち後に側を折り曲ぐる所は、特に他の部分より一筋其の編絲を密にすべし。斯くて山を編み終らば、麻絲を二度捲きて解けざるやうに括り、不用の縦柳及び麻絲を切り捨て、裏弓を除きて他の半分も前と全く同様に編製すべし。製作中は時々水を吹きて杞柳の硬化を防ぎ、且定規によりて其の寸法を測り、所要の長さに折りて目標とすべし。編製を終らば木槌にて能く素地を打ち均らし、腰曲せんとする所を特に潤ほして一方に折り曲げ、山を袖に被ひて柳の木口を包み、針に麻絲を通して素地の内側より外に出し、一端を乳形に結びてそれに針を通し、絲を締めて粗く縫ひ合はすものとす。他の三隅も同様に目縫



をなしたる後、其の内部に張竹を入れ、能く其の形を整ふべし。

蓋と實とは、其の編み方全く同様にして、蓋は實より左右前後一寸許長くするを常とす。但其の差は行李の大小と柳の細太とによりて一定せざるは勿論なり。

目縫をなしたる後、二本の縁竹を以て側の縁を内外より挟み、皮籐を以てこれを素地に取り附くるものとす。縁竹は幅八分乃至一寸厚さ一分内外、側の周圍を一周して一寸五分許重るものを適度とす。こは別に加熱することなく徐に曲げて矩形となすべし。而して其の長邊には七個所短邊には五個所中央は五度、其の他は三度許捲きて、兩端を縁竹の間に挟み容易に解けざるやうにすべし。斯くて角其の他の損傷し易き所には、「ヅツク」又は皮を縫ひ附けて仕上をなすものなり。

一、二、旅行用「バスケット」旅行用「バスケット」にも其の形状大小製法等種々あれども、今次に其の模式的のものを擧げん。

底は長さ一尺五分許にして直徑二分五厘許の丸柳二本を六寸二分許隔てて

排べ、それより僅か細く直径二分許のものを各一本づつこれに内接して兩端の親骨となし、更に其の間に直径一分許の細き丸柳八本を六七分許隔てて等距離に排べ、細き横柳を以て編み長さ一尺五分幅六寸二分許の丸木織底を作るべし。この際形を一定するため板に縦を箱むるやう刻くを入れたる編型を用ふるを便とす。次に底を編型の底面に竹又は木片を通はしたる釘にて三・四個所打ち附けたる後、側の製作に移るものなり。

側は長さ一尺・二寸直径一分許の縦七十四本を用意し、其の根許を五六分許削りて、これを前側及び後側の長邊には各二十三本づつ親骨に一寸許刺し込み、左右の側には各十四本づつ底の縦に並行して横の編み目に刺し又は横に穿孔して刺し、四隅は他の部分よりも縦と縦との間を僅に狭くすべし。斯くて側の縦を全部底に刺し終らば、此方側の縦三本を取りて左端の一本を右方に曲げ其の右隣の縦二本を潜りて上方に曲ぐべし。次に其の右隣の縦一本を加へて三本となし、左端の縦を右方に曲げて二潜し上方に曲げ、これを反復して總べての縦を根曲したる後、側の編製に移るべし。側は先づ直径六・七厘許の丸柳三本を

縦の間に一本づつ順次に挟みて右絢に二抑一潜し繩目を作る。こと四段にして、長さ六寸以上直径五・六厘許の添縦を各の縦の左右に添へて總べての縦を三本一組となし、幅七・八厘許の剝柳二本を以て左廻に縦を抑潜して編み、編型に沿ふて側を僅か外に張り出すべし。これが編製に用ふる剝柳は決して長く水に浸すことなく、十分乃至三十分間許を適度とす。斯くて側の深さ六寸五分許となりたる時、直径五・六厘許の丸柳三本にて繩目を作ること一段、更に直径一分許の丸柳五本を縦の間に一本づつ順次に挟み、右絢左廻に四抑一潜して一廻り絢ひ蓋止を作りたる後、又剝柳にて四回編み、前後の縁は直線狀に左右は弧狀に整へ、細き添縦を剪除して縁編をなすものとす。縁編は此方側の縦三本を取りて、左端の一本を右方に倒し右隣の縦二本を潜りて外に出し、更に右隣の縦一本を加へて左端の縦を右方に倒し前と同様に二潜して外に出し、次に右隣の縦一本を加へて最初に外に出せし縦を以て右隣の縦を一抑一潜して外に出し、其の任務を果すべし。而してこの時に於ける左端の縦を以て右方の縦を二潜して先に外へ出せし縦の右方に排べて外に出し、更に右隣の縦一本を加へて第二に外に

出せし縦を以て右隣の縦を一抑一潜して外に出し、左端の縦を右方に倒し、二潜して先に倒せし縦の右に排べて外に出し、更に右隣の縦一本を加へて外に排んで出でし、右方の縦を以て右隣の縦を一抑一潜して外に出し、左端の縦を右方に曲げ二潜して外に出すべし。斯く順次右隣の縦一本を加へて三本の縦となし、外に排んで出でしものを以て右隣の縦を一抑一潜したる後、左端の縦を右方に曲げて二抑し二本を排べて外に出し、これを反復して縁編を終らば、残餘の縦を切り捨て、底に打ちたる釘を抜き、編型を解きて外に出すべし。側を編むには別に添縦をなさず、横には細き丸柳を用ひて三本編となし、右綯と左綯とを交互にして所謂矢の羽組となす時は、外觀美なるのみならず頗る堅牢なるものを得べし。又適宜の模様を表はすも可なり。

蓋は、長さ一尺一寸直径三分許の丸柳二本を六寸五分許隔てて排べ、其の間に同じ長さにして直径二分許の縦八本を等距離に排列して、幅一分許の厚引の柳にて詰編の蓋を作りたる後、長さ五寸以上直径七八厘許の縦六十六本を用意して其の根許を僅削り、蓋の長邊には各二十一短邊には各十二の孔を穿ち、實の

底の如くこれに縦を刺して蓋を裏返し、此方側の縦三本を取りて左端の一本を右方に倒し右隣の縦二本を潜りて上方に折り曲げ、更に右隣の縦一本を加へて三本となし、前と同様に左端の縦を右方に倒し右隣の縦二本を潜りて上方に曲げ、これを反復して根曲をなし、直径一分許の丸柳三本を以て右綯に三本編すること四段にして縁編をなすものとす。縁は此方側の縦二本を取りて左方の縦を右方に倒し一潜して外に出し、次に右隣の縦一本を加へて前と同様に左方の縦を右方に倒し一潜して外に出し、更に同様に右隣の縦一本を加へ左方の縦を右方に倒して外に出し、次に最初に外へ出せし縦を左より四番目の縦と共に右方に曲げて其の右隣の縦を潜りて外へ出し、これより順次前と同様に一旦外に出でし縦を他の縦と共に其の右隣の縦を潜りて外に出し、最初より云はば右綯に一潜二抑一潜して其の任務を卒へ、新に倒せし縦の手前に排べて外に出すべし。これを反復して縁編をなし、蓋を稍、外圓に彎曲せしめたる後、不用の縦を小刀にて剪除すべし。斯くて能く其の形を整理して實に被ひ、蝶繫を作るものとす。

蝶繫は、長さ一尺直径一分許の蔓又は杞柳を二つに曲げて、實の右より第三縦の上の繩目より二分許下に外より中に通し、縦を括りて外に出し、殘部を右綯にして上に導き、蓋の右より第三縦、下より二段目と三段目との繩目の間より蓋の中に通ほして實の縁を捲き、實の繩目の間を外に出して先に外側を上を導きし繩を抑へて中に入れ、内部の繩に括りて解けざるやうにし、蓋の開閉を圓滑にすべし。左方にも對稱の位置に又中央にも同様にして三個の蝶繫を附くるものなり。

手は、圖の如き形狀に丸籐又は杞柳を曲げて、これに薄引の剝柳を捲きたるもの二個を作り、これを蔓又は杞柳を以て蓋の中央に取り附くること蔓細工の旅行用「バスケット」の如くすべし。



口緋・名刺差等の金具及び革片は、鋏を以て蓋及び實に取り付け、内部には紙又

は布片を貼りて美化裝飾するを好しとす。

第四章 麥稈・經木細工

意義

麥稈・經木細工は、白色又は染色したる麥稈・經木を以て眞田紐籠等を編み、若くは箱の表面に貼附する細工なり。

目的

目的 本細工に於ては、材料に關する觀念及び製作法の一般を授け、手指の運用を練り、綿密勤勞の習慣を養ふとともに副業思想を涵養するを以て要旨とす。

材料

材料 この細工の主要材料には麥稈・經木を用ひ、補助材料には漂白劑・染料・紙糊・竹笠菅等を要す。

主要材料
麥稈

麥稈 麥稈は一つに麥莖と稱し、禾本科に屬する草本麥の莖なり。其の主成分は「セルロース」にして、光澤ある淡黄色を呈し、稈の長さ三尺許なり。其の形狀は竹の如く中空にして數節を有し、節毎に袴を著く、葉は細長くして縦に並行せる脈あり。これに大麥・小麥・裸麥・燕麥等の別ありて、麥稈細工の外、肥料・燃料・紙料等に供し、又屋根を葺くに用ふ。

麥稈細工には歐洲に於ては小麥稈を用ふれども、本邦に於ては主として大麥稈及び裸麥稈を用ふ。最も廣く使用せらるるものは、裸麥の一種にして長十郎小鬘又は小鬘傾コビシカクキと稱するものなり。これに次ぐを裸麥に屬する鳴海裸シケ濕氣シケ不知シケ、大麥に屬する「ゴルデンメロン」長穗、小麥に屬する白穗とす。この中小鬘傾は、稈太くして純白色を呈し、光澤鮮麗なるのみならず肉薄く質柔かにして弾性に富み、品質優良にして收穫多きを以て賞用せらる。鳴海裸は、稈先良く弾性に富む。「ゴルデンメロン」は一名眞田麥とも稱し、外國種なり、稈長五六尺に達し、節間一尺五六寸に及ぶものあり、稈丈夫にして眞直なれども質稍剛し。

總べて麥稈は、其の質柔靱にして脂氣を帶び、節間長くして穀物の收穫多きものを好しとす。

經木

經木 經木は、ドロノキ、イモノキ、ボブラ、檜等を初めとし、楡、榎、松、蝦夷松、朴等を經木匏にて削りたる木材の薄片なり。諸種の木材中經木に最も適切なるはドロノキなり、これドロノキは材質柔軟にして匏削し易く、纖維強靱にして弾性に富み、且材質一様に白くして光澤を有し、漂白、染色に便なる等、原料として必要な

る條件を悉く具備するのみならず、挿木法に依りて容易に造林することを得る上、其の成長頗る速かなれば、比較的廉價に材料を供給することを得ればなり。總べて經木材は、材色純白にして永く變色することなく、質強靱にして光澤に富めるものを好しとす。

經木は、潤ほして眞田紐を編み、或は柱、天井、壁、襖器具等に貼り、或は座布團、枕、玩具等に供する外、厚きものは燐寸箱、菓子折、辨當箱、文庫等を製し、薄きものは簪に代へ辨當料理、菓子其の他各種の食品を包むに用ふ。特に木理の美なるものは、襟飾、髮飾、帽子飾、リボン等の精巧なる裝飾品を作るに用ふ。

眞田に用ふる經木は、適當に木取りたる木材を經木匏にて削りたるものにして、これを大別すれば滑經木、縮經木、霞經木、扱經木、筋經木、緯縮經木、繩經木、清經木等の數種となる。滑經木は又平經木と稱し、薄く平滑に削りたる普通の經木なり。長さ一尺二三寸幅一分二分三分等ありて最も多く使用せらる。こは長さ三尺幅五寸許の臺に身幅四寸許の身を仕込みたる大匏の下端を仰向となし、及口より一寸八分許隔りたる所に横溝を設け、これに一定の距離を置きて及先を

出したる櫛形の針と稱する刃物を挿入したる經木匏の下端の上に木材を導きて、幅を規定すると同時に薄く削りて作りたるものなり。縮經木は匏の構造によりて薄片の上端に出づる際、壓縮装置のため經木面に縮緬の如き無數の皺を作りたるものなり。霞經木は又薄縮經木と云ひ縮經木の極めて薄きものにして百枚の厚さ僅に一分五厘乃至二分五厘に過ぎず、故にこれを透視する時は恰も霞の棚曳くが如き觀あり、故に名づく。扱經木は極めて薄くして幅廣き滑經木を作り、これを手にて扱きたるものなり。筋經木は又縦縮と稱し、滑經木の表面に縦筋の入りたるものにして、其の形狀細縞の如し。こは刃先に規律正しき凸凹ある匏を用ひて製したるものにして、百枚の厚さ五分許なり。線縮經木は、筋經木を種々の繰機械によりて其の表面に縮模様を現はしたるものなり。細經木は、極めて薄く削りたる經木を燃機械によりて繩の如く綯ひたるものなり。清經木は、一名經絲とも稱し、木材を極めて薄く削りたる後、絲の如く細く切りたるものなり。

補助材料
漂白劑

漂白劑 麥稈の漂白には、主として硫黄を用ふれども稀に漂白粉、過酸化

染料

水素過酸化、ソヂウム等を用ふることあり。經木の漂白には専ら次亞鹽素酸、マグネシウム、蓼酸を用ふ。

染料 麥稈及び經木を染むるには、赤青黄綠紫褐色等各種の染料を用ふ。鹽基性染料は容易に其の外皮を着色することを得、染液中に添加薬を要せずして濃厚なる美色を發現するの長あれども、内皮までは染色し難し。酸性染料は、染液中に醋酸の如き有機酸を加ふるを好しとす。直接染料は、概して麥稈の染色には不適當なり。

紙 紙は、箱を作り又は麥稈紙を作るに用ふ。箱には厚紙を用ひ、麥稈紙には日本紙を好しとす。

糊 糊は、麥稈を貼附するに用ふ。弱き糊にては剝離するの虞あれば、炭糊又は護謨糊の如き強きものを使用すべし。

竹 竹は、籠の縁に用ふ。苦竹の細きものにて可なり。

笠菅 笠菅は、單に菅とも稱し、本細工に於ては主として經木籠の縁を捲くに用ふ。こは莎草科に屬する多年生の草本にして、水邊に能く生育し高さ三四尺

紙 糊 竹 笠菅

麥稈の採集法

に達す。葉は、細長くして先端尖り、滑かにして毛なく幅三四分許なり。秋日採つて乾かし笠、菰、土瓶敷等を作るに用ふ。

麥稈の採集法 麥稈を採集するには、稍早刈するを好しとす。即ち普通の收穫期より一週間許前に晴天の日を選びて刈り取り、直に穂を落せば纖維強く且光澤美なり。然れども餘り早く刈り取る時は、稈は柔靱なれども乾燥後縦に皺を生じ收穫少くして貯藏に適せず、これに反し其の採集期晩き時は、稈は脆弱となり著しく其の品質を損ず、故に殆んど麥の成熟して葉と節間とに僅か綠色を存する一週間内に刈り取るを好しとす。斯くて種實を落したる稈は、猶ほ二三日間乾かして煙の入らざる濕氣少き所に貯藏すべし。

麥稈及び經木の處理法 麥稈は、通常第一節及び第二節を用ふ。第一節は又實子ゴの節、先節等と稱し、穂に接續する部分を第一の節より抜き取りたるものなり、稈身太からざれども品質佳良にして丸のまま眞田に用ふ。第二節は又二の節と稱し、第二の節より抜き取りたるものなり、稈太短くして其の品質第一節に及ばず、其のまま又は開きて眞田に編み、若くは貼附用に供す。これが調製は

調製法

多く農閑に於て婦女子又は、兒童の手に成るを常とす。

麥稈を抜き取るには、先づ能く稈を日光に乾かしたる後、根許を膝にて抑へ先端を左手に持ち、第一節の一二分上を右手の拇指と食指とにて持ち、爪先にて切り取るものとす。斯くの如く順次一本づつ抜き取って左手の稈多量とならば下に置きて更に抜き取るべし。第二節以下の抜き方も略、これに同じ。以上の如くして抜き取りたる稈は、藁もて直徑四五寸許の小束となしたる後、一の節は七八寸二の節は五六寸の長さに切斷すべし。

漂白法

麥稈を漂白せんには、先づ小束十數個を束ねて直徑一尺五寸乃至二尺許の大束となし、これを洗淨液に浸漬したる後、清水にて洗ひ潤ひたるまま亞硫酸瓦斯を以て煙蒸漂白するものとす。洗淨液には、單に白水を用ふる場合と曹達液を用ふる場合と、この兩者を混合して用ふる場合とあり、白水は米の炊汁又は糠を水に溶きたるものにして、曹達液は、炭酸曹達又は苛性曹達を一%許の濃度即ち水一升到五升許溶きたるものを適度とし、白水曹達混合溶液は白水一升到炭酸曹達又は苛性曹達五升許を溶解したるものなり。

經木は、主として「セルローズ」より成り、樹脂、單仁等を含有すれば豫め〇・一%許の石鹼水中に浸漬し、更にこれを加熱して沸騰點に近き温度に於て一時間許煮沸し、温湯にて能く洗滌したる後乾燥すべし。斯くてこれを次亞鹽素酸、マグネシウム₂の溶液中に浸漬すること約五時間にして引き上げ、水洗後〇・五%許の稀酸溶液中に浸漬すること約三十分間にして引き上げ、水洗乾燥すること二回に及べば純白色となるべし。次にこれを〇・七%許の「ジエチレン」液又は「アラビア」護膜液に浸漬して、日光のために變色せざるやうにするものなり。

選別法

漂白したる麥稈は、先づこれを選器に掛けて其の太さを區別し、更に品質に依りて等級を定むるものとす、これを等別と稱し通常三種乃至六種に別つ。其の方法は二、三十本の稈の末端を左手に持ち右手を以てこれを扇形に擴げ、目の高さに擡げて日光に透視し、斑點の有無によりてこれを數種に分つものなり。即ち透明にして毫も曇なきものを上等とし、斑點の少きものを中等とし、多きものを下等とするが如し。上等品は其のまま使用すれども劣等品は多く染色して意匠品即ち色物に使用せらる。

染色法

通常稍劣等なる麥稈は、其の強度、光澤、形狀等を損することなく、染色美化して變物及び貼附用に供す。又經木も染色して色物の製作に用ふ。

麥稈を染むるには、先づ一%許の炭酸曹達水即ち水一升到五升許の炭酸曹達を溶かしたる液中に麥稈を入れて沸騰洗浴すること三十分乃至一時間許の後更に〇・二%許の稀酸中に暫時浸漬して引き上げ、次にこれを水中に入れて洗ふ時は、初め曹達水のために稈色黄色を帯び質の緩みたるものが、稀酸のため再び白色となり、質も緊張す。これを清水にて洗ひ、稈肌を清くして染附を容易にするものとす。斯く精練を経たる麥稈は潤ひたるまま染鍋に入れて染料と共に煮沸し、適當に染色せられたるを待つて取り出し、日光に乾かして更に水洗するものとす。染色に要する時間は、染料の種類、染色の度合によりて一定せざれども、通常十五分間乃至三時間許なり。然れども長く煮沸する時は、麥稈の品質を害する虞れあれば、成るべく速に染め上ぐべし。凡そ染料は、豫めこれを適度に調合して別器に溶かし、適量の水を入れたる染鍋に移して稀釋したる後、徐に加熱し、先づ麥稈層を入れて試染し、適色を得ば、精練したる麥稈を入れて煮沸すべし。

し。總べて染液中には、少量の焼明礬又は醋酸・食醋を加へて色止をなし、褪色を防ぐを好しとす。經木の染色も略これに同じく、多くは精練・煮沸せざるも容易に發色することを得べし。

今次に一例を擧げて、麥稈を染むるに用ふる染料名及び麥稈一貫を染むるに要する染料の調合量を示さん。

色	染料名	分量
赤	「ジャナス、スカレット」B印	三〇匁
桃	「ローダミン」六G印	一五匁
緋	「ローダミン」六G印	三〇匁
	「オーラミン」〇印	一〇匁
黄	「オーラミン」〇印	二〇匁
青	「ネグエー、ブルー」	二〇匁
瑠璃	「メチル、ヴァイヲレット」四R印	五〇匁
	「ネグエー、ブルー」	三〇匁

工具

獨用具
篋

小刀
鋏

緑	「マラカイト、グリーン」	二〇匁
黄緑	「オーラミン」	三〇匁
	「マラカイト、グリーン」	一五匁
紫	「メチル、ヴァイヲレット」四R印	二〇匁
褐	「ビスマーク、ブラウン」	二〇匁
黒	「ジャナス、ダークブルー」	三〇匁
	「マラカイト、グリーン」	三〇匁
	「ビスマーク、ブラウン」	一〇匁

工具 本細工に用ふる工具は、獨用具としては篋・小刀・鋏・裁板・裁定規等を要し、共用具には押切・晒箱・選稈器等別器・染鍋・轆轤・掛枠等を必要とす。

篋 篋は、麥稈を割裂展開し、又は貼附する時に用ふ。粘土細工用撫篋・突篋に似たるもの二種あれば可なり。

小刀・鋏 小刀及び鋏は、麥稈・經木・麥稈紙・紙・眞田の鬚等を切斷するに用ふ。紙細工用のものにて足る。

裁板・裁
定規

裁板・裁定規 裁板・裁定規は、小刀と相俟つて紙・麥稈紙等を切斷するに用ふ。便宜紙・細工用のものを使用すべし。

共用具
押切

押切 押切は、本細工に於ては麥稈を切るに用ふれども、普通には麥稈の外葉・



秣等を切斷するに用ふ。其の構造は、圖に示すが如く、厚さ一寸五六分幅五寸内外長さ二尺五寸許の臺木の上に、身幅二寸五分及渡一尺許の押切刃を固著し、別にこの刃先の通過するやう縦に溝を備へたる鐵製の押切刃を取り附け、其の一端に木の柄を附けたり。これを使用するには足にて臺を押へ、右手にて柄を持ちて押切刃を開き、其の間に麥稈を入れて上より押せば容易に切斷することを得べし。

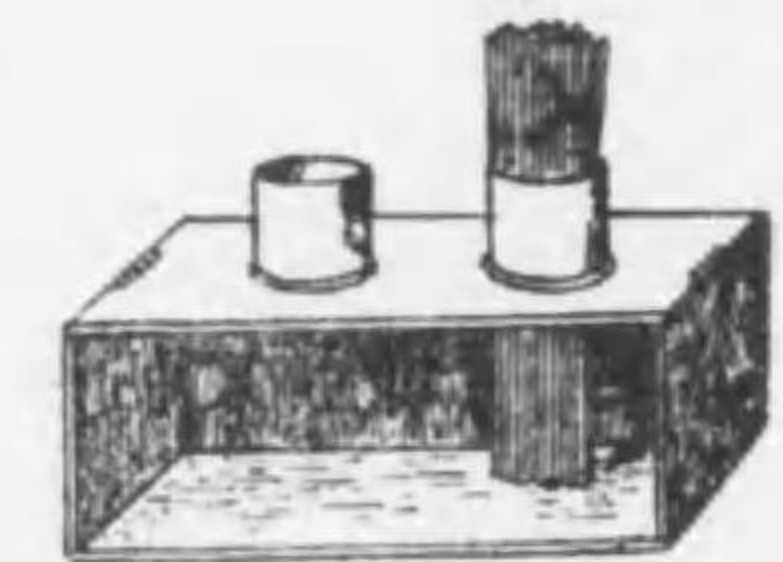
晒箱

晒箱 晒箱は、麥稈を漂白するに用ふ。其の構造及び用法は二二頁に説明せるが如し。

選稈器

選稈器 選稈器は圖に示すが如く、圓筒狀をなせる葉鐵製の篩を前方の開きたる箱の上に装置したるものにして、麥稈の太さを選別するに用ふ。篩は、多數の圓孔より成り、其の目には一號より十二號まで大小十二種あり。

即ち孔徑次の如し。



一號	五・五〇耗	五號	三・七〇耗	九號	二・〇五耗
二號	五・〇〇耗	六號	三・三〇耗	一〇號	一・七五耗
三號	四・五五耗	七號	二・八〇耗	一一號	一・五〇耗
四號	四・一五耗	八號	二・四〇耗	一二號	一・二五耗

一・二・三・四號は、二の節用にして他は一の節用なり。

これが使用法は、篩の中に麥稈を立て其の上端を撫で廻す時は、細きものは篩を通過して箱の中に落ち、太きものは器中に残るが故に、順次號を逐ふて通過せしむる時は、容易に稈の太さを區別することを得べし。番外稈と稱するものは、一號篩の上に残りて其の目を通らざるものにして、一號稈は一號篩を通りて二號篩を通らざるものなり。以下これに同じ。

等別器

等別器 等別器は、等別したる麥稈を入るるに用ふる箱なり。其の形狀は、恰も本立の如く、數個に區分せられたり。多くは杉又は樅の薄板にて作る。

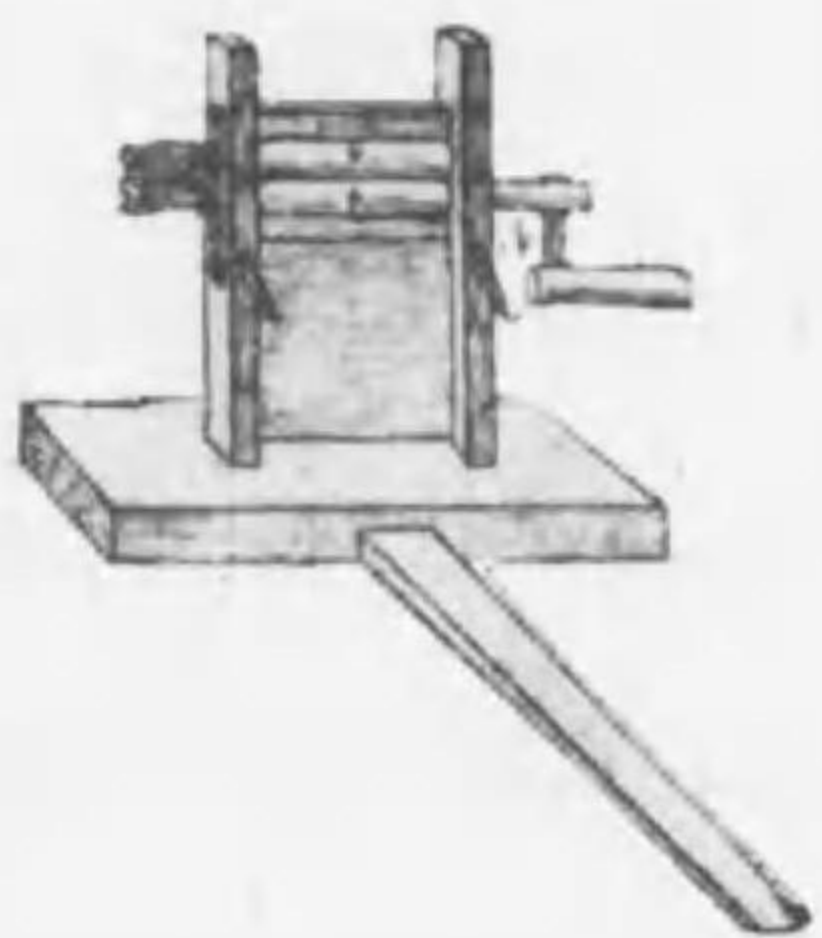
染鍋

染鍋 染鍋は、染液を入れて麥稈・經木・蔓・羊齒等を染むるに用ふ。蓋附の深き

轆轤

珐瑯鐵器又は亞鉛鐵板製の鍋を好しとす。

轆轤 轆轤は、麥稈を通じて扁平となし、又艶を出すに用ふ。其の形状には大小種々あれども、多くは圖に示すが如く、厚さ一寸餘幅五寸長さ一尺許の臺板上に、高さ七寸許の一對の柱を立て、これに長さ五寸直径



六七分許の二個の木製「ロール」を装置し、其の上下にある軸架と楔とによりてこれが緩緊を調節す。「ロール」の左端には螺旋又は齒車を附け、右方には換手を附く。又臺には幅一寸五分長さ一尺五寸許の抑木を附け、其の動搖を防げり。

これを使用せんには先づ楔によつて「ロール」の間隔を適度に締め、抑木を抑へて其の動搖を防ぎつつ換手を右廻りに回轉すれば、「ロール」は螺旋又は齒車の作用によりて互に反對の方向に回轉すべし。然れば引かんとする麥稈綿の如きものをこの「ロール」の間に挿入すれば、容易に壓展せられて後側に出づべし。時々軸受螺旋又は齒車等に油を注ぎて、摩擦を防ぎ回轉を圓滑にすべし。

掛枠

掛枠 掛枠は、専ら眞田を捲くに用ふ。其の形状は圖に示すが如く、多くは杉

又は檜にて作る。縦木は長さ二尺幅一寸厚さ六分許の角柱にして、これに長さ七寸許幅一寸厚さ二分許の横木を差し、他端には柄を設けて差木に箱入するやうにせり。差木は幅六分厚さ四分許のものに柄孔を穿ちたるものにして、こは



眞田を捲く際横木の緊縮を防ぎ、且眞田の左右に動かざるやうにするために備へたるものなり。枠は、通常縦一尺六寸横五寸なり。これを使用するには横木に差木を

箱めたる後、左より右に六列し、次に右より左に左より右に順次六列九重に捲き、二個所を藁又は紐にて括り、差木を外して枠より取り去るものとす。これを一反とし、其の長さは六十碼即ち我が約十八丈なり。

麥稈經木細工の種類

眞田

普通物

麥稈經木細工の種類 麥稈經木細工を大別して眞田・組物・貼附の三種とす。

眞田 眞田は、麥稈又は經木を編みて所謂麥稈眞田及び經木眞田を作り、以て帽子其の他の日用品及び裝飾品の製作材料とするものなり。これに普通物と變り物との別あり。普通物は編み方の簡單なるもの又は色彩を加へざるもの

變り物

菱物

平物

角物

細工物

助類

を云ひ、變り物は其の編み方の複雑なるもの又は色彩を施したるものを云ふ。又編み方に依つてこれを大別すれば、菱物・平物・角物・細工物・助類の五種となる。菱物は單に菱とも稱し、これに四本菱・六本菱・八本菱・十本菱・十三本菱等種々あれども、最も普通に編まるるものは四本菱なり。それぞれ丸菱と裂菱とあり、丸菱は展開せざる丸のままの麥稈を以て編むものにして、裂菱は展開したる麥稈にて編みたるものなり。又割に單と合せとの別あり、單は割りたる稈を一重にて用ひたるものを云ひ、合せは割りたる稈を二枚重ね合せて作りたるものなり。平物は又邊編とも稱し、三平・五平・七平等あり、又これに丸と裂とあり、裂は合せに限らる。角物は又小齒物とも書き、單に角とも云ふ。こは眞田紐の左邊又は右邊に三角錐狀の連續隆起ありて平物の變形應用なり、平物に比して其の編み方稍困難にして、普通は五角・七角の二種なれども、又三角・四角・七寢角・九角・九寢角等なきにあらず、丸のものあり又裂きのものあれども、裂は合せに限れり。細工物は、其の時々の変り打ちにして編み方の頗る複雑なる意匠品を云ふ。助類は、裂を合せて角編となしたるものにして、大助・中助・小助等あり、専ら二の節を用ふ。

組物

平編

丸編

貼附

組物 組物には、平編と丸編との別あり。平編は展開したる麥稈又は經木を縦横に組みて經緯とし、種々の模様を表はすものにして、其の形狀組織等は組織に似たり。丸編は丸のままの麥稈を以て、籠玩具の如きものを編むものなり。平編をなさんには、先づ麥稈の太さを選程器によつて一定し、任意の染色をなしたるものを開きて轆轤にかけ扁平となしたる後、其の長さを一定して使用に供するものとす。麥稈・經木共に白色又は染色したるものを、單獨に使用する場合と混合して使用する場合とあり。其の編み方には、平組・紋組・綾組等の別あり。平組は又市松組とも稱し、經と緯とが交互に上下となりて組合ひ、何れも同一の組織をなすこと全く組織の平織に同じ。紋組は、其の組方に一定の規律なく、全部の組織複雑にして、局所に目的の紋形を表はしたるものにして、組織の紋織に同じ。綾組は又網代組と稱し、經緯を二本以上浮かせ、互に連續して一定の規律ある斜紋を表はすこと組織の綾織に同じ。

貼附 貼附は、展開したる色麥稈又は經木を、厚紙若くは木工製品に貼附して、其の表面を美化裝飾するものなり。其の方法は、豫め厚紙細工又は木工を以て

素地を作りたる後、其の表面に直接圖案を畫き、これに適合する模様を色麥稈又は色經木より切取りて其の上に貼附するか、又は麥稈紙とて半紙に展開したる色麥稈を貼附し、これを厚紙細工に於ける裝飾用紙と同様に貼附するものなり。麥稈紙を切抜くには、其の裏面に直接任意の書畫を畫くか、又は別紙にて適宜の形を切抜きたる後、これを型として麥稈紙の裏面に下圖を畫き、小刀又は鋏にて切取るものとす。

教授上の注意

教授上の注意

- 一、麥稈經木細工は、農村小學校の尋常小學第三學年以上の教材として課すべし。
- 二、本細工は、農村の兒童及び婦女子の作業として適當なるものなれば、これに關する各種の知識を授け、以て農閑及び夜間を利用し、勤勞の氣風を涵養することに努むべし。
- 三、教材は、初步に於ては白若くは色麥稈を用ひて簡易なるものを作らしめ、貼方及び種々の編み方を授け、上級に於ては麥稈經木の種類、採集、漂白、染色

色等の方法をも授け、更に意匠の練習をなさしむべし。

- 四、製法を會得せしめんには、實地に示範し、これが指導を怠るべからず。
- 五、眞田に用ふる麥稈は、使用前十分間乃至一時間許湯又は水に浸し、經木は暫時水に潤ほして軟くしたる後、使用すべし。
- 六、眞田を編むに當り麥稈を繼ぐには、右方より左上方に向ひたる時其の稈上に長き稈を重ねて編み、これを左邊に於て右上方に曲げんとする際列外に出し、編製後切捨つべし。合せ及び經木は成るべく目立たざるやうに繼ぐものとす。
- 七、麥稈及び經木を繼ぐには決して同一の所に於てすることなく、必ず適當の間隔を置き、てなさしむべし。
- 八、眞田は眞直にして間隙なく、緊密に編ましむべし。
- 九、組物及び貼附に二色以上の色彩を用ふる時は、其の色の配合に注意せしむべし。

一〇、組物に於ては、組紙との連絡を密にし、竹籃細工との關係を保つべし。

教材

四本菱

教材

- 一、一、麥稈紙は、二の節又は三の節を筥にて裂き、轆轤にて壓展して艶出をなしたる後、其裏面に糊を附けて日本紙に貼附し、壓搾し、つつ乾かすべし。
- 一、二、貼附は、厚紙細工、木工及び切抜細工との連絡を圖るべし。

一、四本菱 四本菱は、四本の麥稈又は經木を以て、菱形の重複連續より成れる眞田紐を編むものにして、こは専ら製帽の材料に用ひらる。

これを編むには、先づ二本の麥稈又は經木を取り、横を上にして十字形に組み、其の交叉點を左手の拇指と食指とにて持ち、縦の下半を右手の拇指と食指とにて横の上に折り曲げ、一圖の如く二直角を三等分したる形となすべし。斯くて右端の稈を今折り曲げたる稈の右邊に沿ふて左上方に曲げ、左方より第二程に並行せしむること二圖の如くし、この時に於ける最右稈を更に今折り曲げたる稈即ち左隣の稈上に曲げ、左より第二程の後を潜りて左方に出だし、左端の稈に並行せしめて左右各二程とすること三圖の如くすべし。次に右端の稈を其の左稈の右上邊に沿ふて左方に曲げ、他の二程の背後を通じて左方に出だすべし。

これ迄は、所謂編み初めにして中央の二程は並行し、左右は一本づつ又狀をなすこと四圖の如し。次に今左方に出だしたる稈を左手にて左より第二程の左下邊に沿ふて手前に曲げ、右上方に向はしむ、更にこの時の最左稈を其左上邊に沿ふて右方に曲げ、他の二程の背後を通じて右方に出すべし。斯くて前に曲げたる一程は、左より第二程となり、後に曲げたるものは右端に出づべし。次に今右方に出したるものを、其の左隣の稈の右下邊に沿ふて手前に曲げ、左右各二本づつとして並行せし



めたる後、この時に於ける右稈を其の

右上邊に沿ふて手前に曲げ、他の二程の背後を通りて左方に出す時は、前述の如く中央に二本左右に一本づつとなる。これを反復して、長く編製すべし。編製の短くなりたる時は、其の一端が右に出で左方に向つて折り曲げられたる時、其の上に新しき稈を重ね、この時に於ける最右稈を其の上に折り重ねて左方に出すべし。而して補足したる稈を右方に曲ぐる際、不用の稈は左方の列外に出し、

三平

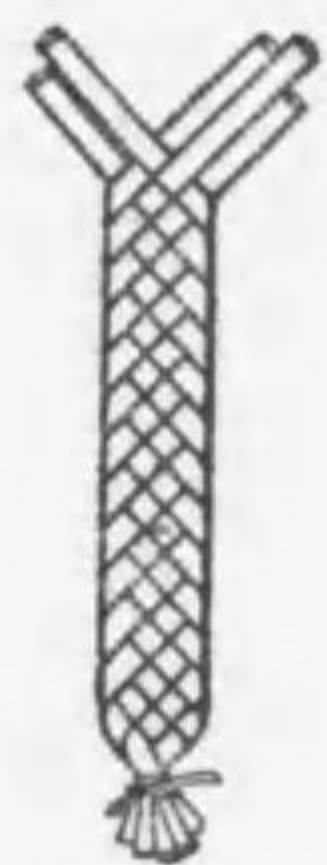
新しき稈を以て編製するものとす。勿論要は完全に接続し美感を損せざれば足るを以て便宜の所に於て補綴するを妨げずと雖も、常に織ぎ目が裏に顯はるるやうにすべし。列外に出したる鬚は、編上後爪又は缺にて切斷し、掛棒に捲きて六列九重とし緊束して一反となす。



二、三平 三平は又三邊と稱し、三本の麥稈を以て編製する平物なり。其の編み方は先づ三本の麥稈を根許にて括り、其の先を中央と左右一本づつとに擴げ、左手の拇指と食指とにて其の下端を持ち、右端にある稈を右手の拇指と食指とにて中央の稈上に折り曲げ、左上方に向はしめ以て左端の稈に並行せしむ。次に今曲げたる稈を右手にて持ち、左手の拇指と食指とにて左端の一稈を右端の稈に並行するやう中央の稈上に折り重ね右稈に並行せしむ。斯くの如くして交互に手を持ち換へ、左又は右の稈を中央の稈上に曲げ、右又は左の稈に並行せしむ。これを反復して、次第に長く編製すべし。編程の短くなりて其の用をなさざる時は、一端の左方に出でたる時、其の上の新しき稈を重ねて編み、鬚を左方に出すべし。

五平

し。斯くて編製後鬚を切り、掛棒に捲くこと四本菱に同じ。



三、五平 五平は又五邊と稱し、其の編み方は三平と殆んど同様なれども、其の稈の多き點異り。これを編むには先づ五本の麥稈又は經木を根許にて括り、これを扇形に擴げて右方は三本、左方は二本となし、左手の拇指と食指、中指とにて持ち、右手の拇指と食指とにて其の最も右端なる稈を左隣の稈上に折り曲げ、其の左の稈の背後を通じて左上方に向はしむる時は、左方は三本となる。次に紐を右手の拇指と食指とにて持ち、左手にて左端の稈を其の右隣の稈上に曲げ、先に曲げたる稈の背後を通じて右上方に出だし中央に位せしむべし。然る時は右方は三本となり、左方は二本となる。次に左手にて持ち、右方の稈を右手にて左上方に折り曲げ、一抑一潜して中央に位せしめ、紐を右手に持ち換へ、左方の稈を右上方に曲げて中央に出し、常に三本となれる方の稈を右上方又は左上方に曲げ、一抑一潜して中央に出し、これを反復して次第に編製すべし。編程を繼ぐには、左上方に曲げたる時、新しき稈を其の上に重ねて織ぎ、鬚は左邊に出すべし。

七平

四、七平 七平は又七邊と稱し、七本の麥稈又は經木を以て編製する眞田なり。



其の編み方は、五平と略、同様なり。五平に於ては、右端又は左端の稈を斜上方に折り曲げて左上方又は右上方に出す際、一稈の背後を通過するのみなれども、七平にありては二本の稈の背後を通過して一方は四本他方は三本とする點異なるのみ。

五角

五、五角 五角は五平の左邊に三角錐狀の突起を連続したるものにして、こは



五平の編製に於ける左稈を左手の拇指と食指とにて持ちたるまま左後方より少し右前に廻はしつゝ右方に曲げ、右隣の稈上に直角に重ねると共に稈を左手の

拇指と食指とにて抑へ、他の二稈の背後を通じて右方に出し、以て圖に示すが如き三角錐狀の突起を作るものとす、其の他は、五平の編製と全く同じ。

七角

六、七角 七角は、七平の左邊に連續的三角錐を隆起せしめたるものなり。

丸籠

七、丸籠 最短五寸最長一尺幅三分許の經木四十本を二十本づつ二組に分ち

被蓋角籠

て交、縦横に組み、方七寸許の平組又は紋組となすべし。但組合はされたる縦は何れも皆正方形の二つの對角線に並行せしむべし。而して其の中心方四寸許を底として其の周圍を一寸五分許上方に曲げ、四隅は他の部分と同様に平組又は紋組として一様の組織となしたる後、長さ一尺八・九寸幅二分五厘



厚さ五厘許の縁竹二本を圓形に曲げて括り、内外より縁を挟みて不用の經木を剪定し、長さ笠菅を以て縁を捲くものとす。縁を捲くには、縁竹の下邊に沿ひ三分許隔てて孔を穿ち、これに笠菅を通ほして左廻左卷に縁竹を捲き、側に取り附くるものとす。これを組むには、縦と横と異なる色經木を以てするも可なり。

八、被蓋角籠 實は、最短五寸最長一尺幅一分五厘許の經木七十二本を三十六本づつに分ちて綾組に組み、長さ八寸五分幅六寸許の長方形を作るものとす。この際、各の縦は四邊に四十五度の傾斜を保たしむるを要す。次にこれを四周より一寸四五分許隔りたる所より上方に折り曲げて角底となし、四隅は長邊の組織の如く編製すべし。従つて其の合せ目は多少他の部分と異なる組織を呈す



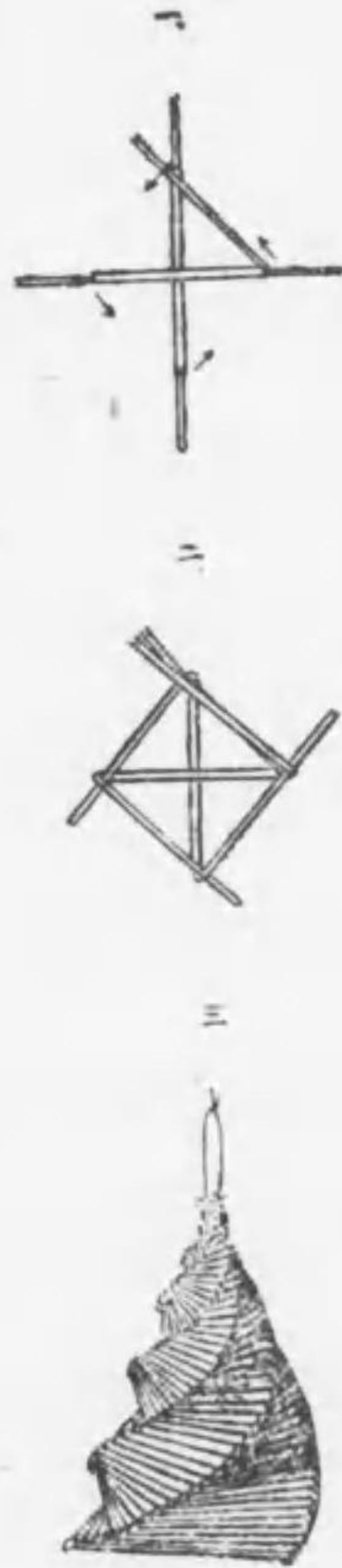
るものなり。斯くて長さ一尺九寸幅二分厚さ三厘許の縁竹二本を、長邊五寸五分短邊三寸六七分許の矩形に曲げて括り、これを以て側を内外より挟み、不用の部を切捨てたる後、縁竹の下邊に沿ふて二分五厘許の距離に孔を穿ち、これに笠管を通ほして縁を美しく捲くものなり。

蓋は、實に能く適合するやう實と全く同様に作るものなり。

蟲籠

九、蟲籠

蟲籠を作るには、長くして丸き麥稈數十本を用意し、其中より長さ四寸許の稈二本を切取り、一本を他の中央に通ほして十字形に組みたる後、其の先端に他の稈を一本づつ挿し、特に其の中の一には二本の稈を挿してこの所より組み初むるものとす。



即ち先づ一圖の如く二本の中の一を左

手提籠

一〇、手提籠

廻に曲げて其の隣の稈上に重ね二等邊直角三角形を作りたる後、順次に抑へられたる稈を左廻に曲げて二圖の如き正方形の基底を作り、これよりは前と全く同様に稈を外より曲げて底の隅の内側に入れ、側となるべき稈は左廻に僅か捻れて重るやうにすべし。これを反復して次第に組み、稈の短くなりたる時は其の中に新しき稈の先を挿して継ぎ、稈と稈との間の餘り透かざるやうに組むべし。而して底より一・二寸上に於て稍太くし、それより漸次に細めて左廻の螺旋形となし、最後は四本の稈を回旋形に抑へて挟み、解けざるやうにすべし。底には四角形の畫紙又は「ボール紙」の如き厚紙を、十字形に組める麥稈の上に挿入し、上端には紐を通ほして吊すやうにすべし。

手提籠を作るには、先づ同じ太さにして長さ色麥稈數十本を用意し、其の中の二十四本許を一端にて固く括り、其の先端を放射狀に擴げて括り目を上に出し、此方側の稈一本を取りてこれを右方に曲げ、右隣の一本を抑ふべし。次に今抑へられたる稈を右方に曲げて其の右隣の稈を抑へ、斯く順次に抑へられたる稈を右方に捻りて其の右隣の稈を抑へ、左廻に組みて直徑二寸許の

外圓底を作りたる後、漸次に側を組み、圖に示すが如き形状となすべし。而して側を組み時は底を立て左方の程を右方に曲げ、其の右隣の程を潜りて外に出す際右隣の程と共に右に捻りて右上方に曲げ、次に右方に向へる右隣の程を更に其の右隣の程にて抑へ、外に出す際前と同様に右に捻りて右上に曲げ、他の一本は右方に出すべし。これを反復して外面は菱形を呈するやう程を摘みて右



方に捻り、菱形の連続より成れる縞が左下より右上に螺旋形をなして上り、其の間を右に曲げたる程にて直線的に連絡するが如き組織となすべし。組程の短くなりたる時は適宜の所に於て継ぎ足し、縁は特に口邊を一周する程を添へて外に出でたる程にて捲き、不用の部分に切捨つべし。

手は、縁に麥稈を通ほして三平三角組又は把手組となしたる後、能く絲にて括り解けざるやうにすべし。

側の組み方と同一の方法によりて、蛙鳩虎等の形を組み、三角組又は把手組の手足を附けて玩具を作ることを得べし。

三角組

●●●三角組 三角組は、籠の手となし又細工物を作るに用ふ。こは二本の麥稈又は經木を互に百二十度の角度を保つやうに重ね、左を上右を下とする時は右廻



に、この反對に左を下右を上とする時は左廻に程に沿ふて折り曲げ、常に正三角形を失はざるやうに組むものとす。こは又螺旋狀に捲きて花形となし、裝飾に用ひらる。

把手組

●●●把手組 把手組は、専ら籠の手に用ふ。こは六本の麥稈を根許にて固く括りたる後、これを左手に持ち、各の程を放射狀に擴げて此方側の一本を右手にて半



左捻にして左廻に其の右隣の一本を抑へ、次に今抑へたる一本を左捻にして右方に曲げ、右隣の二本即ち先に右方に曲げたるものと其の右隣の一本とを抑へ、これより

順次同様に左廻に二抑して圖の如き螺旋狀の紐を組みものとす。これを組むには、心に細き針金を入れ、成るべく二色以上の染程を以てするを好しとす。

●●●絲卷 絲卷は、方二寸許の厚紙より圖に示すが如き形状を切り取りたる後、

其の周邊を一周する幅三四分許の色紙にて縁貼し、適宜の模様を表はしたる麥

糸卷

葉書入



稗紙を其の表裏に貼りて裝飾するものなり。透模様を施さんとする時は、麥稗紙の裏面に任意の色紙を貼附するを好しとす。

一二、葉書入 葉書を入るる箱を作るには、先づ厚紙を以て底の大き三寸に五寸深さ一寸許の箱を作り、目貼及び縁貼上貼をなして、底に指頭を入れるべき直径五分許の圓孔を穿ち、別にこれに能く適合するやう一分許大きく作りたる被蓋に手掛を附け縁貼をなしたる後、其の表面には、經木又は木理紙を貼り、側の深さより二分許長き麥稗紙を其の四周に貼りて上面に二分許出し、四隅を直角に切りて四方より折り曲げ表面に貼附して合せ目を止となすべし。而して其の表面には、麥稗紙の枠を貼り更に色麥稗又は色經木を切抜きて模様を施さしむべし。又表面には、麥稗若くは經木を以て作れる平編を貼り詰むるも可なり。

第五章 藁細工

意義

目的

材料

主要材料
藁

補助材料
日本紙
紙の反古

布片

藁細工は、藁を以て繩草履草鞋等の日用品を作る細工なり。

目的 本細工は、其の製作法を知らしむると共に材料及び工具に關する知識を授け、兼ねて副業思想を涵養し、勤勞を好む習慣を養ふを以て要旨とす。

材料 藁細工の主要材料には、藁を用ひ、補助材料には、日本紙の反古紙・布片等を使用す。

藁 藁は、禾本科に屬する一年生の草本稻の莖にして、其の長さ三尺許なり。莖は中空にして細長く、數節を有す。節毎に一枚の葉を互生し、葉には縦に並行せる葉脈あり、其の下部は葉鞘によりて莖を包む。

こは、繩草履草鞋・蓑・塚筵・吹俵等を作り、牛馬の飼料に供する外、紙料・肥料・燃料等に用ひ、又屋根を葺くに用ふ。

日本紙の反古紙 日本紙の反古紙は、草履の鼻緒に捲き附けて摩擦を防ぐに用ふ。

布片 布片は、草履及び草鞋の破損摩擦し易き所に用ふ。綿布又は絹布の襷褌を使用すべし。

藁選擇の要件

地方的手工教材

藁選擇の要件 本細工に用ふる藁は、次の要件に適合するものたるべし。

- 一、成るべく新しきものたること。
- 一、色澤の鮮麗なるものたること。
- 一、長くして質の強靱なるものたること。
- 一、節は黒色を呈することなく、能く乾燥したるものたること。

藁の處理法

藁の選り方

藁の選り方 藁の葉鞘即ち袴を除去せんには、先づ小束の末端を両手に持ち、根許を柱又は地面に亂打したる後、左手には先端を持ち、右手を以て其の袴を除き、直徑四寸内外の小束となすべし。

俵筵、吹等の製作には、選りたるものを直に使用すれども、繩草履、草鞋、蓑等を作るには更に能く打ちて柔軟ならしむるを要す。

藁の打ち方

藁の打ち方 藁を打つには、選りたる藁束の根許より四五寸許隔りたる所を強く括り、霧を吹きて僅に潤ほしたる後、藁打臺の上に横たへ、右手に藁打槌を持ち、左手にて藁を廻はし、つつ内外本末を能く反復して丁寧な打ちものなり。槌

實子の抜き方

は、時々左手に持ち換へて使用するを好しとす。

藁は、其の用途によりて多少打ち加減を異にすれども、熟打する時は、能く久しきに耐ふるものなり。

實子の抜き方 實子を抜くには、藁を能く揃へ、根許を確と抑へて、穂に接續する實子の先を五六本づつ手に捲き附け、強く引きて節の所より抜き取るものなり。

工具

工具 藁細工に用ふる工具は、獨用具として掛臺、足型等を使用することあれ

共用具

藁打臺

ども、是等は共に足にて代用することを得れば別に準備するの要なく、共用具として藁打臺、藁打槌、掛棒、緒通、鋏等を要す。

藁打臺 藁打臺は、藁を打つに用ふる臺にして、石又は木臺を使用す。石は花

崗岩の丸石を可とし、これに代ふるに便宜敷石又は石段を利用するも可なり。木臺は、太き堅木の木口を使用す。共に土中に半分許埋めて動かざるやうにすべし。

藁打槌

藁打槌 藁打槌は、通常櫂を以て圖の如き形狀に作る。胴は、長さ直徑共に四

掛棒



寸内外にして、これに長さ四寸太き上端一寸二分下端即ち胴に接続する所一寸許の柄を附けたり。こは片手にて持ち、藁打臺と相俟つて藁を打つに用ふ。

掛棒 掛棒は、麥稈・經木細工用の掛棒と同様の構造にして、長さ二尺五寸幅一尺二寸を定めとす。こは専ら繩を捲きて束ぬるに用ふ。三十卷を以て一束とす、其の長さは通常二十五間なり。

緒通



緒通 緒通は、草履の鼻緒を著るに用ふ。長さ五六寸幅四分許にして、其の形状は圖に示すが如く組針に似たり。即ち下部は紡錘狀をなし、上部は二つに割り、更に四十五度に切りて鼻緒を挟むに便す。

鉄

鉄 鉄は、藁繩等を切るに用ふ。長さ五寸許の稍、堅牢銳利なる唐鉄を好しとす。

教授上の注意

教授上の注意

一、藁細工は、其の製法稍、機械的にして工夫創造の餘地なく、所謂陶冶的價値

には富まざれども、實用的副業的價値大なれば農村小學校の尋常小學第五學年以上の教材として課するに適す。

二、本細工は、何れの地方に於ても相當に幼時よりこの技能に習熟せるものありて、實力に著しき差等あるを常とするものなれば、特に其の技術の上達を圖らんよりは寧ろ材料に關する基礎觀念を授け、繩草履草鞋等の如き簡易なる製作をなさしむる位に止むべし。

三、本邦の農家は古より農閑餘力を以て繩草履草鞋・蓑・塚・筵・吹等の如き藁加工品を製造せしが、今や其の産額は自家用を除きて年額一千万圓に上り、朝鮮支那西伯利亞等に輸出せらるること年々二百萬圓を算し、然も尙ほ其の需要過多にして供給不足の状態にあれば、農家の副業として本細工が前途頗る多望なることを知らしむべし。

四、材料を處理するには成るべく屋外に於て爲さしめ、これが實修には教室の机を片寄するか又は特に廣き室を選びて、圓陣となし、若くは廊下に並行陣を作りて製作せしむる等便宜の方法を採るべし。

- 五、處理したる材料を各兒童の家庭より携へしむる時は、比較的藁屑の散亂を少からしめ且教授の進捗を圖ることを得べし。
- 六、繩は藁細工の基本にして、其の撚加減は質の強弱及び外觀の美醜と相俟つて製品の品質を左右するものなれば、特に其の絢ひ方に注意し、然に過不足なからしむべし。
- 七、これが教授に當りては、其の製法を示範し、充分直觀會得せしむべし。
- 八、製品は總べて整一なるを要し、藁の繼ぎ方は勿論形狀の大小細太等整然として統一あらしむべし。
- 九、製品は成るべく實用に供せしむべし。
- 一〇、本細工は、兎角藁屑散亂し、塵煙起り易きを以て、特に室内の換氣法に注意し、不潔に陥らざるやう充分に後始末をなさしむべし。又時宜によつては、室外に於て製作せしむるを好しとす。
- 一一、特に農業との關係を親密にすべし。
- 一二、便宜麻繩及び棕櫚繩の絢ひ方、竝に籐草履の作り方を授くべし。

教材

藁薄

教材

一三、この細工は成るべく課業の終に配當し、二時間連続して授くべし。

一、藁薄 藁薄を作るには、選りたる藁二・三本を取り、根許を揃へて左にし、左端より八寸許の所を左手の拇指と食指とにて、それより右に四寸許隔りたる所を右手の拇指と食指とにて持ち、同時に同方向に折り曲げて三角形となし、一圖の如く根許の方を向側とすべし。次に其の交點を左手にて持ち、右手を以て交點より藁を向ふに曲げ右に捲きて二圖の如く三角形の中線上に導きたる後、三圖の如く交點より兩端を向ふに折り曲げ、共に折目より四寸許の長さを取りて根



許に二回捲き其の先を四圖の如く最も多數集りたる稜

の向側に出すべし。而して不用なる末端は、鋏にて切り捨て五圖の如き形状となすべし。

把藁

二、把藁

把藁は選りたる藁五六十本を根許より四・五寸許隔りたる所にて強



く括り、其の何れかを中心より圖の如く四方に折り曲げて、上より一寸許の所を實子又は針金にて固く括りたる後、長さ三寸許の所より切揃ふべし。

實子帚

三、實子帚

實子帚は、三、四百本の實子を五組に分ちて能く其の穂先を揃へ、中



央より稍下部を實子又は紐針金にて強く括りたる後、圖の如く先づ二把を括り更に一把を加へて三把となし、これを排べて適當の距離を括り、斯く順次に

一把づつ加へて全部を一括すべし。この際穂先が掃くに便なるやう所謂帚狀に整ふるを要す。次に柄を實子又は針金にて二、三個所括り、上端の括より一寸許残して切り揃ふべし。括るに用ふる實子は、豫め能く水に潤ほして切れざるやうにすべし。

繩

四、繩

繩には、細太種々ありてそれぞれ用途を異にすれども、其の緋ひ方は殆んど同様なり。凡そ繩の外見を美しくせんには、餘り能く打たざる藁を以て緋ひ、強靱にして抗力の大なるものを得んには、熟打せる藁を以て緋はざるべから

普通繩

す。又普通の繩は右緋なれども、紐鼻緒に用ふるもの及び三つ繰繩は左緋にするを通則とす。

普通繩 普通の繩は、三本乃至五本の藁を二つ折にするか、又は六本乃至十本の打藁を根許にて括りこれを二つに等分したる後、左右の掌に僅唾液を附けて潤ほし、左廻に燃を掛けつつ右緋に緋ひ初むるものとす。斯くて長さ三四寸に至らば、其の元を足又は膝にて抑へ、繩を緊張しつつ次第に緋進し、藁の細く短くなりたる時は、適量の藁を補足して緋ひ次第に背後に繰り出して、遂に數十尺の長さに至らしむべし。

細繩 細繩は、二本又は四本の藁を以て緋ひたる細き繩なり。

太繩 太繩は、多量の藁を以て緋ひたる太き繩なり。

擦繩 擦繩は、以上各種の繩に燃を掛け、藁層にて滑に能く磨きたる繩なり。

實子繩 實子繩は、穂先を切捨てたる實子六本を取り、三筋づつ左右に分けて

緋ひ、充分に燃を掛けて磨き磨きては緋ひ、實子の短くなりたる時は繼ぎ足して、列外に出でたる不用の實子は、缺にて切り捨て、遂に數丈の長さとすべし。こは

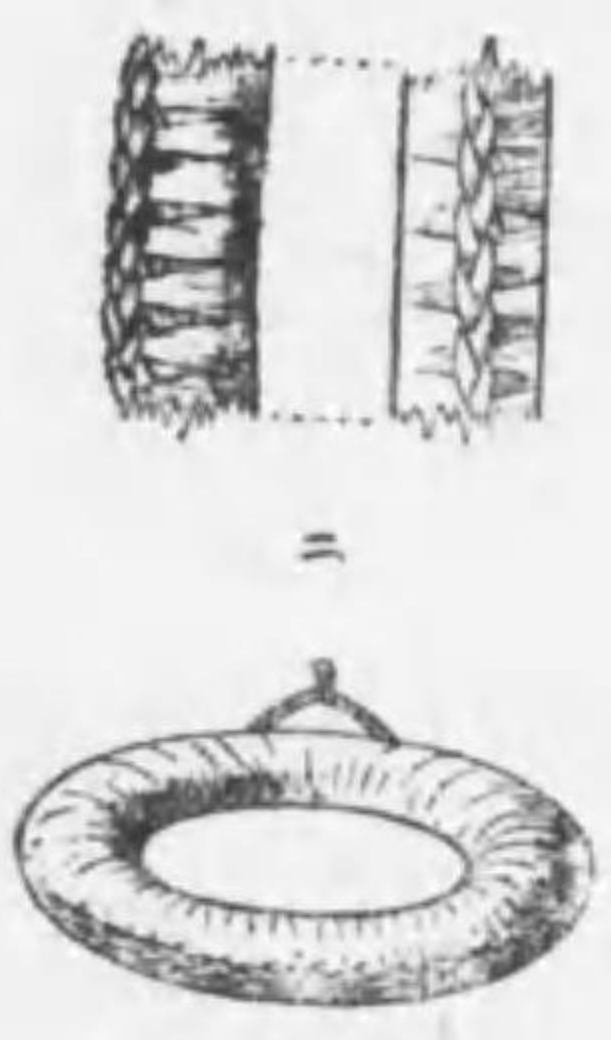
細繩
太繩
擦繩
實子繩

三線繩

主として漁網を作るに用ひ、其の需要極めて多し。
 ●三線繩 ●三線繩は、左鈎にしたる繩の谷即ち燃藁と燃藁との間に、適量の藁を挟みて右然に左鈎したる繩なり。紐及び特に強力を要する所に用ふ。
 繩は通常三十尋二十五間を以て一束とすれども、又五十尋を以て一束とすることあり。何れも堅密にして、細太なきを好しとす。

釜敷

●五釜敷 ●釜敷は用途によりて其の大きさ一定し難けれども、直径凡そ七八寸太さ一寸二分乃至一寸五分許のものを適度とす。これを作るには先づ選りたる藁を環状に捲きて五六個所を括り大體の形を作るか、又は心に竹の輪を入れ其の外部に藁を被ひて概形を整へたる後、環を立て兩膝にて挟み長さ一尺許の選りたる藁五六本を取りて、環の内部より外部に向つて掛け、組み目の外方即ち手前に表はるるやう右方の藁を左下に左方の藁を右下に抑へて、右を下、左を上にして組み、其の上に便宜鉛筆を載せて押へとなし、次に第二の組藁を取りて前述の

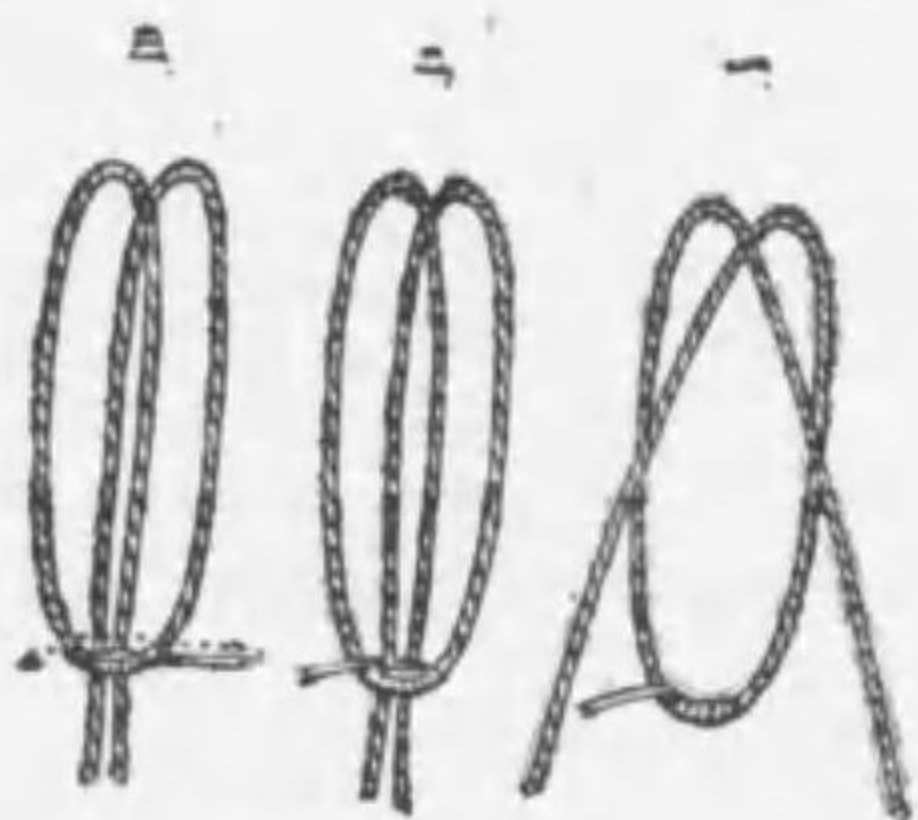


草履

如く右を下左を上を組み、先に鉛筆にて抑へたる藁を曲げて鉛筆の上に右を下左を上にして組み、第二の組藁を抑へて其の端を列外に出し環の一部に編入すべし。これまでは編み初めなり。次に第三の組藁にて第一組藁の餘端を抑へて右下左上となし、其の上に第二組藁を左右に能く締めて、右を下左を上として載せ、第四の組藁を以て其の端を抑へ右下左上となしたる後、第三組藁の左右に出でたるものを能く締めて右下左上となして載せ、第五組藁を以て其の端を抑ふるものとす。斯くの如く一つの組藁を以て右下左上に組むこと前後二回にして編製列外に出し、これを反復して同一の形式に組み、環を一周したる後、最終の藁端を先に鉛筆にて抑へて生じたる孔に挿入し何れも一様の組織となすべし。便宜細繩又は三平に組みたる藁にて手を附け、懸くるやうにすべし。

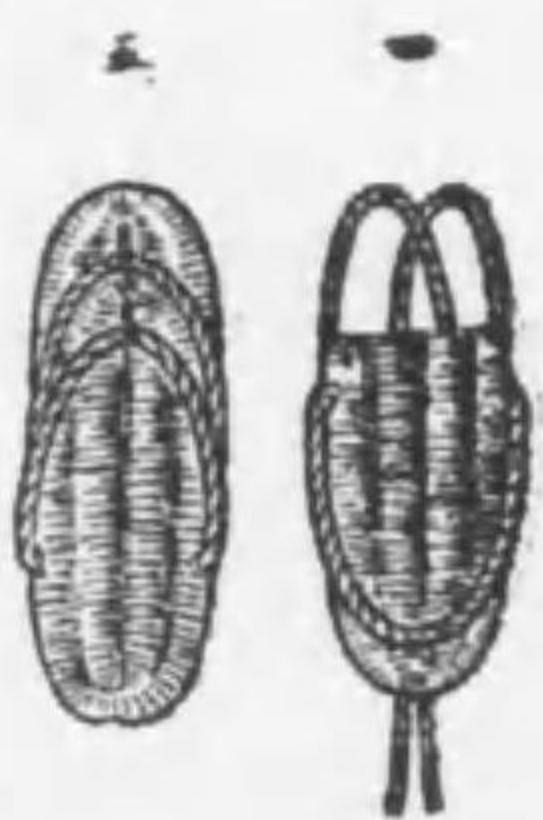
●六草履 ●草履を作るには、長さ約五尺許の普通の擦繩を縦繩（心繩とも云ふ）となし、兩足の拇指に掛けて一圓の如く兩端を緩め、四五本の打藁を取りて根許を左とし縦繩の中央部一寸許に並行せしめ、他端を縦繩に左巻して左方に出し、縦繩の兩端を左右組違にしたるものを其の上に乗せ、左方に出でたる編藁を右方

に曲げてこれを抑へ、右端の縦繩を潜りて右方に出でたる編葉を左方に曲げて右端の縦繩を捲き、前と反對に中央の縦繩二本を潜りて左方に出すこと二圖の如くすべし。次にこれを裏返して三圖の如く表裏を組み換へ、縦繩を足に掛け直すものとする。斯くて右方に出でたる編葉を右端の縦繩に捲きて背後より中央に出し、一つ置に抑潜して左右の縦繩を捲き、頭部の形狀を作りて幅約三寸に至らば、それより廣くせざるやうに編製すべし。而して製作中は常に左手の食指と中指、無名指との三指を裏面より縦繩の間に押し、編葉を締めつつ右手の拇指と食指、中指とにて作成するものなり。編葉の短くなりたる時は、中央に於



て四五本の葉を補ひ、其の根許を裏面に出して作るものとす。この際編葉の根許を右又は左の縦繩の背後より潜らせて、中央背後に出すを便利とす。形狀の大小によりて多少の相違あれども、普通の草履は頭部より四寸五六分許の所に於て横緒を附くるものなり。

横緒を附くるには、編葉の右方に出でたる時、七八本の葉を取り中央下部にて二つに折り曲げ左端の縦繩に掛けて左衽にし長さ八寸許となしたる後、四圖の如く曲げて本末を二つに分ち、先の方を右縦繩の上にして編み根許の方を裏面より第一縦及び第二縦の間に通はして中央背後に出すべし。斯くて先に右方に出したる編葉にて横緒の右方を左巻に捲き縦繩に括りて編み、左方に於ても



同様に適量の葉にて右巻に捲き縦繩に括りて左右を對稱となし、更に編みて全長の七寸許となりたる時、特に其の幅を狭めて末尾を圓くしたる後、縦繩を足より外して草履を左手にて抑へ、中央の縦繩を交互に引きて能く末尾を締め、次に槌にて表面を靜に打ち均らし、葉屑にて横に磨き、裏毛を鋏切して鼻緒を著ぐるものとす。

鼻緒を著ぐるには外に出でたる縦繩の上半分を切り捨て、頭端より五分許の所に緒通を刺し、長さ一尺許の細繩を縛ひて二つに折り曲げ、其の曲部を緒通の上端に挟みて裏面に通はし、縦繩の端を其の中に入れて強く引き締めたる後、長

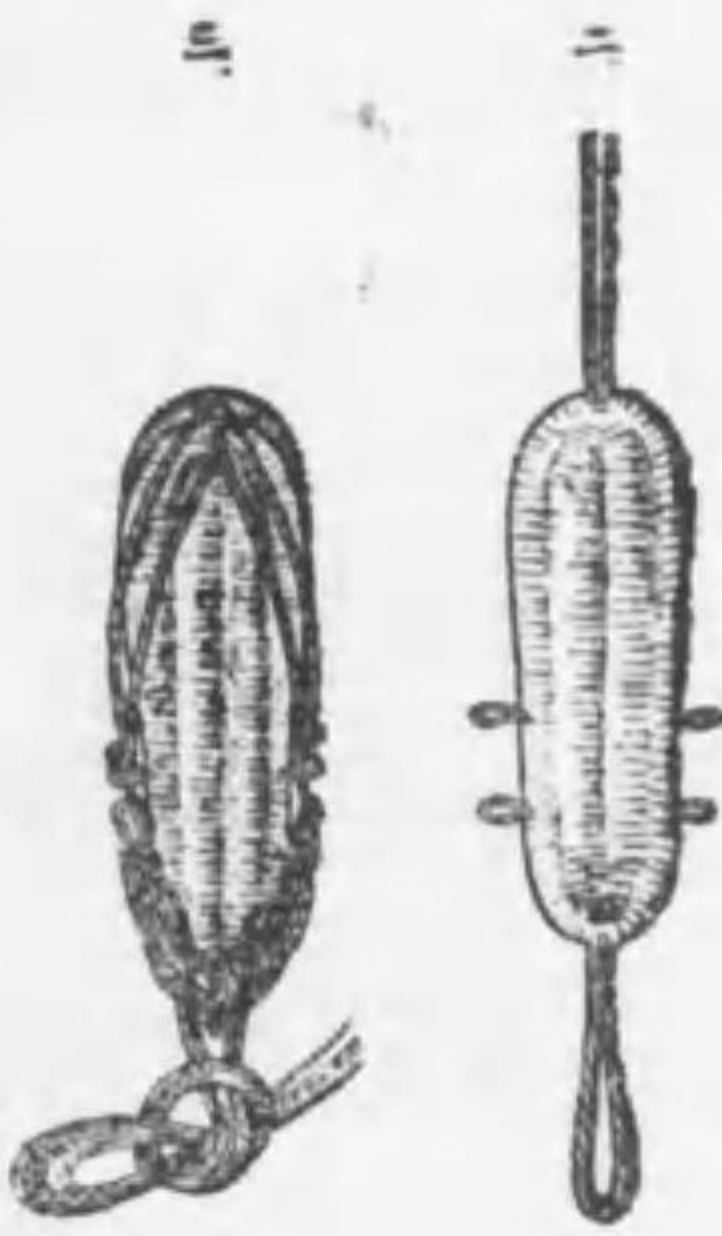
さ五六分許左、綯にして二つに分ち、これに横緒の中央を挟みて内側のものを外に捲き、横緒の下に導きてこれを外側の細繩にて抑へ、外側より内側に排べて横緒に捲き、次に横緒を捻りてこれを緒通にて支へ、鼻緒を綯ひて五六分許の長さとなし、先に通ほしたる鼻緒の二分許後より裏面に通ほして、先の縦繩の一端と結び餘端を切り捨つべし。横緒及び鼻緒に紙を附くるには、豫め藁を紙にて捲きたる後綯ふものとす。同様にして、同じ大きさのものを二つ作りて一足となすこと五圖の如くすべし。

草鞋

七、草鞋 草鞋を作るには、先づ四本の打藁を以て綯ひ兩端を漸次に細くしたる長さ一丈許の縦繩に捫りを掛け、能く擦りて滑にしたる後、中央より折半して左右兩足の拇指に掛け、草履を作りたる時と同様に曲げて約五尺許を縦繩となし、他を鼻緒となすべし。而して草履の場合と同じく縦繩の中央に打藁を捲き、其の上に右より第二縦及び第三縦を排べて載せ、編藁を以て抑潜すること各二回にして中央より出し、更に交抑潜して編進するも可なり。然れども通常は一圖の如く數本の打藁を縦繩の頭部に直角に載せ、其の先を裏に曲げて根許を右



より左に抑へ、左方の縦を捲きて右方に導き、藁の他端を潜りて右方の縦を捲き表面に出したる後、二本の鼻緒を縦繩の上に排べて載せ、其の上を先の編藁にて横に抑へ、左方の縦を捲きて右方に導き、右より第三の縦を潜りて他端と共に中央に出し、編製組織中に入れて草履と同様に編むものとす。而して頭部の幅は二寸七八分許を適度とし、それより僅に狭めて二寸六分許となし、頭端より四寸許の所にて二圖の如く左右に乳形を附くべし。乳形は鼻緒を通ほして草鞋を足に穿くに用ふるものにして、編藁の左若くは右に出でたる時、適量の藁に拵を掛けて捻り、長さ七八分許となし、更に他方にも相對して同様の乳形を作り、其の次に編みたる藁の一部を以て乳形の根許を左方は右卷に右方は左卷に括るものとす。次にこれより一寸二三



分許隔りたる所に更に左右一對の乳形を作り、次第に末尾を丸めて全長七寸五分許となりたる時、編藁を中央に出し、足より縦繩を外して右

方のものを左方のものの中に通ほし、前と反對に左右の拇指に掛けて能く締め、踵の入るやう稍、内圓となしたる後、中央に出でたる藁を以て長さ一尺五寸許の細繩を綯ひ、これを滑かに能く擦りて縦繩の脰を向ふに抑へ、縦繩の耳即ち尾繩を二つながら右足の拇指に掛けてこれに七八分許細繩を捲き、其の先端を頭部に向けて後緒に並行せしめ、其の上を捲きては尾繩を滑らしむること二三回にして、細繩の末端を引きて後緒を締め、餘繩を切り捨つべし。同様にして更に同じ大きさのものを作り二個を以て一足となす。斯くて鞋面を打ち均らし、藁屑を以て能く磨き、毛を切ること草履に同じ。兎角前後の兩端は破れ易きものなれば、各要所には布片を混入して編み、破損と足擦とを防ぐを好しとす。

草鞋の鼻緒を著げるには、後緒を揉みて附根より表に折り曲げ、左右に開きて後部の乳形を通ほし、鼻緒を一寸許左綯にして左右に分ち、前部の乳形に通ほして更に後緒に通ほし、其の端を内部に出して足に括るものとす。

地方的手工教材 終

附 録

材料の概價

品名	要項	數量	價	額	用途
防已	皮を除きたるもの	一貫	一五〇	一五〇	蔓細工用
防已	漂白したるもの	一貫	二五〇	一五〇	蔓細工用
木通蔓	漂白したるもの	一貫	一八〇	一八〇	蔓細工用
籐	皮	一丈	一	一	蔓細工用
籐	籐	一丈	一	一	蔓細工用
漂白粉		一磅	一五	一五	蔓・麥稈細工用
硫黃		一磅	一〇	一〇	蔓・麥稈細工用
大羊齒		千本	三五	四〇	羊齒細工用
小羊齒	長さ三尺内外のもの	千本	六〇	一〇〇	羊齒細工用
苛性曹達		一磅	二〇	二〇	羊齒細工用
苛性加里		一磅	八〇	八〇	羊齒細工用

附 録

選 等 轉 掛 藁
程 別 器 器
打 槌 梓 輻 器 器

— — — — —

三〇〇
二〇〇
八〇〇
二〇〇
二五

麥 程 經 木 細 工 用
麥 程 經 木 細 工 用
麥 程 經 木 細 工 用
藁 細 工 用

大正七年五月十日印刷
大正七年五月十五日發行

地方的手工教材 全



定價壹圓參拾錢

著 作 者 伊 藤 信 一 郎

發 行 者 兼 印 刷 行 者 東 京 市 日 本 橋 區 本 町 三 丁 目 十 七 番 地 金 港 堂 書 籍 株 式 會 社

代 表 者 原 亮 一 郎

印 刷 所 東 京 市 牛 込 區 榎 町 七 番 地 日 清 印 刷 株 式 會 社

發 賣 所

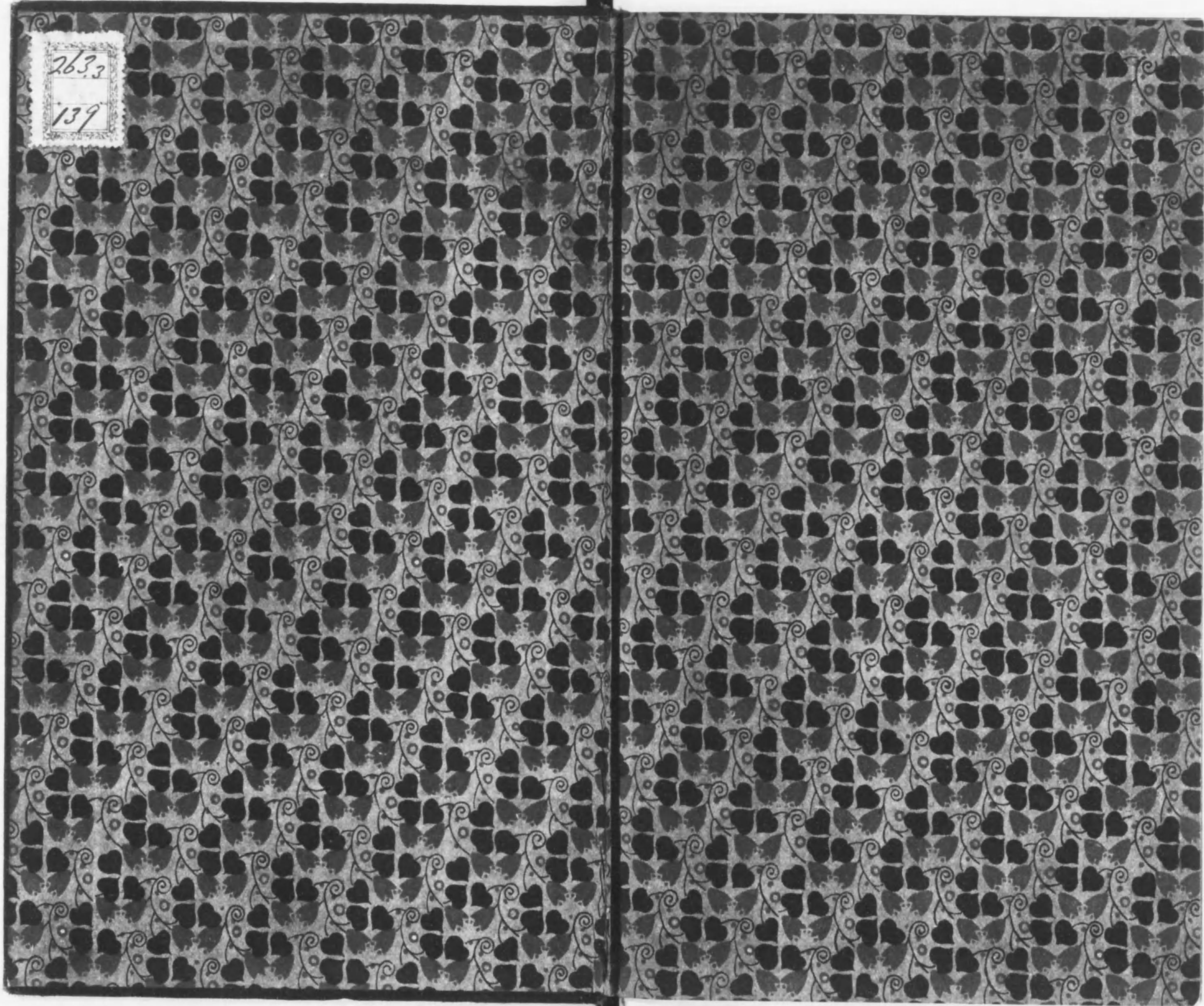
東 京 市 日 本 橋 區 本 町 三 丁 目 十 七 番 地

振替貯金口座
東 京 八 八 一 五 番

金 港 堂 書 籍 株 式 會 社

2633

139



終